
パラディソス・ストーリー

テルサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラディソス・ストーリー

【Nコード】

N1415V

【作者名】

テルサキ

【あらすじ】

イトウリープ島に住む子供、ケリイの特技は走る事。
それ以外には何もない。

……この物語は、そんな不器用な子供が「悪魔憑き」になってしまった事から巻き起こる、滑稽で泥くさい、傷だらけの青春劇です。

『最悪の思い出が、最高の友になる』

乗り越える、という事。大人になる、と云う事。

【カップリング情報／クールヘタレ×ロリシヨタ優等生】

■ ■ 序章 ■ ■ (前書き)

2011/7/23 掲載開始

*わりとお耽美な発言やシーンが含まれますので、念のためボーイズラブカテゴリに入れておりますが、糖度と呼べる物はおおよそ無いです。あえていうならばニアホモというジャンルなのだと認識ください。

全十八章構成。では、しばらくは拙物語にお付き合いくださいませ！

■ ■ 序章 ■ ■

イトウリープ島の空が茜色に色づき始め、今宵の月が薄っすらと山の稜線沿いに現れる頃。辺りを覆う冷気も次第に霧へと姿を変えていき、島は静けさを増す。初夏を迎え、色とりどりの花に飾られた街道から少し外れた薄暗い山道を歩けば、背の高いポプラの木々が不気味な影を落とし、鬱蒼と重なり合った榛の木の梢は、島民たちの近くで遠くで囁き始める。

——近年、この島には奇妙な噂が流れていた。

それは、島の子供の一人が悪魔に出会ったという内容だ。

この手の噂話は今も昔も世の中に溢れかえっていて、その全部が真かと問われれば、それは首を傾げるしかないだろう。ただ、この話：つまり、今から二年前、北の海に浮かぶこの孤島、イトウリープ島に住む、ほんの二百人足らずの島民を恐怖に突き落とし、以降も噂話として語り継がれる事になった出来事。これは、これだけは、紛れもない事実だというのだ。

その日、ケリイ・マシユーズは暗い夜道を全力で走っていた。

つい先程まで、唯一の友人であるユアン・ブルイットの誕生日パーティーに出席していたのだが、いざプレゼントを渡そうという段階になってようやく、ケリイは自分が手ぶらでこの場に参加していたことに気づいたのだ。

イトウリープ島には中等学校以上の設備がない為、十歳を越える子供の数が非常に少ない。どこかの誰かが騒ぎ起こした学歴至上主義の波は、今ではこんな小さな島にまで流れ着いていて、世の親はこぞって、我が子を大陸の学校に通わせたがる。

故に、この島では十歳を越える子供は貴重で、今日で十二歳になるユアンなどは、彼と同じ年齢の友人であるケリイを大のお気に入りにしていた。

そのケリイがこの日、プレゼントを持ち合わせなかった事実が知れ渡れば、ユアンに恥ずかしい思いをさせてしまうだろう。

「…しまった。忘れてきちゃったんだ」

元から白い肌を、より一層青白くし、ケリイは消え入りそうな声で呟いた。

先程、慌てて家を出てきたのがいけなかったらしい。義母がこの日の為に気合を入れて作ってくれた糖蜜林檎のパイを、恐らく居間のテーブルあたりに置き忘れてきてしまったようだ。

「取りに帰らないと…」

ちらりと視線を遣れば、ユアンは今、彼の誕生日を祝う人々の中で、プレゼントのお礼を言うのに夢中で、ケリイの様子に気づく素振りはない。抜け出すなら今のうちだろう。

幸い、ケリイは足の速さに自信があった。のっぽな体格が幸いしてか、島の子供たちの中では誰よりも速い。ブルーイット宅を一旦出たなら、後は街道を使わず、裏山の小道を一直線に突っ切れば良い。ケリイの家には一分足らずで着く筈だ。

仮に誰かがケリイの不在に気づいたとしても、その程度の時間であれば、ユアンの機嫌を損ねることはないだろう。ケリイは走り出した。

家に戻り、パイの入ったバスケットを掴み取って、また走って…
そして今に至る。

夜空に浮かぶ三日月の、その剥き出しの視線は妙に冷たく感じられ、足元の草藪からは湿った土の香りが立ち昇ってくる。切れる息の狭間で僅かな唾液を嚥下した。見慣れた道なりも、月影に覆われてしまえば、妙に薄気味悪い。明るい光と、賑やかな笑い声で包まれたブルーイット宅が恋しくて、ケリイはよりいっそう足を速める。

…そしてそれがいけなかったらしい。地面に転がる何かに足を取られたケリイは派手にすっ転び、傾斜に身体を持って行かれ一回転次の瞬間、星の輝く夜空を眺めていた。

「…はあ」

痛い、後頭部が。悲鳴をあげたいところだったが、何故かその時、真っ先にケリイの口からこぼれ出たのは、気の抜けた溜息だった。

「パイが…落ちちゃった」

まさに、踏んだり蹴ったりである。転んだ拍子にバスケットから飛び出したパイが今、ケリイの背中にある。ゆつくりと上半身を起こし、潰れたパイと対面すれば、胸に溢れる後悔の嵐。地面に生えている羊歯の群れを両手で握り締め、ケリイは頂垂れた。

この時、握り締めた拳の中に、一本だけ四つ葉のクローバーが混ざっていることに気づいたが、今のケリイにとっては焼け石に水である。シヨックで霞むケリイの視界の隅で、一つの星が瞬いて流れた。「ああ。あの星の中から一つだけでも、ユアンにあげることが出来たら良いのに」

もしそれが出来たなら素敵である。ロマンチストなユアンのことだ、きっと心から喜んでくれるに違いない。…と、思わずそんな空想に浸ってしまうケリイだが、そんな事をしたところで、この惨めな状況が変わるわけがない。とにかく早くブルーイット宅に戻って、そしてユアンに謝らなくてはいけないだろう。

深呼吸一つの後、ケリイは立ち上がる。吊ズボンのポケットに両手をつ込み、自分を転ばせた元凶を睨み遣れば、そこに土を被った奇妙な箱を発見した。

貨物運びの馬車が落として行ったのか、一抱えはある大きさの白銀色の箱である。そして、その表面には、黄金色の刻印があった。

『希望は常に、ここに眠る』

…なにが希望だよ。と、ケリイは溜息を零す。こんな物に躓いてしまっなんて、なんという不運だろうか。悔しさに唇を噛み締めるが、ケリイも一度躓いてしまった手前、このまま放置していくのは気が引ける。次に道行く誰かの為に脇に除けておくのが良いだろう。

そう判断し、ケリイは箱に手をかけた。：頭上から聞こえる奇妙な音に気づいたのは、その時だった。

——ミシ… ツミシツ… バキッ

今の今まで視界を覆っていたポプラの枝が、見る見るうちに裂けて地面に散らばっていく。

そしてその次の瞬間には、ケリイの白い肌が裂けていた。

夜風で冷えたその頬には深い一文字の傷が浮き上がり、真新しい血は傷口から顎へと幾重もの筋を作って垂れていく。不可視の爪により傷つけられたケリイが感じるのは痛み、そしてそれ以上の驚愕である。

「…は？」

自分の身に起きていることが、全く理解できない。ただでさえ大きい黒い瞳を、今ではこれ以上もないくらい大きく見開き、身体を凍りつかせたケリイは、信じられない気持ちで自分から流れ出る血液に触れる。

：どこからか、低く唸る獣の声が聞こえた。

息を飲む。その一瞬のうちに、ケリイの隣に聳えていたポプラの幹が一本折れたのがわかった。反射的に、持っていた木箱を頭上に掲げる。自分の方に倒れる重量級の幹をこれで辛うじて制するが、保つて一瞬。十二歳の子供にとって、耐え切れる重さではないのだ。

箱を支える両腕は見る見るうちに震え、ケリイの額に脂汗が滲び始める。

——なんで？僕はどうなっちゃってるの？

恐怖のあまり、ケリイの思考は乱れた。頬の傷口で、ぬるりと蠢く舌の感触があり、耳元で、荒い息遣いが聞こえる。獲物を捕らえた肉食獣の息遣い。皮膚を溶かす唾液の感触に、ケリイは短く悲鳴を上げた。

——僕は死ぬの？

死んで、この見えない何かに食べられてしまうのだろうか。だとし

たら、そんな恐ろしい事はない。

ケリイは八歳の時に実の両親を失っていたが、その原因は、遠く
の空で起きた飛行船の事故だった。新聞での報道でしか知る事ので
きなかった“死”は、遺体も遺品も残さない形だけのものに過ぎず、
幼いケリイに与えられたのは、漠然とした喪失感だけだった。
その事を思い出し、ケリイはただ理解する。

——死ぬって…やっぱこういう事なんだね。

きつと自分も、こうして何も理解できないし、何も残せない。薄ま
っていく意識の淵で、ケリイは覚悟を決めた。

ミシリと、腕の中にある箱に輝が入る。この箱が潰れた時、それ
がきつと命の終わりなのだろう。目の前に迫る黒い幹を虚ろな瞳で
見つめる。辛うじて巨木を支えていたケリイの両腕は既に感覚を失
っており、自由が利かない。

…そうしてゆっくりと身体を離れようとした意識。だが次の瞬間、
激しい光の渦に包まれたケリイは、驚愕のあまり我に返っていた。

「…っ!？」

ケリイの腕の中で、箱が炎を噴出している。それもただの炎ではな
い、見た事もないような、真っ黒な炎だ。

『…二げる…』

声が聞こえた。黒い炎は見る見るうちに辺りに広がり、木を、地面
を埋め尽くしていった。

炎に包まれた木箱が砕け、続いて倒れ掛かっていたポプラの幹が吹
き飛ぶ。

『ハヤク…二げるのだ』

凄まじい勢いの炎に、先程まで血肉を貪っていた不可視の獣が、怯
えたように離れていくのがわかる。黒い炎はケリイ自身にまで及ん
でいたが、不思議と、当人に熱さや痛みなどの苦痛はなかった。む
しろ、炎に触れた箇所から痛みが引いていくのを感じる。

ふと自身の頬に手を添える。そこにあった筈の傷が、綺麗に消え

ている事に気づいた。

『二げろ…ケリイ!』

名を呼ばれ、弾かれたようにケリイは走り出す。

息を切らせて振り返ると、既にそこに地面を覆いつくすような炎はない。

あるのは背の高い一人の男の姿。黒い炎を衣のように頭まですっぽりと被り、黄金色の瞳に灰色の影を躍らせた、恐ろしく美しい顔の男。

——…悪魔?

禍々しさすら感じるその美貌に、ケリイはそう勘繰らずにはいられない。だがしかし、それが本当に悪魔だとして、ケリイに一体何ができるだろう。今はただ、一心に逃げる事しか思い浮かばない。ケリイは再度炎に背を向け、今度は振り返ることなく走り出した。

無我夢中でポプラの並木を抜け、多くの羊歯と、山吹色の花を付けた釣浮草に囲まれた坂道を駆け下りる。気がつけば目の前に、ブルーイット宅の賑やかな灯りが見えていた。

「どこに行つてたの? 心配したじゃないか」

わざわざ庭先にまで出て、そうケリイを迎えてくれたユアンは、友人の只ならぬ様子に僅かに眉を潜める。半ば倒れこむようにしてユアンの差し出した手を掴んだケリイを、そっと抱き寄せ、ユアンは問いかけた。

「どうしたの? まるで泣き出しそうな顔をしてるけど…」

身体もこんなに冷たいし、何かあった?」

「…何でもない」

友人の優しい言葉に魂の底から安堵の息を吐く。だがしかし、この穏やかな人物に、事の真実を話す気力は、今のケリイにはなかった。「ごめんね。勝手に抜け出して…ごめん」

震える声でそう呟き、目の前の小柄な少年の肩にだらしなく顔を埋める。困ったように首を傾げ、それでも優しくケリイの肩を撫でて

くれるユアンの手が温かった。

…ふと気がつけば、そんなユアンの背後から近づいてくる足音がある。それも一人や二人ではない。多くの子供のざわめき声と共に、その群れはやってきた。

「あ。ケリイだ。どこ行つてたんだよお前」

「皆、お前待ちしてたんだぞ」

「ケリイがプレゼント出すまで、ケーキはお預けなんだから。早くしてよね」

わいわいと集まってくるのは、今日の為に綺麗に着飾った子供たちの群れだ。

…ケリイは、ここできるよう、泥と汗にまみれた自分のみずばらしさと、誕生日プレゼントを用意できていない事実を思い出した。

「う…あ…」

羞恥に頬を染め、ケリイは慌ててユアンから身体を離す。

とにかく、まずは謝らなくては。ポケットの中に突っ込んだ右手を強く握り締め、勇気を振り絞る。…途端、記憶の端から蘇るものがあつた。

「あ…あの、これ…」

情けない気持ちで、ケリイはポケットから右拳を抜き、そのままユアンに捧げ出した。

ケリイが握っているのはポケットの中で圧迫され、クタクタに成り果てた四葉のクローバーである。先程たまたま摘み取ったアレだ。

「…なに。これ？」

不思議そうに眉を潜め、クローバーを受け取るユアン。当然だ、皆から豪華なプレゼントを贈られていたユアンが、こんな雑草で満足する筈はない。しょんぼりと項垂れ、ケリイは懺悔した。

「実は…ユアンへのプレゼント、地面に落として駄目にしちゃった

んだ。

だからせめて…これ」

情けなくて震える唇で、ケリイは言う。

「…本当、僕って駄目だよな。いつその事、僕が君の為の流れ星になれたら良かったんだ。

…」
そしたらユアンの願い事を叶えてから、消える事もできたのにね

結局、何の価値もないプレゼントをしてしまった事が最悪だ。ケリイはそう、溜息を零す。幻滅したユアンの表情を見るのが怖くて、恐る恐る顔を上げたケリイはその時、信じられないくらい頬を紅潮させた友人の顔を見た。

「…キザ！」

数瞬の間の後、そう野次を飛ばす奴が現れる。その意味がわからず、ケリイは首を傾げてしまった。そして、野次の主を問いただそうと身を乗り出したその身体は、気がつけばユアンに抱きしめられていたのだ。

「き…消えちゃうなんて悲しい事言わないでよ。

僕、ケリイにお祝いして貰えるだけですごく嬉しいんだから！」

何が起こったか理解できず、戸惑うケリイにギュっと抱きついたまま、ユアンは潤んだ瞳を持ち上げた。

「僕、このクローバーに一番大切な願い事かけるよ。

どんな願い事するか決まったら、真っ先にケリイに教えてあげるから…」

「…えっ!？」

目の前の友人の興奮が理解できず、ケリイは拳動不審に視線を泳がせる。

…そして、そんな二人の様子を前に、一人の男の子がニヤけ顔で呟いた。

「…さすが、ユアンの王子様だなあ」

その言葉に、ようやく事態を把握したケリイは、もうは赤面するしかない。

ケリイとユアンは親友だが、余りにも仲が良いので、二人はデキていると噂を立てる輩が居るのだ。勿論、その噂に根拠などない。

「馬鹿か！僕は別にそんなつもりでやっただんじやない！」

そう怒鳴るケリイの様子に、ユアンはカラカラと笑い声を上げ、ようやく身体を離す。

「そうだよ。ケリイはいつだって、僕の王子様だからね」

ケリイの恥じらいを無視して、ユアンまでもが悪ノリをしてしまうのだから始末がつかない。がつくりと肩を落としたケリイはこの時、その長い前髪で表情を隠しつつも、実は安堵の笑みを浮かべていた。

——何はともあれ、ユアンが喜んでくれてよかった。

大層恐ろしい目には遭ってしまったが、夢でも見ていたのだと思えば済む問題だし、結果オーライである。もうこの際、あの悪魔のことは忘れよう。そして素直にこのパーティを楽しもう。そう決めてケリイは自らの恐怖を振り切った。

実際、その後ケリイは他の子供たちと同じように、楽しく食事を進めていたし、ユアンから提案されるゲームにも参加した。会の最後に撮影した記念写真の中でも、いつも通りの笑顔を作る事だって出来ていたのだ。そう、このまま何事もなければ、ケリイはこの日の出来事を綺麗に忘れる事が出来たに違いない。だがしかし、それは上手く行かなかった。

翌々日、つまりこの日の記念写真が焼き上がった当日の朝である。ケリイは、自身に起きた災難を白状せねばならない事態に陥っていた。

「ぎゃああああー！」

「ひいやあああー！！！」

学校の教室で、出来立ての写真を囲むのは、件の会の参加者達。彼らが次々と卒倒していくその原因は、勿論この写真にあった。

「…なんで」

呆然と呟いたのはケリイ。

「ね。これってやつぱり、お被いとかしてもらったほうがいいのかな？」

そう不安げに言うのはユアン。二人とも視線の先は一つである。

写真の中心、ユアンと並んで微笑んでいるケリイの背後に、会場に居なかった筈の奇妙な男の影が写っている。つまりこれは、心霊写真なのだ。

「…しかもただの心霊写真ではない。痛む額を押さえつつ、ケリイは呻き声を上げた。

「なんで…あの時の悪魔が」

写真の中にいるのはあの日見た悪夢の主人公。黒い炎に身を包んだ見目麗しい男性である。

悪魔が写りこんでいるという事だけでも恐ろしいのに、更なる問題は、その悪魔のとっているポーズについてだった。

——なぜ、悪魔がピースサインをしているんだ？

しかも最高の笑顔で。完全に理解不能である。

こうしてケリイは、皆に例の災難を皆に語る羽目になり、その話は、謎の心霊写真の件と共に島中に広まった。以上が、このイトウリープ島を恐怖に陥れる噂話の全貌…と、言ってしまうと若干の語弊があるので、ここで一つだけ補足させてもらう。

この事件から二年経った今に至り、同様の心霊写真の数は十五枚に達している。

…そう。島民の恐怖の対象は、既に心霊写真や謎の悪魔に留まらなかった。

真の恐怖は、あの日以来、写真を撮れば必ず悪魔が写るといわくが付いた

ケリィ・マシューズが存在にあったのだ。

■ ■ 第一章 ■ ■

悪魔憑き。それが、今年で十四歳を迎えるケリイ・マシューズの渾名だった。

なんとも悲惨な渾名であるが、元来から惨めな境遇に慣れているケリイは、特に抵抗する事もなく、この呼び名を受け入れていた。

「“災害”よりは幾分かマシだろ？」

自分の事を心配してくれる唯一の友に対しても、ケリイはそう笑ってみせる。

幼くして両親を亡くしたケリイの身元は当初、近所に住むカーター夫妻が引き受ける事になっていた。しかし、ケリイの得たこの新しい家庭は、一ヶ月と持たないうちに崩壊する事になる。このカーター夫妻というのが、当時問題視されていたケシの密輸騒動に一役買っていたらしく、大陸の警察に嗅ぎ付けられてしまったのだ。

幼いケリイが事態を一つも理解できないうちに、カーター夫妻は遠い国の牢屋に閉じ込められてしまった。そして、まさに負の連鎖としか言えないこの状況の中で、一度も涙を見せなかった変わり者の子供には「災害」という渾名が付いてしまったのだ。

誰にも忌み嫌われた幼少時代、それを救ってくれたのは、現在のケリイの義父母でもあるアーサー・モーズレイ牧師夫妻と、島の子供達の中で唯一、偏見を持たずにケリイと接してくれたユアン・ブルーイットが存在だった。彼らが周囲に働きかけ、ケリイを普通の子供として知らしめてくれたお陰で、今のケリイは存在できる。そう言っても過言ではないだろう。

「まったく。これは君自身にとって不名誉なことなんだから、もっと積極的に否定していかなくてはいけない問題なんだよ？」

久しぶりにつけられた惨めな渾名を、淡々と受け止めているケリイに、その唯一の親友であるユアンは深く溜息をつく。

「いや。悪魔憑きなのは事実だからね。否定のしようもないでしょ」
むしろ不名誉なのは自分ではなく、モーズレイ夫妻の方だ。そうケリイは思う。

親切心で拾った孤児が、悪魔憑きになってしまっなんて。これは牧師としての評判に関わる事態なのではないだろうか。いつも柔和な笑顔で、ケリイを励まし、時に諭してくれるあの老夫婦を思う度に、ケリイの中で罪悪感が暴れ始めた。

「教会では悪魔祓いとか…できないの？」

「してもらったよ。この二年のうちに二十回」

溜息交じりに告げたその回数に、ユアンは乾いた笑い声を返した。

「それで…相変わらずこの写真？」

そう言うって指差すのは、教室の机の上に並べられた真新しい写真の数々。どれも、昨日十四歳を迎えたユアンの誕生日パーティーで撮影された代物だ。今だに、ケリイを写真に収めようと考えてるつわものは、ユアンくらいだろう。

そこには楽しそうな笑顔で寄り添うケリイとユアンの二人の姿が、当然のように悪魔とセットで写されている。ピースサインをしていた姿も記憶に新しいが、最近の悪魔の写り方は奇をてらい過ぎてるとしか言いようがない。ケリイと肩を組んでみたり、被写体よりもカメラに近い位置でウィンクをかましたり。やりたい放題だ。

「…本当、回を増すごとに調子づいてる気がするよ」

そんな美形悪魔とのスリーショット写真を片手に、ユアンは呆れたように瞼を伏せる。

蜂蜜色の髪がサラリと流れ、同色の睫が、翡翠色の眼差しの上に震える影を落とした。こんなユアンの何気ない仕草にさえ目を奪われ、ケリイは僅かに息を飲む。

——本当に、ユアンは綺麗だな。

幼い頃から天使のような愛らしさを持つ少年だった彼の魅力は、歳を重ねるごとにどんどん増していくように思う。透き通るような白い肌と、ほっそりとした首元から連なる繊細な顎のラインは、湖畔の淵で黄昏る水仙を思わせる美しさだ。

生まれつき心臓が弱く、人並みに運動できないという難点を抱えているものの、その穏やかな精神と、親切心に溢れた心には非の打ちようがなく。生来の器用さも相まって、ユアンに向けられる人望は厚い。

そもそも、自分のようなみずばらしい人間が近づいてはいけない存在のような気がするのに。何故、ユアンはこんなにも懇意にケリイと向かい合ってくれるのだろう。

窓硝子に映りこむ自分の姿に気づき、ケリイはそつと溜息をつく。

癖がない事だけが取り柄のような黒髪は、特に艶もなく、無造作に顔の周りを覆っている。長すぎる前髪の下から時折覗く瞳は真っ黒としか言いようが無い程に無機質で、この世の全ての不幸を具現化したかのようだ。笑わなければ、冷たすぎるとしか評価されない眼差しと、同年代の仲間の中でも抜き出て高い背は、会う人に恐怖を与えてしまうだろう。そんな事を考えれば考える程に、自分とユアンの品格の差を突きつけられる事に気づき、ケリイは窓から目を離れた。

「ユアンはさ、この学校卒業したらどうするの？」

目の前の友人と目を合わせるでもなく、ケリイはただボソリと問いかけた。

ケリイとユアン。何もかもが違うこの二人の間に友情があるのは、学年内で唯一の同年齢だったからに過ぎない。ケリイは両親の死からの一連の不幸のせいで、ユアンは生まれつきの病弱さのせいで、他の同世代からは遅れる形で就学してしまった。その偶然が重なって、出会っただけなのだ。

そして十四歳になる現在では、二人とも揃って最終学年である。必要な単位も、ほぼ全て獲得しており、卒業の日は近かった。

――卒業すれば、ユアンと僕の関係は崩れてしまうだろう。

ケリイはそう確信していた。自分はユアンの情け深い性格に肖って友達になれただけなのだ。一度学校を離れたユアンが、ケリイのような下賤な人間に興味を持つことは殆どないだろう。そのことに一抹の寂しさを感じながら、ケリイはゆっくりとユアンを見遣る。

「この後のこと？…あまり考えたこともなかったけど」

ほんの少し驚いたように目を開き、ユアンはその綺麗な指先を顎に当てた。

考えるように虚空を睨んでいるが、そこからどんな答えが導き出されるかなんて、だいたい予想はついている。

今でこそ、この平和だけが取り得のイトウリープ島に馴染んで見られているが、ユアンは元々、大陸側の人間なのだ。父親は大陸でも屈指の大手工場に勤めているし、母親も名のある家の令嬢だったのだという。そんなユアンが母親と二人でこの島に渡ってきたのは、病弱なユアンを療養させる為に過ぎなかった。都会の汚染された空気に不安を抱いていたユアンの母親は、愛息子を豊かな自然の中で育てたいと願ったのだ。こうして、幼いユアンはこの孤島の土を踏み、今に至る。

確かに、こちらに来てからの彼は大陸に居た頃と比べ、大きな病気ににかかる事が無くなったらしい。ユアンは既に充分に健康で、そんな彼が何もないこの島に留まる理由は無いのだろう。

「大陸の学校に、行った方がいいんじゃないの？」

ユアンの本音を促す為のこの問いかけに、目の前にいる友人の顔がサッと青ざめていくのがわかった。

「なんで、そう思うの？」

「な…なんでって、そりゃ」

ユアンの翡翠色の瞳に僅かな怒りを感じ取り、ケリイは思わず肩を

竦める。

「ユアンは頭が良いから、きちんとした学校に通った方がいいだろうな。って、

思ったからだよ」

気圧されたあまり、震えてしまう声で告げる。すると、ユアンは露骨な溜息をついてみせた。

「なんだ…そんな理由か。別に僕、大陸の学校に興味なんてないよ」
そう力なく答えるユアン。ようやく戻った穏やかさに、ケリイはそっと胸を撫で下ろす。

ユアンとは、それなりに長く付き合ってきたと思うが、ケリイは彼の怒りのツボを未だに把握できていないのだ。普段穏やかな人間がキれると怖いというのは、常識みたいなものであり、これはユアンにも当てはまった。滅多にない事とはいえ、怒りに支配された彼は、氷の女王宛らに冷酷になる。その事を知っているから、ケリイもなるべく、彼の感情の地雷を踏まないように気をつけているのだ。

「へ…へえ。僕はてつきり、中等教育以上の設備がある学校に進むんだと思ってたよ」

「嫌だね。僕はこの島が好きなんだ。」

それに勉強なら、学校に行かなくて出来るだろ？」

怒りは解けたようだが、ユアンの声に滲む刺々しさに、ケリイは苦笑いを浮かべる。

「…それでケリイは？卒業したらどうするの？」

「僕は…早く自立できるよう、働くよ」

ユアンからの問いかけに、今度はケリイが、言い淀むことなく答える。

両親の死がきっかけか、はたまた「災害」と呼ばれたことがきっかけかは解らないが、ケリイは昔から人に面倒を見られる事に対して罪悪感を持っていた。今の両親は確かに優しいが、いつまでもそ

れに甘えていてはいけないと思う。早くお金を稼いで、一人前になって恩返しをしなければ。自身の罪に押しつぶされて死んでしまうに違いない。

「この前、教会裏のトマスさんが農地を増やすって話を聞いたんだよね。」

雇ってもらえないか、聞いてみようかと思ってるよ」

そんなケリイの言葉を、ユアンはコクコクと頷きながら聞いていたが、ふと妙な事を言い出した。

「そうになると、実の子供のいないモーズレイ牧師には跡継ぎがいなくなるってことだね」

「…へ？まあ…そりやそうなるけど」

教会は世襲制じゃないのだから、あまり気にしたことはなかったが。確かにモーズレイ夫妻は既に高齢だし、跡継ぎの問題は重要だったかもしれない。

「でも僕、神学が理解できるほど頭良くないし。」

それに、そんなに神様って好きじゃないし」

罰当たりな発言ではあるが、ケリイの特異な過去を思えば仕方がないことなのかもしれない。それを理解してか、ユアンは困ったように笑って、言った。

「僕は好きだよ、神様。」

だからさ、ケリイの代わりに僕がああ教会継ぐのはどうだろう？」

「は？」

実に突拍子もない発言であるが、件のユアンの瞳は、既にららんと輝いている。

「うん。いいアイデアだね。神学ならモーズレイさんから直接学べるし、

それに僕ってきつと、腕のいい牧師さんになれるよ」

あんぐりと、ケリイは口を開ける。なんという自信だろうか。しかしながら、ユアンの性格や才能を考えれば、この言葉も虚栄に聞こ

えないから始末に終えない。

「牧師さんになったら、真っ先にケリイに憑いてる悪魔、祓って上げるからね！」

「あ、本当に。それは助かるな……」

唐突に提示された身近な問題の解決策に、思わず喜んでしまった自分が恥ずかしく、ケリイ僅かに頬を染めた。

「……だからさ」

ユアンは言う。天使のような笑顔で。

「だからさ。僕とケリイはずっと一緒にいよう。それが良いよ」

無垢に告げられたその言葉が、不思議なくらい真っ直ぐに、ケリイの中に浸透していく。

——本当に、なんでユアンは僕の友達でいてくれるんだろう。

結局解決しなかったこの疑問を、今は忘れていいのかもしれない。言葉なく微笑みあった二人を、次の瞬間、授業開始の鐘が遮った。

「……あ。次、運動の授業だ」

気がつけば、教室から人気が引いていた。皆校庭に向かったらしい。「うん。頑張ってきてね。応援してるから」

そう言って微笑むユアンに、ケリイは軽く手を振って応える。

ユアンは運動の授業に参加できない。この時間は、スケッチブック片手に、教室の窓から皆の姿を眺めるのが彼の常だった。

ケリイたちの通う学校は一階建てで、壁は年季の入った赤煉瓦で造られている。

島にいる子供の数が少ないのだから、学校の規模は小さい。開校して今年で五十年になるらしいが、通う生徒の数も二十人を越えた事がないのだと、島の大人たちが言っていた。

当然、授業を教える先生は基本的に一人である。学校では、小さい子供も、大きい子供も、皆まとめて扱われるのがこの島の常識だ。

今も校庭には、年小組から高学年組までの生徒が揃っている。一

足遅れて校庭に走り出たケリイは、ちらりと窓の向こうのユアンに視線を向けた。彼は既にスケッチブックに鉛筆を走らせているように、真剣な眼差しを窓の向こうの全ての景色に注いでいる様子だ。

ケリイは過去に一度、彼の持つスケッチブックを覗いた事があったが、その画力は高く評価できる代物だった。一本の鉛筆で描かれたラインは、時に大胆に、時に繊細に紙面を踊っており、描き手がいかに目の前の景色を愛しているかが伝わって来るかのようだ。

天は人に二物を与えずという言葉があるが、何の間違いか、ユアンには二物も三物も与えられているような気がする。走る事以外に取り柄を持たないケリイとは大違いだ。

——でも。だからこそ……これだけは誰にも負けられない。

教師の吹く指笛の音を合図に、校庭に並んだ十二名の生徒は一斉に走り出す。横一列からスタートしたこの群れは、直ぐにケリイ一人に引率されるような隊形に変化する。

ケリイは走る事が大好きだ。今も昔も、多分これから先もずっと、この事だけは変わることはないように思える。

「は……っはっ……はっ！」

息を切らせて、ゴールに指定された白線を越えた。ケリイは、ダントツの一位だった。

「うーむ……なかなかマシユーズを越える奴が現れんなあ」

測定用の懐中時計片手に、苦笑いをする教師。その横を、ようやくケリイに追いついた二位と三位が走り抜けていった。

「悪魔憑きに負けたー！」

「しかたないよ。あいつ毎晩怪しい儀式して力を蓄えてるんだからゴールに辿りついた生徒らは、負け惜しみなのか、ただの悪口なのか、そんな事を言い始める。……悪魔は関係ないだろ？そう言ってやりたいのだが。」

「本当にな。悪魔憑きでさえなければ、

先生、お前を大陸の訓練学校に推薦してやるのに」

…この通り、大人の代表である教師までもが偏見に囚われているから困りものだ。

この気が滅入るような現実を忘れたくて、ケリイはもう一本、走りこみを決める。ヒュウと、高い口笛が、走っていくケリイの背後を追ってきた。ケリイは僅かに微笑み、窓の向こうにいる口笛の主に、高く手を上げて応える。

「最高、ケリイ！君が一番だ！」

嬉しそうに、ユアンが叫ぶのが聞こえた。そして、こんな時にもユアンの人望は役に立つ。

ユアンの声が響く中で、ケリイに野次を飛ばそうと考える人間は一人もいなかった。

一瞬静まり返った校庭を、ケリイは駆け抜ける。風と一体化したかのように心は透明で。

——もつと速くなりたい。

だからこそ、ケリイは願った。

——誰よりも速く、何よりも速く走ることができたら…！

もしかしたら、自分の失ったものが取り戻せるのかもしれない。ケリイにとって走る事とは、まるで祈りのようだった。

窓辺に座るユアンは、そんな親友の思いを知っている。だからこそ眩しくて、ただただ、見入っていた。

■ 第二章 ■

放課後、ユアンを家まで送り届ける事は、ケリイの日課になっていた。

多くの子供はこの放課後の時間、学校や付近の野山などで思い思いに遊んで過ごすのだが、ユアンにはそれができない。なのでいつもユアンは子供達の笑い声を背に、校舎の建つ丘を一人で下って行ってしまう。

その様子が余りにも寂しいので、付き添って帰るようになったのが入学した年の夏の出来事。以来、ケリイとユアンは毎日一緒に帰っている。

「たまには、他の皆と遊んで帰ったら？」

隣を歩く友人に向けて、ユアンは嬉しいような、困ったような顔で言う。

「いいよ別に。ユアンが居なくちゃ、遊んでも楽しくないし」

自分より年下で、尚且つ色眼鏡越しにしか人を判断しない子供達と遊ぶ事に、一体何の意味があるというのだろう。それだったら、早く家に帰って、教会の掃除でも手伝った方が随分と有意義だ。そう考えを告げたケリイに、ユアンは深い溜息を一つ、真剣な眼差しで言葉を紡いだ。

「ねえケリイ。本当に君ってば、勿体無いと思うんだ」

ケリイに友達が少ないのは、悪い渾名に振り回されている事以外にも理由があるのだと、そうユアンは言う。

「皆、ケリイは無愛想で酷い奴なんだって言うんだよ。

まずはこの印象からなんとかしないと」

「別にいいよ。皆にとっては、それが事実なんだろうから」

眉を潜めて、ケリイは返す。人を信じるのが苦手なケリイにとって、友情ほど面倒くさいものはない。ユアンとの関係がこうして続いて

いるのは、彼の存在が、ケリイにとって特別だったというだけの話なのだ。孤独に慣れているケリイにとって、他人からこうして心配される事は、少々鬱陶しく思えた。

…そんなケリイの心情を察したのだろう。途端、ユアンは口を閉ざす。

結局、彼が次の言葉を紡いだのは、ブルイット宅の生垣に咲くスコッチローズの、その白い花が見えてきた頃だった。

「ケリイ。きつと君は、僕が今まで出会ったどんな人よりも、優しいんだと思うよ」

真っ直ぐにケリイを見つめ、ユアンは勇気を振り絞るようにそう言う。余りにも澄んだ翡翠色の瞳に圧倒され、言葉を失ってしまったケリイは、目の前の友人の顔色が、血色良く変化していくのを見た。

「…あ、あの。今日もありがとう…また明日ね！」

そして、遂には沈黙に耐え切れなくなったのだろう。そんな中途半端な挨拶を残し、ユアンは慌てて家の中に駆けて行ってしまふ。彼からの想いを伝えられたケリイは、その場に立ち尽くしたまま、暫く呆けていたが、

「ユアンは…本当に変わってるな」

そう呟き、踵を翻した。

ケリイのことを優しいと表現する人間は、恐らくユアン以外存在しないのではないかと思う。ケリイの感情は、育ての親のモーズレイ氏ですら時折溜息をついてしまう程に淡泊で、優しさや愛情というものの存在感は、限りなく零に近かった。何時からそんな性格になってしまったのか、それは本人にもわからない。ただ、両親の死を知ったあの夏の日に、涙の一滴も零せなかったことを考えれば、これは生まれつきなのかもしれない。

「僕ほど心の冷たい人間はいないのに」

足元に咲くキンポウゲの小さな花卉を見つめる黒い瞳には、諦めと虚無の炎が揺らいでいる。

ケリイは両親の思い出がない。いや、ある筈なのだが、どうしても思い出せないのだ。

時折、記憶を辿ろうと試みるのだが上手く行かない。真剣に取り組んだところで、思い出せるのは、事故を報道した新聞記事の内容までだった。

新大陸開拓の夢と三十名を越える専門家たちを乗せ、発進した巨大飛行船は、三ヶ月間の旅の末、大空で爆発を起こし、そのまま北東の海に墜落した。一人の生存者も期待出来ない程に、それは悲惨な事故だったのだという。

ケリイの父親であるディアン・マシューズは、大陸でも、それに名の通った地質学博士だった。妻であるアデルもまた、考古学を研究する先鋭として実績を上げていた為、二人とも今回の計画に組み込まれていたのだ。

新聞に掲載された写真には、飛行船に印字された“楽園”を意味する異国語と、その機体を包み込む爆煙が克明に写し出されていて、この事故が紛れも無い事実であることを知らせてくれる。その白黒の画は、まるでケリイそのもののように冷たく、現実を捉えて見えた。

「きっと、父さんも母さんも、僕のこと嫌ってたんだろうな」

無気力に、ケリイは呟く。マシューズ夫妻はきっと、ろくな感情も持たない無愛想な我が子に呆れていたのだろう。だからこそ、幼いケリイを一人残し、危険な旅に出発する覚悟を決めたのだ。ケリイはそう確信し、軽く瞳を伏せ…そしてふと違和感に気づく。

何故、自分は、森の中を歩いているのだろうか。

どうも、ぼーっとしすぎていたらしい。ブルーイト宅に背を向けて歩き始めてから数分が経過していたが、一向に街道が見えてくる気配がない。辺りには白樺の細い枝が犇っていて、緑は香り高く大地を覆っている。うっかり横道に入ってしまったと見て間違いな

いだろう。

——マズイぞ…。

妙に見覚えのある一帯に辿り着き、ケリイは思わず足を止める。立ち並ぶ白樺の幹の根元には、炎に舐められた黒土が未だに存在していた。

そう、ここはあの時と同じ場所。二年前、ケリイが悪魔に出会い、取り憑かれた場所だったのだ。ケリイは、あの事件以来、この場所を通らないよう極力気をつけて歩いてきた。その筈なのに、今日はつい、油断をしてしまっていたようだ。

——ああ…やっぱり、これはかなりマズイ。

そう額を押さえつつ、ケリイは慎重に周囲を見渡した。心臓の中に悪い予感が満ちていくのを感じる。わざと深く息を吸ってみるが、速まり始めた鼓動を抑えることはできない。

とにかく、早くこの場を離れなくては。ケリイがそう焦る理由の一つには、勿論あの事件で植えつけられた恐怖心があった。だが、それ以上に本能が告げるのだ。この場所は危険なのだ。そして、ケリイのこうした勘は良く当たった。

…シュつと、風を切る音が聞こえた。いつの間にやら、空には灰色の雲が走り、その切れ端は太陽に影を落としている。ゾワゾワと背筋を這う冷たい気配を感じ、思わず身を竦ませたケリイは次の瞬間、幼い子供の悲鳴を聞いた。

「…！？」

顔を跳ね上げ、木葉のざわめきに聴覚を集中させる。続いて聞こえたのは、重たい何かが地面に衝突する音。その方角から判断するに、先程の悲鳴の主は今、比較的ケリイに近い場所にいるらしい。

——まさか、あの化け物が現れたのか？

そして二年前のケリイと同様に、見えない爪の標的にされた哀れな子供がいるのだろうか。ケリイは一瞬こみ上げてきた躊躇いを飲み込んで、悲鳴の聞こえて来た方向に身体を向けた。被害者がいるの

ならば、助けなくてはなるまい。二年前に自分が味わった恐怖が、他人に襲い掛かっている事を考えると、ケリイの心はざわついた。ゆっくりと慎重に、立ち並ぶ木々の狭間を縫い歩いて行く。低い岩壁を乗り越えると、途端に視界は開けた。

そこに広がるのは、地面を覆う羊歯の群れと、深い藍色の湖畔である。熱い夏場などは水遊びの子供たちで賑わう場所であるが、七月のイトウリープ島では未だ気温も低く、湖畔に現れる人影はない。そう、本来ならば。

「……誰？」

背の高い釣浮草の陰に身を潜め、ケリイは呟く。冷たい湖の淵に見知らぬ少女の横顔があったのだ。年の頃は四・五歳くらいだろうか。黒曜石のようなつぶらな瞳と薔薇色の頬が愛らしく、線の細いその立ち姿は、まるで森の木々に抱かれて育った妖精のようだ。

——…あんな子供、僕は知らない。

なのに妙に懐かしい気がしてしまって、ケリイは眉を潜める。

……どこかで会った相手なのだろうか。記憶の中に思い当たる顔はないか探ってみるが、答えは出ない。

「観光客……にしては、時期が変だし」

首を傾げ、ケリイは言う。真冬のイトウリープ島では大きな祭りが行われる為、それを目当てに集まる人間は多い。しかし今は初夏なのである。観光する価値があるとは到底思えない。

奇妙に思いながら見つめるその視線の先で、少女は水辺に向かって一歩、足を踏み出したようだった。身に纏うワンピースが光の加減で銀色に輝き、広く膨らんだ袖は彼女が歩く度にヒラヒラと揺れる。ケリイには見慣れないタイプの衣装であるが、これが大陸の流行というやつなのだろうか。見る程に神秘的な姿である。

「……くそっ……どこに隠れおった！」

両肩に垂らした艶やかな銀髪を振り乱し、少女は叫ぶ。ケリイは、

愛らしい唇から吐き出されたその余りにも汚い言葉に驚くと同時に、正面を向いた彼女のその姿に息を飲んだ。

幼女の顔面、その左半分には、獣の爪痕が赤く生々しい線を描いていたのだ。しかも、傷は一つだけではなく、古傷も合わせれば、数えるのも躊躇われる程に多い。

そのグロテスクさに、ケリイは小さく悲鳴を上げる。瞬間、幼女の鋭い眼差しに捕まった。

「にんげん…？」

黒い瞳を大きく見開き、幼女は呟く。どうやら、その存在に驚いたのはケリイの方だけではなかったらしい。幼女が「なぜ」と言葉を紡ごうとした次の瞬間である。その背後で強風が巻き起こった。

湖に小波を立て、幼女の銀髪を一房刈り取っていく。それはケリイにとつて、体験済みの光景だった。

「げっ！出た！」

「現れよったな！」

叫んだのは二人同時。不可視の獣はまたしてもその凶刃を振りかざし、ヒトの血肉を狙う。そして今回は、目の前の幼女がその標的にされているらしかった。その事を理解した途端、ケリイの身体は自動的に動き出す。不可視の獣に向かい、体制を整える幼女の、その華奢な身体を掬い取るように、ケリイは宙に身を投げ出した。

「…なっ！？」

幼女は驚きの声を上げる。当然だろう、突然現れた実も知らぬ人間に、その身体を掴み取られたのだ。これ程衝撃的な事もあるまい。

「と…とりあえず逃げよう！すぐ近くに教会があるから、そこまで行けばなんとかつ！」

唯一自信のある脚力だけを頼りに、ケリイは不可視の獣に背を向ける。

…正直、自分の行動が信じられないでいた。何故、見知らぬ子供の為に命を張らないといけないのだろう。途切れる息の狭間で、ケリイは自身に問いかける。

——僕で止めなくちゃいけない。

意識の奥で、そんな声が渦巻いているのがわかった。辛い思いをするのは、自分一人で充分なのだ。他人を巻き込んではいけない。そんな奇妙な義務感に突き動かされ、ケリイはただ、走っていたのだ。

「…っ！」

不意に、右脇腹を擦り抜ける気配を感じ取り、ケリイは左の茂みに倒れこんだ。目の前で切り裂かれ、落ちる木の枝を確認する。既に生きた心地はない。

「なぜ…見えておるのじゃ？」

腕の中に居る幼女からそう問われ、ケリイは震える声で答える。

「見えてない…避けられたのは運が良かっただけだよ」

立ち上がり、ケリイは再度走り出した。本当に、見えない相手との鬼ごっこ程に厄介なものはない。時折背後で巻き起こる旋風の他、敵の位置を確かめる術が無いのだ。このままでは、無事に教会まで辿りつく自信はない。その恐怖を振り切るように、無心に走り続けるケリイの胸元で、幼女はもどかしそうに言葉を紡いだ。

「い…いや、その事ではない。お主は何故——…わしの姿が見えておるのじゃ？」

しかしケリイがその言葉を聞き取るよりも早く。二人は足元の地面が崩れていく音を聞く。

「…！！？」

どうやら、敵は無意味にこちらを追い回していたわけではなかったようだ。先回りし、鋭い爪で傷つけられた地面は脆く、ケリイの足を飲み込んだ。土砂に自由を奪われたケリイは、耐え切れず倒れこみ、幼女は宙に舞う。そこに、不可視の獣は居た。

「ひ…っあああ！」

顔を上げることすら儘成らないケリイの耳に、幼女の悲鳴が轟いた。続いて聞こえるのは肉の抉れる鈍い音、そして聞き覚えのある

獣の息遣い。大地越しに強い振動が伝わり、ケリイは幼女が自ら獣に突進したのを知る。

「くそっ……この化け物が、人間までも巻き込みおって！」

……一体全体、先程からこの幼女は何を言っているのだろうか？

ケリイは口に溜まった土くれを吐き出すと、ようやく地面から顔を引き離れた。上半身を起こし、目の前で起きている異様な光景を見遣る。幼女は戦っていた。まるで敵の動きが見えているかのよう
に華麗に、幼女は幾度も銀色の軌跡を宙に描いた。

「嘘……だろ？」

口調こそ、妙に大人びているとはいえ、相手はケリイよりも一回りも二回りも小さい女の子である。それが何故、あれだけの傷を負いながらも涙一つ見せないでいられるのだろう。何故、ケリイですら恐怖する未知の相手に、果敢に立ち向かっていけるのだろう。何もかもが理解不能で、ケリイは眩暈すら感じる。

「……逃げろ！」

不意に、幼女は叫ぶ。

「逃げて、この事は全て忘れろ！ここはわしが食い止める！」

それはケリイにとって、聞き覚えのある台詞だった。二年前のあの時、突然現れた悪魔も似た様な事を言っていたのだ。そしてケリイはその言葉どおり逃げて生き延びて、今に至る。

——これは……あの時と同じ状況なのだろうか。

呆然とした意識の中で、ケリイはそんな事を考えた。言われるままに逃げ出せば、きっとまた生き延びられる。平和な日常に戻る事ができる。それが解つても尚、ケリイの身体は動かなかった。

——……あんな小さな女の子を放っておけるわけじゃないか。

そう、今は二年前のあの時とは事情が違うのだ。

もしかしたら目の前の幼女も、人間ではないのかもしれない。しか

しそれでも、彼女は余りにも傷つき過ぎている。

「…っ…う！」

息を切らせた幼女の肌に、また新たな一線が刻まれた。水平に回転させた右腕が宙を薙ぐが、空振りらしい。どう見たって戦況は幼女に不利だった。ゆっくりと、ケリイは立ち上がる。

「そうだ…逃げないと」

俯き呟いたケリイに、幼女も声高らかに応じた。

「うむ。急げ！わしもそう長くはもた…ぬ！？」

そして次の瞬間、幼女は自分の身体が再度、ケリイの腕の中にあることを知る。

ケリイは走り出していた。

「おいっ！」

幼女は、驚愕のままに小さな拳を振りかざすが、ケリイは動じない。

「だっ…大丈夫。教会にはとても親切な牧師がいるんだ。きっと助けてもらえる！」

「馬鹿か！あの化物の狙いはわしだぞ。わしを置いていけば全て済むのじゃ！」

お主は巻き込まれているだけなんじゃぞ！？」

折角の綺麗な顔を、今は悔しげに歪め、幼女は叫ぶ。

「わしは、ここで奴を食い止めたいのじゃ。他に被害者を作るわけにはいかぬのじゃ。」

離してくれ！」

「…そんなの」

不意に、ケリイの唇から言葉が漏れる。それは、当人すら戸惑う程に冷たい響きの代物だった。

「そんなの、僕だって同じだ」

辛い思いをするのは、自分だけで良い。それは、ケリイにとっては優しさというよりも、自身のエゴに近い感情だった。存在自体を忌み嫌われ、人間らしさすらも失い始めている自分自身に、もし存

在意義が残っているのだとすれば、これが最後なのだろう。

ケリイは苦境に慣れている。例え死ぬことがあっても、悲しむ人間の数だって乏しい。そして、だからこそ見えてくる価値もある。その唯一の価値を、他人になんて奪われては堪らないではないか。

「僕で終わらせたいんだ。頼むから、僕以外の人間を襲わないでくれ！」

ケリイは叫ぶ。その内心を知るものからすれば、これ以上もなく自虐的な叫びに聞こえるだろう。何も知らない幼女は、目の前の狂気染みた言葉を理解できず、僅かに身を竦ませる。が、次の瞬間、幼女は更なる衝撃に目を見開いていた。

…ケリイの身体が燃えている。

「黒い炎…じゃと？」

それは、ケリイの胸の中心、おおよそ心臓がある辺りから噴出していた。炎は見る見るうちに全体に広がり、その腕に抱かれた幼女ごと漆黒に塗り上げようとする。不思議な事に、間近で燃える炎の熱が幼女には届かない。ただ、その勢いは凄まじく、まるで悲鳴のような爆音を立て燃え盛っていった。

「う…うわっ！なんだこれ！！」

遂には視界まで到達した炎に気づき、ケリイはようやく驚愕する。自分の身体を、見覚えのある炎が覆っている。二年前、あの悪魔が放ったものと同様、不気味な色の炎だ。

そしてそれは、敵を威嚇するには充分な威力を発揮したらしい。

ケリイは、炎の向こうに居る不可視の獣が、僅かに怯えているのを感じた。少しずつ、少しずつ。獣の気配が遠のいて行く。それと同時に、炎は益々勢いを増し、遂にケリイと幼女の視界は漆黒に堕ちる。こうなってしまうと、ケリイはもう、その場にへたり込むしかなかった。

——…僕に今、何が起きてるんだ？

必死になり思考を巡らせるが、結果は混乱するばかりである。

「――…そうか、お主が…奴に選ばれた人間…」

鼓膜を突き破るような轟音の中で、ふと、幼女の声が聞こえる。ケリイは、その言葉の意味を探りたいと思ったのだが、叶わなかった。

『 我に応えよ 』

唐突に、その言葉が脳内に響き渡ったのだ。

意識を激しく揺さぶられたケリイには、驚愕する暇すら与えられない。ふと気がつく頃には、眠りの海にクラクラ浮かぶ自分の姿があった。

■ ■ 第三章 ■ ■

『チカラがホしいか…』

ずしりと重い意識の向こう、誰かの囁き声が聞こえる。

——誰？

眠りの水を吸い込んで、どんどん沈んでいく身体は、既に自由が利かない。瞼を持ち上げる事すら出来ないようだ。

『力が欲しいのだろう…全ての苦難を、一人で飲み込む為の力が』
きつとここは、夢の中なのだろう。近くで、低く穏やかな声が囁いてる。まるで、遠い昔からケリイの心を見守っていたかのような、優しい声色。

——…欲しい。

だから、ケリイは応えた。

——あの女の子を守らないといけないんだ。その為の力が…欲しい。

不思議と、そこに恐怖はない。全身を覆う気だるさの中で、ケリイが唯一感じるのは安心感。幼子が母親の胸に抱かれた感覚に近いのかもしれない。気がつけば、ケリイは声の主を心から信頼していた。

『ならば呼べ、我が名を…呼ぶのだ』

声は言う。そうすれば、その力をケリイに与えんと。…当然、ケリイに逆らう意思がある筈もなかった。

——…名前を？

『そう、我が名は…』

ぼやけた意識の焦点を聴覚に集中させ、ケリイは聞く。

とにかく、この名を呼ばなくては。それだけで力を手に入れられるというのだ。これは呼ぶしかないではないか。

『我が名は——…エルピス』

「呼べるか」

そして次の瞬間、ケリイはつつこんでいた。まさか未知の何かに向かってこうも大胆に発言できるなんて。自分でもビックリである。
「…ていうか、何そのふざけた発音」

一瞬、ケリイが逆立ちしても出せない程に愛らしい声を聞いた気がする。神秘的な低い声の主と同一人物とは思えないほどに甲高く少々頭の弱そうな声質。この独特な発音にどんな意味が隠されているのかは解らない。しかしながら、これと同じような発音で名前を呼べる程、ケリイは器用ではないのだ。

…そして、そんなことを考え始めたせいだろうか。気がつけば、身体を支配していた虚脱感が消えているように感じる。徐々に冴えてくる意識に引つ張られ、ようやく瞼を持ち上げたケリイは、暗闇に浮かび上がる白い顔が、間近にあることに気づいた。

「うぎゃあああー!!」

思わず身体を仰け反らせ、叫んでしまうほどの近距離である。囁き声がやたらはつきりと聞こえると思っていいたら、声の主はこんな間近に存在していたのか。しかも、この恐怖を感じる程に整った顔立ちと、切れ長の瞼に秘められた黄金色の瞳は、ケリイにとって見覚えのある代物だった。

『…っち。先に催眠が解けてしまったか』

悪魔は美しい顔を僅かに歪め、そう呟く。そして次の瞬間、その口からは謎多き発言が飛び出していた。

『折角、ケリイの愛らしい声で呼んでもらうチャンスだったのに…』
「…はあ!？」

一体、何を言っているのだろう。この悪魔は。

眠りに落ちた当初の神秘的な雰囲気は何処へやら。今では既に、あの心靈写真と同様、ふざけたオーラしか感じられない。そんな不快感を顔に浮かべるケリイを前に、悪魔はふと、胡散臭い笑みを浮かべて囁いた。

『…フム。思ってたよりも意思が強いんだな。やはり気に入った。
このエルピスの力、与えてやろっ…』

そしてケリイがその言葉を理解するよりも早く、再度その意識は揺さぶられる。

霞む視界の中で、徐々に闇に溶けていく悪魔の顔と、急速に軽くなつていく身体。眠りの海から解放されるその感覚に、ケリイは息を飲む。

——…軽い。

そう今、ケリイの身体は余りにも軽すぎたのだ。しかも…気のせいだろうか、少々寒気がするような。

「…へつくち！」

「お、目を覚ましたようじゃな」

くしゃみの反動で身体を起こせば、目の前には不安げな幼女の姿がある。

身体を覆っていた炎は既に無いのだが、その代わり、視界の隅でヒラヒラ舞ってる黒い影がある。そつと手で掴んでみれば、それが黒いマントであることがわかった。どうやら、これが今、炎の代わりにケリイの身体を覆っているらしい

「…？」

今度は恐る恐る、立ち上がってみる。マントの隙間から吹き込む風が、妙に冷たい。悪い予感を胸に忍ばせつつ、ケリイはゆっくりと、視線を自らの胴体に落とした。

そこにあつた筈の服が消えている。

「うげ！」

そうしてケリイが悲鳴を上げたのは、何も素っ裸になっていたからではない。むしろ、素っ裸だったらどれ程良かったか。身体を覆う黒マントの下、ケリイが身に着けていたモノは、丈の短い黒パンツと、ギリギリ胸元を覆える幅の、黒い一枚布だけだったのだ。

しかも、足元には黒のロングブーツまで装着されている始末である。どう見たって、変態にしか見えない。そんなこんなで大変なことになっている胴体を、慌ててマントで隠し、ケリイは改めて叫ぶ。

「なんじゃこりゃあああ!!」

何故だ。何故こんな事になった。考えてはみるが、混乱する頭で答えを探るなんて至難の技である。そんなケリイを宥めたのは、この状況下において、妙に冷静な少女の声だった。

「恐れるな。これがキボウツキとしての力が目覚めた証じゃ。」

淡々と、少女は言う。その澄んだ瞳に戸惑いはない。まるで、ケリイの身に起きた出来事の全てを理解しているかのようだ。ケリイは恐る恐る問う。

「キボウツキって…?」

聞慣れない単語である。この少女は、一体何を知っているというのだろうか。

僅かに眉根を寄せたケリイに向かい、少女はまるで同情するかのようになんて優しく、答えた。

「封じられた災厄…エルピスの力を得た者の通称じゃ」

「え…エルピス!?あの悪魔…じゃあ、これはあの悪魔のせいなのか!?!」

そしてケリイは、その回答に、思わず声を荒げてしまう。

原因は奴だったのか、しかし一体、何の意味があつてこんな事を…?そう戸惑いを露にする様子に、少女は肩を竦めて見せた。

「エルピスはわしの仲間じゃ。確かに見た目は怪しいが、あれでも神の僕なんじゃぞ」

わしも奴も、地上に起きる災害を未然に防ぐ為に存在しておる」

本来、二人は天界に住む立場であると、少女は語った。神の舟に乗り、そこで地上を襲う災厄を取り締まっているらしい。…そう、やはり彼らは人間ではなかったのだ。なんとなく予想出来ていたケリイからすれば、それは差して驚くべき事実ではない。むしろ、今

説明して欲しいのは全く別の件：

「——そして、お主には大変申し訳ない事をしてしまったと思っておるが…」

混乱と不満で一杯なケリイの内心を察したのだろう。困ったように、幼女は溜息をついた。

「わしらは今、少々手強い災厄…スリープシスと呼ばれる化物を追いかけておる。

これを討つ為にはどうしても、地上の人間の力が必要で、ゆえにお主は選ばれた」

…キボウツキ、それはスリープシスと戦う戦士なのだと幼女は言う。

「…戦士って。え？この格好で？」

ポカンと口を開き、ケリイは改めて自身の珍装備を見やる。戦士に選ばれた事よりも、この防御力皆無の扮装で戦えと言われた事が衝撃だった。

「キボウツキに選ばれた以上、お主は天使にすら近い戦闘能力を得ておる筈じゃ。

その格好は…エルピスの趣味の問題じゃから、気にするでない」あくまで淡々と、幼女は説明しているが、当然ケリイは腑に落ちない。納得できるわけが無い。

「…これが趣味って、ただの変態じゃないか」

「そればかりは、わしも否定できぬな」

ポリポリと頭を掻き、幼女は苦笑する。そしてそのまま、ケリイの背後を指差した。

「ほれ、キボウツキになったお主には見えるじゃろ。

あれがわしらの倒すべきスリープシス。夢喰いのサナトスじゃ」

そう示され、ケリイは恐る恐る振り返る。低く枝を伸ばすハイマツの上、つい先程まで何の姿も無かった筈の場所にそれは居た。初

めて目にしたその正体に、ケリイは思わず一步後退してしまう。

「嘘…だろ…？」

それは一見、仔馬によく似ていた。純白の毛並みと長く優雅な金褐色の鬣、そして、濡れて輝く黄金の瞳を持ったそれは、余りにも美しい。

「あんな綺麗な動物に僕、襲われてたわけ？」

荒い息使いに、血肉を喰らう下卑た姿勢。自身が知ってる不可視の獣の素性が、目の前にいる美しい生き物にどうしても当てはまらない。

「いや…騙されるな。あれは擬態じゃ」

サナトスの容姿に呆けるケリイの様子に、返す少女の声は自然と低くなる。警戒心の足りなさを、暗に注意しているのだろう。その厳しい眼差しは今、サナトスの背後にあった。その動きに連れられて、ケリイも視線を動かし…瞬間気づく。

サナトスの美しい姿の背後に連なるとす黒い影がある。一見、巨大な黒い尻尾が揺れているように見えなくも無いが、その毛束の一つ一つに、はママシのような頭部が付いている。あれがサナトスの本体なのだろうか…

「スリープシスは、美しい擬態を持って人間に取り入る。

遂には魂ごと持っていかれてしまうぞ」

「っひえ…」

改めて、その禍々しさに気づき、ケリイは身を震わせた。なんでまた、こんな薄気味悪い輩と対峙しなくてはいけないのだろう。

——…グルル…

ふと、サナトスの唸り声が聞こえた。見れば、美しい筈の擬態は、その額に醜惡な皺を刻み、ケリイ等を睨みつけている。闇の中で真紅の瞳が瞬き、複数の頭部が、舐めるようにこちらを観察しているのがわかった。

「ふむ…エルピスの力を警戒できるだけの知恵はあるようじゃな。

急いで倒さねば、逃げられてしまいかもしれぬ」

「え！？それでいいじゃん！」

戦うという選択肢を持たないケリイにとって、敵の方から退散してくれるという可能性は、非常に理想的に感じた。これで助かったと、ケリイは安堵する。

…しかし幼女は、そんなケリイの言葉に、ゆるゆると首を振って返すのだ。

「——確かにこちらとて、お主の力に頼るのは本意でない。

しかし、ここでサナトスを逃すわけにはいかぬのじゃよ…」

許してくれ。そう呟き、幼女はケリイの手を引っ張って走り出す。勿論、向かう先にはサナトスが居るわけで…

「…う…うわっ！やめろっ…馬鹿！」

そう必死で抵抗するケリイだったが、敵わない。幼女の並外れた腕力に引き擦られ、サナトスの間合いに放たれたケリイは次の瞬間、黒いマムシの巨大な顎が、間近で閉じられたのを見た。サナトスの本体が、ケリイを獲物として認識したのである。

「ぎゃああああー！！」

そう悲鳴を上げたケリイを取り囲むように、複数の頭部がその長い身体を躍らせ始める。幸い、最初の一撃は逃れることができたようだ。だがしかし、これらの数の攻撃を全て避けられるかといえば、それは不可能に決まっている。

「無理っ！こんなの無理だつてば！」

右から襲い掛かる一本を、マントを翻し叩き落とす。地を這い、ケリイの足元を狙った二本は、高く飛び上がってかわした。星の輝き始めた夕空に、冷や汗が数滴、飛び散っていく。

「…充分、避けれておるではないか」

いつの間にか、そこを定位置と決めたらしい。ケリイの背中にしっかり貼りついたまま、幼女は冷静にそんなことを言う。

「ちがつ…！こんなの偶然なんだつて！」

真っ青な顔で叫ぶケリイ。その横をまた新たな一本が横切った。肌

に触れる直前でそれを叩き落とし、ケリイはサナトスから遠ざかるように高く跳んだ。

「キボウツキに偶然はない。これは、お主が敵の動きを先読みし、動いているだけの話じゃ」

「んなことっ！出来るわけ無いじゃん。本当、キボウツキってなんなんだよ！」

今度は、ケリイ目掛けて突進してきたサナトスの擬態を、片足で蹴り飛ばす。バランスを崩した擬態は、自らの本体に足を取られ、そのまま後方へ転倒。そして、一瞬全ての攻撃が止まったその隙を、ケリイは見逃さない。クルリと踵を返したケリイは、敵に背中を向け、走り出した。勿論、逃げる為である。

「キボウツキは…エルピスの持つ先知の力を受け継ぐ者。

予知能力くらい、使えて当然じゃ」

「っ…使えないよ！だって僕、本当普通の、ただの人間なんだもん！」

「——…だったら何故、サナトス相手に無傷でいられるのじゃ？」

このわしですら、奴からは多大な傷を負ったというのに」

「それはっ…」

本当に、ただの偶然なのだと。そう口に出そうとした次の瞬間、ケリイは気づいた。背中に掴まる、幼女の手が震えている。そして彼女は、その不安げな様子にも関わらず、淡々とした口調で言葉を紡ぎ始めた。

「サナトスを封じるよう指令が下った時、わしには沢山の仲間が居た。

しかしその仲間も、今ではエルピスしか残っておらぬ」

…一体、幼女は何の話をしているのだろっ。その意図を探ろうと、耳を澄ましたケリイは、

「サナトスは…あやつは、わしの仲間を、友を…喰ってしもつたんじゃない…」

その言葉に、硬直した。

「なんで…わしは生き残ったのじゃろう。なぜ皆のように戦えなかったのじゃろうか」

ぼそりぼそりと呟く少女の顔を、ケリイは確かめることができない。ただ、その声だけは酷く冷静に聞こえた。

不意にケリイは思い出す。傷だらけの身体で果敢に敵に挑んだ少女の、あの姿。

「…なぜわしだけ…逃げてしまったんじゃろう」

背中に掴まる小さな身体が、今だけは重く感じる。

本当に、この少女は、一体何者なのだろう。その事は相変わらず解らない。

…ただ、少女の身体に刻まれた無数の傷の意味だけは、ケリイにも、なんとなく理解できる気がした。

——…悔しいんだ。

取り戻せない過去があつて、自分が許せなくて苦しいんだ。その気持ちだけなら、ケリイにだって解る。不思議な事に、ケリイは今、両親が死んだ日の自分と、少女の過去が、ほんの少し重なった気がしていた。

「…ねえ」

だからケリイは足を止める。

「僕は…どうすればあいつを倒せる？」

だからケリイは覚悟する。この少女の為に戦うのだと。

ゆっくりと背後に向き直ったケリイは、猛烈な勢いでこちらに迫るサナトスの姿を確認し、身構えた。

「——…決意するのじゃ。必ずその手で、サナトスを倒すのだと強く念じる」

たったそれだけで、キボウツキの持つもう一つの能力は効果を発揮するのだと、そう少女は言う。

「能力？」

「そっじゃ。その手で運命を切り開く力…」

——…ツズゴオオオオン！

とんでもない音が聞こえて、ケリイは咄嗟に身を伏せる。擬態の持つ鋭い爪が、背後に聳える巨木の幹を突き破ったのが見えた。

体勢を崩したケリイは、本体からの追加攻撃を受ける格好の標的になる。その筈なのに、サナトスはそれ以上、ケリイに触れようとしなかった。ジリ…と、数歩遠ざかり、サナトスは短い唸り声を上げる。

その時、ケリイの右腕から薄紫色の宵空にかけて、赤銅色の軌跡を描く、新たな光があつた。

「…それが、“決意の炎”」

幼女は告げる、ケリイに与えられたその力の名を。

メラメラと弾け燃えるのは、澄んだ真紅の炎。先程の黒い炎と比べたら、ほんの少しだけ熱いような気もする。しかしそれはまるで胸の奥に秘めた思いを込み上げるままに叫んだかのような、心地のよい熱気だ。

ケリイは一瞬、自らの生み出した炎の揺らめきに、呆然となつてしまった。

「僕…の力…なの？」

震える唇で、そう呟く。なんて美しい炎だろう。恐怖も悲しみも、何もかも忘れてしまえそうな程に、澄んだ色の炎である。

そして、息を飲んだケリイの耳に、幼女の声は響いた。

「…行け、キボウツキ！」

その言葉に、迷いなど生まれる筈が無い。

気がつけば、ケリイは走り出していた。自分のものとは到底思えない雄たけびが、喉を、鼓膜を揺らしている。

…まずは、恐怖に凍りついた擬態を狙った。

素早く間合いに踏み込み、敵がこちらの動きを把握するその前に、左手で金褐色の鬣を強く掴む。腕力に任せ、その華奢な擬態を引き擦り倒した。擬態の口から細い悲鳴が上がり、その次の瞬間には、

背後の本体が巨大な波を作り、ケリイに襲い掛かる。

「……！！」

炎の燃え盛る右手を振り上げ、ケリイはそれを制する。宙に千切れ跳んだ炎の欠片が、数個の頭に燃え移り、頭部を砕いて闇に散った。明らかに、サナトスが怯えているのがわかる。圧倒的な力の差に気づいているのだ。

身体能力が極限まで高まって感じるのは、恐らく気のせいではないだろう。これも、キボウツキの力なのだろうか。

——…勝てる。

だからケリイは確信した。

左手は擬態を掴んだまま、ケリイは右手で手当たり次第にサナトスの首を握り締める。その拳の中で、面白いくらい簡単に、頭部は砕けていく。自分に与えられた 力に驚くと同時に、ケリイは奇妙な快感を抱いていた。こんなに清しい気持ちになれたのは、一体何年ぶりだろう。思わず笑い出しそうになる表情を、僅かに残った理性だけが、辛うじて引き止めていた。

「…当然じゃ。単体のスリープシスが、キボウツキに勝てるわけはない」

不意に、背後から幼女は言う。一方的に痛めつけられているサナトスに、まるで同情でもしているかのような声色だ。

そしてその声で、ケリイはようやく、サナトスが息絶えていることに気づく。

「…あ」

慌てて擬態から手を離す。ゆっくりと後ずさったケリイの前で、擬態はサナトスの本体を引き擦り、重い音を立てて地面に落ちた。

意識の無い相手をいたぶって楽しんでいた自身に気づけば、吐き気さえ覚える。ほんの一瞬とはいえ、狂気に取り憑かれていたとは思えない行動だ。

——…僕は…何を

息を飲み、ケリイは目の前の光景を見遣る。

地面に力なく落ちたサナトスの身体に、ケリイの放った炎が猛烈な勢いで燃えている。真紅の炎は、周囲の木々に移ることなく、サナトスの身体だけを丁寧に灰に還していった。

「し…死んだの？」

恐る恐る、尋ねてみる。少女はケリイの肩からひよっこりと顔を出し、答えた。

「いや。スリープシスに死はない。灰に変えたところで、いずれまた再生してしまうじやろ」

「…じゃあ…どうすれば？」

どうすればサナトスに、完全なトドメを刺すことができるのだろう。ケリイのその問いに、少女はニツコリと微笑んで返す。

「うむ。今こそ封印の箱の出番じゃ。さ、早くお主の持つ箱を出せ」
「——…は？」

…箱？箱ってなんだ？あからさまな疑問符を顔に浮かべたケリイの様子に、少女の笑顔はたちどころに消え去った。

「は？…じゃなかるうて。エルピスが封印されていた箱のことじゃ。奴がここに居ると言う事は近くにあるんじやろ。」

わしはてつきり、お主が箱を持つてるものだと思っていたが…」

あの箱は、スリープシスを封印する事が出来る唯一の道具なのだと、そう少女は言う。その口調の緊迫感に、ケリイも慌てて自身の記憶を辿った。

——…箱。あの悪魔が封印されていた箱だつて？

そんなもの、自分は開けただろうか。二年前のあの事件を思い返してみるが、そんな箱なんてどこにも…

「…あ」

あった。確かに箱は存在していた。その事をケリイは思い出す。そ

れはきつと地面に落ちていたあの、小汚い箱のことである。箱に輝が入った瞬間、エルピスが飛び出してきたことを考えれば、辻褄は充分に合うではないか。

——いや、まてよ？

ここで、ケリイはある問題点に気づく。その事が、余り良くない事態のような気がしてならない。

「……やっと、思い出したか。一体どこに置いておるんじゃ？

サナトスの再生までにはまだ時間もあることじゃし、

今から取りに行っても充分間に合うぞ」

様子の変わったケリイに安堵したのか、そう口にする少女の表情は柔らかかった。

手を引っ張り、箱の置き場所まで案内しろと促してくる。しかしケリイは、その要望に応えることができなかった。

「あの……ごめん」

そう、まずは謝らなければならないだろう。

そして、きよとんと首を傾げる少女に向かい、追い討ちをかけるよう、告白する。

「その箱なんだけど、エルピスが出た瞬間、燃え尽きちゃったんだよね……」

あの日、エルピスの放った炎の最初の犠牲者。今思えば、それがあの箱だったのだ。

あまりにもあつさりと消滅したものだから、ケリイは今の今まで、あの場所にあつた箱の存在を忘れていたのである。

「な……」

少女は言う。小さな唇を、今ではこれ以上もなく大きく開け、腹の底から絶叫する。

「なんじゃとお！？」

震える空気、飛び立つ数羽の小鳥。この小さな身体で、良くここまでの大声が出せたものである。思わず耳をふさいだケリーの目の前で、幼女は放心したようにその半身を揺らし…そしてそのまま地面にへたりこんだ。

「これは、困ったことに…」

そう頭を押さえる幼女の前で、サナトスの最後の一欠けらは今、ゆっくりと宙に溶けて消えた。

■ ■ 第四章 ■ ■

漆黒の空に色濃く浮き上がった白月の下、小石の散らばる街道を、二人、駆けてゆく。

結局、ケリイは少女を連れて自宅に帰る事にした。この状況で少女を放置していくのは、流石のケリイでも良心が痛む。露わな素肌をマントで隠し、背中に少女を忍ばせたまま、こっそりと家の木戸を潜る。義父母への挨拶もそこに自室に駆け込み、扉に鍵をかけた。

思わず、唇から安堵の息が漏れる。とにかく、この醜態を知り合いいに見られずに済んで良かった。グツタリと壁に背をつけ、ケリイはふと思い立って少女を見遣る。

「…あのさ。僕は、ケリイ。君は？」

そういえば、自分はまだ、この少女の名前を知らないのだ。改めて、そう名乗ったケリイに対し、少女は妙に落ち着いた様子で「パラディス」と返した。

「…皆にはパラディと呼ばれておるゆえ、お主もそう呼んで構わん」
そう言い、パラディは顔を上げて微笑む。

「しかし……お主が、あのケリイだったとは思わなんだ。想像していたよりも、背が高くて驚いたぞ？」

…子供だと聞いていたから、もつとチビな人間を想像していたのに。パラディは、そう言つてクスクスと笑った。その様子に、ケリイは肩を竦める。……“あの”とは一体どういう意味なのだろうか。その言葉から判断するに、このパラディという少女はケリイの存在を事前に知っていた様子だ。しかし……何故？

「……ねえパラディ、僕たちって、もしかして会った事あるのかな？」

「――……へ？」

気が付けば、その疑問が口から零れていた。ポカンと呆けるパラディを前に、ケリイは軽く頭を掻く。

「いや……今、君も僕の事知ってるって言ってたから、もしかしたらって思ったんだけど」

実はその姿を見た瞬間から、どこかで会ったような感覚を抱いていたのだ。そう白状したケリイに向かい、パラディは目を見開いて硬直し、数瞬後には慌てて首を横に振った。

「……ば、馬鹿な、わしは天界人じゃぞ。お主に会った事がある筈がない」

先程までの落ち着きは何処へやら、明らかに狼狽しているその様子に、ケリイは首を傾げざるを得ない。

「わ……わしはただ、エルピスから聞いていたからお主を知っていただけじゃ。」

あやつは未来の出来事を把握しておるからな。

近い将来生まれる事になる新たなキボウツキの話を、わしにも教えてくれたのじゃ」

……一体何が彼女をここまで動揺させているのだろうか。一気に青ざめたその顔を見ると、なんだか自分が悪い事をしてしまったかのような気さえする。

結局ケリイは耐え切れず、話題変換を試みた。

「……あ、ええと。そういえばエルピスって何者なのかな？君の仲間って言うってたけど」

思い返せば、彼が一番、謎多き存在なのだ。二年前、ケリイの前に突然現れた彼は、その命を救い、そして取り憑いた。パラディと違い、怪しさ満開の彼が神の僕であるという事実も、信じられないのがケリイの本音である。そしてそんなケリイの切り替えに安堵したのだろう。わざとらしく手を叩き、パラディは笑みを作った。

「おお！そうじゃったな。キボウツキに突然選ばれて戸惑いも大き
かるう。エルピスの事が気になるのも当然の話じゃな！」

随分と機嫌の良い口調でそんな事を言い、パラディは部屋の奥、窓
際に設置した書き物机に跳び乗った。そのまま机端に座り込んだの
を確認して、ケリイもベッドマットに腰を下ろす。マツチを取り出
し、脇机のランプに火を灯せば、ぼんやりと温かな光が、部屋の闇
を吸い取ってくれる。

「さて。ケリイは創世記を知っておるか？」

そう問われ、ケリイは頷いた。

「……聖書の最初のページでしょ。流石に読んだ事くらいはあるよ」

——昔々、地上には常幸に包まれた楽園が存在していた。そこは
楽園の神と、その美しい子供たちで成り立つ平和な世界であつたの
だという。しかしある時、不気味な姿をした災いの神が楽園に姿を
現し、その平和は崩れ去った。

「災いの神の存在に腹を立てた楽園の神は、彼を討つ事に決めたん
じゃ。」

六日間続いた闘いは、七日目に災いの神の死を持って幕を下ろし
たが……」

「その時、死んだ神の持つ災厄が外に溢れ出してしまった」
パラディの言葉の先を読み、ケリイは肩を竦める。

そしてこの災厄の欠片を浴びてしまった者は地上に残り、人間の
先祖となった。

楽園の神と、災厄の欠片から逃れた子供たちは天に新たな楽園を生
み出し、そこから常に地上の平和を見守っているのだという。それ
がケリイの知る、創世記の内容だった。

「——そう。それが地上の創世記ならばそれで間違いはない。しか
し天界にはまた別に、天界の創世記が存在しておるんじゃない」

——災いの神が討たれ、地上に混沌が訪れた三日目の事だ。災いの神の死骸が突如宙に浮かび、それは巨大な舟になった。舟の上では災いの神の子供たちが次々に産声を上げ、そこに小さな集落を立ち上げた。彼らは地上の人間の悲しみや苦しみを糧に成長を遂げる奇妙な存在で、自らをポイメーンと名乗ったのだという。

「これを不気味に思った楽園の神は、その舟に使者を出し、ポイメーンに服従を誓わせた。以来、ポイメーンは楽園の神の命令に従い、地上の平和を守っておる。

——斯く言うわしも、そんなポイメーンの一人なんじゃよ」

楽園に住む神々よりも数の多いポイメーンならば、地上の人間一人一人の魂を監視する事すら出来た。魂に災厄の欠片を抱き込んでしまった人間が、その災厄に支配されてしまわぬよう、見守る事がポイメーンの使命なのだ。

「……しかし、わしらの努力も虚しく、災厄に支配されてしまう人間は存在する。欲望や絶望に我を忘れて、罪を重ねてしまうんじゃない。そうした人間の魂が死後、地上に災害を起こす為に存在する化物……スリープシスと呼ばれる姿に成り果てるわけじゃ」

つまり、サナトスも元は人間だったという事だ。その事実、ケリイは息を飲む。

……人間ならば、愛された事もあっただろうに。守りたいものもあつただろうに。それすら忘れてただの化物になってしまうという事実は、哀れを通り越して恐怖である。

「スリープシスになってしまった人間を……助ける事って出来ないのかな？」

そう尋ねてしまうケリイに、パラディは少し寂しそうな微笑みを浮かべる。

「できぬ。…だからわしらは、奴らを封印する事にしたんじゃ」

災いの神から生まれた舟は、未だに謎が多い。そこに住むポイメンですら理解できない生き物や物体が生み出される事があるのだとパラディは言う。

「…封印の箱の存在も、そんな謎の一つじゃった」

突然舟に現れた白銀色の箱。その箱の中身は空で、ポイメンが蓋を開ければそこにスリープシスを封印できるという奇妙な力を持っていた。しかし、スリープシスを封印し続けた結果、箱には混沌が生まれ…そこに未知のスリープシスを生み出した。

麗しい青年の姿をした彼は、他のスリープシスとは違い、強い理性を持っていた。しかも、ポイメンらに対して友好的な態度で続けた為、直に彼らの新しい仲間として迎えられる事になったのだ。

「——ま、まさか……その未知のスリープシスっていうのが？」

「そう。それこそがエルピスの正体なんじゃよ。ケリイ」

ポカンと呆けたケリイが面白かったのか、若干の笑いを噛み殺しつつ、パラディは言う。

「奴は他のスリープシスと違い、人間に死を招く程の大きな災害を起こさぬ。」

——その者の運命や未来を教える事、それがエルピスの生み出す災害の形じゃ」

未来を知る人間は、次第に夢を失い、努力を止めるだろう。そうした人間の行動は、ろくな結果を生み出さないのだと、パラディは言う。

「——とはいえ…わしはむしろ、未来が見えるエルピスが羨ましいくらいなんじゃがな。」

奴の能力は、その気にさえなれば、楽園の神とすら取引できる代

物じゃ」

……まあ、あくまでも“その気になれば”の話だが。そう言ってパラディは笑う。

皮肉にも、エルピスこそが予知能力に一番苦しんでいる当人であるらしく、その性格は極度の面倒くさがり屋に成り果ててしまっている。彼は封印の箱の外に出る事を拒み、永遠とすら呼べる長い時間を眠ったまま過ごし続けていたそうだ。

「今回は、キボウツキを探したいと言いだして、珍しく起きて来たのじゃが。わしと共に舟を出て、地上に到着した途端、行方を晦ましよった。封印の箱無しでサナトスを追わねばならぬわしの苦労も考えず、あげくの果てには封印の箱を燃やしたじゃと？」

話しているうちに、苛立ちが高まって来たのだろう。両手でぐしゃぐしゃと髪を乱し、パラディは唸り声を上げる。

「……なにをやっておるんじゃ、エルピス！」

「そりや……。とっても私好みのコが、目の前で困っていたんだ。

助ける為なら手段なんて選ばないさ」

そしてパラディに伝える声は、ケリイの真横から聞こえた。

「う、わあああ！」

何の気配もなく、薄闇に浮かび上がったエルピスの姿に、ケリイの声は裏返る。

いつの間にやら、やたら存在感のある長身の男が隣に腰掛けていたのだ。普通の人間なら驚かないわけがないのだが、天界人にとつてはこれも、見慣れた光景の一つなのだろう。

「…ふん。どうせ、そんなことじゃろうと思っておったわ」

そう返すパラディの口調は非常にそつない。エルピスはそれに応えるように笑いを漏らすと、その腕をケリイの肩に回した。

「いや、大好きなんだよね。こういう、生意気そつな美少年顔のコつて」

黄金色の美青年にその身を引き寄せられ、ケリイはようやく我を取り戻す。途端湧き出てくるのは驚きと戸惑いである。

「え…え！？ちょ…！」

カアッと頭に血が上っていくのが解る。何かと謎の多い相手からとはいえ、今ケリイは「大好き」と言われたのだ。人から好意を向けられる事に慣れていない身分ゆえに、直球の言葉に返す術がわからない。嬉しいというよりも、恥ずかしくて脳内がパニックに陥ってしまう。

…そして、そんなケリイの様子が面白かったらしい。エルピスはクスクスと頬を緩め、指先でケリイの髪を掬った。

「そうだよ。私はケリイを気に入ってしまったんだ」

胡散臭くも美しい笑顔を浮かべ、エルピスは首を傾げる。緩くウェーブの掛かった黄金色の髪が、サラリと流れ、大理石のように艶やかな彼の首筋を覆った。

どうやら、先程まで彼を覆っていた黒い炎は、消えてしまっているらしい。

今の彼の身体を覆うのは漆黒の衣のみ。妙に人間染みたせい、その美貌はより一層強まり、見るものに眩暈すら感じさせそうだ。世の中の女性は勿論、男性までも惚れ惚れしてしまいそうなその容姿だがしかし、その魅力はケリイに伝わり損ねてしまう。

「…エルピスは男色の趣味があるからの。困ったものじゃ」

気が抜けたように呟いたパラディの一言が、ケリイの淡い戸惑いをぶち抜いてしまったのだ。

「だ…男色だと」

その言葉は、鋭利に尖ってケリイに突き刺さる。刺さった場所からじわじわと込み上げてくるのは、ケリイにとっては珍しい強い感情。即ち怒りだった。

…いや、確かに。世の中にはそういう嗜好の人間が少なからず居ると聞く。そうした趣味に関して、世間の目は随分と寛容になっているとも。

天界人だつて人間だ。自由な嗜好があつて当然なのかもしれない。しかしながら、そこから向けられる好意を、ケリイはどうしても許せない理由があつた。

「離れる！二度と僕に近づくな！」

唸り、ケリイはエルピスの手を振り解く。嫌悪感に満ちた瞳で睨みつけたにも関わらず、エルピスの笑みが消えることはなかった。

「ああ…ゾクゾクするよ。その闇色の瞳…本当にケリイ、君は良い素材だ」

うつとりとした口調でそう呟き、エルピスは再度ケリイに手を伸ばす。その正気とは思えない口調に、ケリイの肌は粟立った。

そして…これが防衛本能というものののだろうか。気がつけば、ケリイは目の前に差し出された指先に噛み付いていたのだ。

「――…う！？」

じわりと口の中に広がる錆の味。天界の生物も血の味は同じなのかと驚く間もなく、ケリイは自身を襲う痛みに気づいた。

僅かにしかめられた黄金色の瞳から視線を動かせば、ケリイの震える指の上に、くつきりと歯型が現れている。赤い血が噴出す感触に小さな悲鳴を上げ、ケリイはエルピスから身を離れた。

「のう…ケリイよ。可哀想じゃが、おぬ主は既にエルピスと一心同体なのじゃぞ」

傷ついた指を庇うように立ち尽くすケリイ。その背後で、パラディは肩を竦める。

「お主は“パンドラの箱”という異国の神話を知っておるうか？」

「…え、えっと…教会に絵本があつたから、読んだ事くらいは…」
問われ、ケリイは返す。その昔、この世の災厄全てを封じた箱を、好奇心から開けてしまった女性が居た。確か、その女性の名前がパンドラ。

その程度の知識しかないと告げたケリイに対し、パラディは「充分じゃ」と頷いた。

「あの物語では、箱の中に最後まで居残った災厄がおった。

人間はこれを“希望”と呼ぶ事にしたと言う。

…だからエルピスは、自分の力を与える相手をキボウツキと呼ぶ事に決めたそうじゃ」

「…ええと、それって…つまり？」

頭に浮かんだのは例の木箱に記されていた文面。…確か『希望は常に、ここに眠る』だったか。まさかと思いつつも問うケリイに、返すのはエルピス。懲りずにその手でケリイの肩を抱え込み、親しげに言う。

「勿論、この私がいなくなり一生憑いてくるという意味だよ。愛しいケリイ！」

ゾワリと背中を悪寒が這った。…こいつ、僕からずっと、離れないつもりなのか？最悪の事態に思考は硬直する。

「先程も話したが、スリープシスというのは、人間の魂の成れの果てなんじゃ。

地上の肉体を持たないままでは、存分に力を発揮できぬゆえ、

奴らは人間の身体に取り憑き、その魂を喰らって入れ替わる。

エルピス…こやつだけは魂を喰う行為を毛嫌いしていたようじゃが…」

ちらりとエルピスを見上げ、パラディは続ける。

「サナトスを討つ為ならば仕方が無いと、喰う決意をしてくれたのじゃ」

「…やだなあ。それだと私が、愛しいケリイを、食わず嫌いしたみたいじゃないか。

…心配しないでケリイ。きちんと美味しく、頂いた後だからね？」

「そんな報告、聞きたくないよ！」

再度その手を払い、悲鳴に近い声を上げるケリイ。
どうやら、自らに課されていた悪魔憑きという渾名は正しかったらしい。否、事態はそれ以上に悪質なのか。

「な…なんだよお前、僕をとり殺すつもりなんだな！」

そう非難するケリイに、エルピスは相変わらざる笑顔。

「それは誤解だよ。私は他の下衆なスリープシスと違って、人間が好きなんだ。」

その中でも特に愛しい君を、殺したいわけがないだろう？」

…ゾクゾクと肌が粟立つ。

一見美しい微笑みに見えるエルピスの表情だが、ケリイは既に嫌悪を感じ取れなくなっていた。

「キボウツキの力と引き換えに、ケリイの魂は頂かせてもらったよ。ただし、ケリイが死ぬその日まで、絶対に吸収はしない。つまり一生離れられない関係になったのさ」

「…はあ!？」

楽しみに、エルピスと言う。ケリイは自らの眉間に深い皺が刻まれるのを感じた。

そんなケリイの肩にポンと手を置き、パラディは同情の目を向ける。

「この変態に生涯つきまとわれる事が…キボウツキの宿命なのじやと諦めてくれ」

エルピスに自らの魂を差し出す事、それが力を得るの条件だったらしい。ケリイの魂を飲み込んだエルピスと離れば、それはケリイの死に直結してしまう。

先程のように、エルピスを傷つける行動を起こせば、ケリイ自らが傷ついてしまうわけだ。

「な…なんでこんな事に」

絶望し、項垂れるケリイ。そして、そんな様子に好機を見出し、勝手にケリイの頭を撫ぜ始めるエルピス。…パラディは苦笑した。

「ところでエルピス。お主はそろそろ引つ込んだらどうじゃ？」

不意に、パラディはそんな事を言いだす。

呆け顔を上げたケリイの前で、パラディは書き物机から飛び降り、

エルピスへと歩み寄った。

「ケリイへの説明はこれで充分じゃろて。

それよりも今はキボウツキとしての負荷が心配じゃ」

ちらりとケリイに視線を流し、パラディは言う。

「そう、ケリイは未だにキボウツキ状態、つまり、あの恥ずかしい装束のままで居たのだ。ゆらり揺らぐランプの灯火が、その黒いマントを、その隙間から覗く真つ白な肌を洗うように照らしている。正直、この姿のままで家の門を潜るのは苦しかったが、外で変身を解くのは非常に危険なだとパラディに説得され、今に至るのだ。なんでも、人外の力を駆使するキボウツキは、生身の身体にかなりの負担をかけているらしく、変身を解いた瞬間、気絶してしまう可能性があるのだとか。

「…今日は慣れぬ力を使ったのじゃ。既に相当疲れておるのではないか？」

パラディは、そう労わりの言葉をかける。ケリイは首を傾げた。

「疲れてる…ってか、結構普通なんだけど」

確かに疲労感はあるが、それは衝撃的な事実を告げられたゆえの精神的な疲れである。身体に至っては健康そのものと断言出来る程だ。いや、むしろ元気が有り余ってると言っても良いくらい。五感は過ぎるほどに研ぎ澄まされているし、眠気すら遠い。

「ん…。キボウツキというのは、戦闘本能を完全に引き出した状態だから。

疲れも感じないくらいに高揚してるのかもしれないね」

エルピスは笑い、言った。そうしてケリイからそつと離れ、再び口を開く。

「…仕方ない。名残惜しいけど、そろそろケリイの柔肌から離れることにするか」

そして次の瞬間、エルピスとパラディから向けられた視線の意味を、ケリイは理解する事が出来なかった。

「——ケリイ…すまぬな。お主が嫌がる気がして黙っておったのじやが、

エルピスの本体はそっちじゃ」

「…は？」

キボウツキの装束を指差され、ケリイはぽかんと口を開ける。途端、自身の肌の上で蠢きだす黒布の感触に気づいた。

「…ああ。ケリイを抱き締めていられる一時。幸せだったなあ」

そう言つて頬に手を当て、瞳を伏せるエルピス。黄金色の睫毛は大理石の肌に影を落とし、まるで乙女のように震えている。

…ふと、ケリイの記憶から蘇るものがあつた。サナトスを前にした時、確かパラディは言つたのだ。『スリープシスは美しい擬態を持って人間に取り入る』と。

「——…美しい…擬態」

どうも悪い予感がして、恐る恐るエルピスを指差してみたケリイに、パラディは無言でコクリと頷いた。

…と、いうことは。自分は今までずっと、この変態に裸を晒していたのか？

「最悪だ」

思わず地面に崩れ込んだケリイの身体を、黒い炎が覆う。一瞬でキボウツキの扮装を解かれたケリイは、恨めしい気持ちでエルピスを睨んだ。

『…一時の別れは寂しいが。まあ安心したまえ。私はいつだってケリイの傍に居る』

元通りの黒い炎…即ち彼の本体を身に纏つたエルピスの姿は、先程までの麗人の姿とは一変する。怪しく凜猛な輝きに瞳を染めたそれは、やはり悪魔と呼んだ方が相応しかった。

「くそ…ちくしょ…」

恥ずかしさに顔が燃える。今なら自分に返ってくる痛みすら気にせず、彼を殴れると思うのに…どうにもこうにも、身体に力が入らないではないか。

「…キボウツキの反動じゃ。無理するな」

霞む視界の中で、パラデイが肩を支えてくれたのが解った。

——反動…これが？

その苦しさを実感する余裕すらなく、ケリイは意識を手放すしかない。

「——…」

本当に。こいつがあのだ、ケリイなのじゃな…」

だからケリイは、肩に触れているパラデイの小さな手が、震えている事にすら気付けなかった。

『そう、これが君の守って来た人間さ。会えて満足…できた？』

囁かれ、パラデイは顔を上げる。ニヤリと意地悪く笑ったエルピスが今、宙に溶けて消えて行く。

不意に、開け放たれた窓から夜風が吹きこんできた。

視線を上げれば、そこに煌々と輝く白月が見え、柔らかな風はパラデイの長い髪を軽く持ち上げて、揺れる。

「…もう…逃げたくないんじゃない」

思わず声が漏れた。

遠くの空で、星屑は小さな瞬きを繰り返す。静かな夜は今日も、ゆっくりと更けて行く様子だった。

■ 第五章 ■

白い雪が視界を覆っている。

夜が明けてようやく昇った太陽には温かさなどなく、屋根に積もった雪に鋭い光りを反射させるばかり。地面も森の木々も、見渡せるものは全て白に覆われ、吐く息すらも凍りつく。

イトウリープ島の冬は厳しく、そして長い。しかしそれも終わりが近づいている事に、島民たちは気付いていた。

どこからか聞こえてくる水音は、岩壁から滴り落ちる雪解け水のせいだろ。ひと冬の間で凍りついていた湖にも大きな輝が入り、その下を泳ぐ魚影も時折確認することができた。この頃になれば、一時期大量に押し寄せた観光客もすっかり姿を潜め、島は本来の穏やかさに息付き始める。雪は深く積もっていても、人の心には春を迎える喜びが芽生え始めているのだ。

それは、幼い日のケリイも同じ。白い息を吐き、家を出たケリイは、足元に生えた小さな草の芽を発見し、こっそりと微笑んだ。

——ケリイは今、夢の中に居る。

これは、ケリイとユアンが運命の出会いを果たしたあの日の出来事に違いない。

先日十歳の誕生日を迎えたばかりのケリイは、焦げ茶色のコートに身を埋め、学校を指して雪路を走っていた。スキー靴を履いた足元で、綺麗な弧を描き、街道から学校に繋がる林道に入る。

そしてケリイは、黒い並木が立ち並ぶその隙間に、明るく映える蜂蜜色を見つけて足を止めた。見慣れない姿の男の子が、木の根の上で蹲っていたのだ。青いマフラーに顎を埋め、真っ赤な頬で涙を堪えているその姿は不安気で、そして脆く感じた。

人付き合いが苦手なケリイではあるが、この時は流石に、これを放

つておく事はできなかったのだ。

『…どうしたの？』

腰を屈め、ケリイはその顔を覗きこむ。怖いくらいに澄んだ翡翠色の瞳が、自分を映しているのがわかった。

…途端、ケリイの中に後悔が生まれる。

迂闊に話しかけてしまったが、自分は災害と呼ばれる身分なのだ。幼い子供とはいえ、ケリイの悪い噂を聞いている可能性は充分ある。怖がらせてしまったのかもしれない。

そう考えて、思わず身体を引いたケリイに、目の前の子供は大粒の涙を見せた。

『よ…よかったあ』

しゃくり上げながら呟き、そのままケリイにしがみ付いてくる。涙声で途切れ途切れに語る言葉から判断すると、どうやらこの男の子は慣れないスキー靴のせいで、足を捻ってしまったらしい。

…とりあえず、彼はケリイの噂を知らないようだ。その事に安堵の息を吐く。

『…君、お家はどこ？送って行ってあげるよ』

確実に一限目の授業に遅刻してしまうだろうが、こんな不安そうな子供を一人置いて行く事なんてできるわけない。そんなケリイの提案に、男の子は瞬きを一つ。

『でも…僕、学校に行かないと』

震える声で、そんな事を言い出した。

『折角お医者様に許してもらえたのに…こんな怪我お母さんに知られたら、』

また家から出してもらえなくなっちゃうよ』

ぼそりぼそりとそう告げられ、ケリイは首を傾げる。

…この時のユアンには悪いが、ケリイには目の前の少年が就学に達するような年齢に見えなかったのだ。

きつと、彼は学校に通う誰かの弟なのだろう。一人納得して、ケ

リイは言った。

『…学校に届け物でもあるのかな。だったら僕がそれ、持って行ってあげるから、』

君はお家に帰ろう？』

そう優しく頭を撫でてやった。不安を少しでも和らげてあげたいと思ったのだ。だがしかし、そんなケリイの前で、男の子は再び泣きだしてしまう。

『…ち…ちがうもんっ！ば…僕が学校に行くんだもん。お願い、連れて行って！』

意地になったようにそう言い放ち、男の子はケリイの腕をぎゅっと掴む。赤い頬を、幾筋もの滴が流れた。こんなぐしょぐしょの顔でダダを捏ねられては、堪ったものではない。

——参ったな。

ケリイは頭を掻いた。これは既に、自分の手に負える状態じゃない。

『——君、名前は？』

『…ひつく…ユアン…』

『そう。わかったよユアン、一緒に学校行こうか』

溜息交じりにケリイは言う。とりあえず学校に行って、彼の面倒を見てくれる人を探した方が良さだろう。そう判断して、ユアンの小さな体を抱き上げ…息を飲む。

想像以上に、ユアンの身体は軽かったのだ。白い肌と蜂蜜色の長い睫毛…いざこの腕に抱き上げて見れば、その全てが繊細な硝子人形のように、壊れてしまわないか不安になる。

『——…どうしたの？』

すっかり動きを止めてしまったケリイを不思議がって、ユアンが問う。ケリイは無理矢理笑顔を作った。

『なんでもないよ』

そう言って、ゆっくりと道を滑り出す。

本当は、ユアンを背負った方がスピードも出るし楽なのだが、ケリイはどうしても、その勇気を持てなかった。

——傷つけないように、怖がらせないようにしないと……

慎重に、とても慎重に足を進めて行く。結局、学校に到着したのは始業直前の時刻になってしまっていた。

……そして。教室中の冷たい眼差しを覚悟して扉を開けたケリイを迎えたのは一瞬の沈黙。その直後に飛んできた野次に、ケリイは耳を疑った。

『……よ、ケリイ王子！可愛いお姫様連れてきてんじやん』

誰かがそんな事を言い出して、からかうような指笛の音がこちらから上がる。

ポカンと口を開けたケリイの胸元で、ユアンが小さく身を擦じらせたのがわかった。

『あの……ケリイ、ありがとう。もう……下ろして？』

見れば、耳まで真っ赤に染まった顔があつて……ケリイは理解した。自分は今、ユアンを腕の中に抱えているのだ。この体勢に“お姫様抱っこ”という俗名がある事は、ケリイも知っていた。……しかも、ユアンは島の子供にしては愛らしすぎる外見を持っているのだ。彼を抱き上げるケリイの姿は、傍から見て、大層耽美に映ってしまうらしい。

『……あ。ごめん！』

思わず赤面し、ケリイはユアンを床に下ろした。しかし時は既に遅し。

教師から、ユアンが転校生である事を告げられ、放心したケリイの耳に、幾つもの囁き声が聞こえてきた。

『……てか、なんでユアンはケリイと登校してきたんだ？』

『あの妙な雰囲気。本当に二人、デキてるんじやねえ？』

これはもう、ユアンの王子役はケリイで決定だな。と、いい加減な発言が飛び出してしまい。ケリイは頭を抱えた。

…今思えば、それを境にケリイを新たな渾名で呼ぶ輩も現れ始めたのだった。

付けられた当初は、その渾名を呼ばれる度に赤面していたユアンを思い出し、ケリイは妙に可笑しくなる。十四歳になった彼は、むしろその渾名を喜んでいるのだが、当時のユアンにはそんな余裕、無かったのだろう。

——そういえば。ユアンもだいぶ、明るくなったよな…

ふと、そんな事を考える。

出会った当初は、何をするにも危なっかしくてついつい助けてあげたくなったものだが、今ではそんな面影すら無い。親切で賢い彼は、子供たちだけでなく大人からの信用も厚く、困難があれば進んで立ち向かっていく強さも兼ね備えていた。

『だって、僕は相当しつかりしていないと、ケリイを守れないんだろ？』

出会いから四年。だいぶ身長が伸びたとはいえ、その背はケリイよりも頭一つ低い。なのにユアンはそう言って笑うのだ。

——成長してるんだ。

その事に気づけば、ケリイは少し寂しくなってしまう。

…不意に、ケリイは思い出した。二年前、ケリイがユアンに渡したプレゼントを、彼はまだ持っていてくれるのだろうか？あの四つ葉のクローバーに、彼は本当に願い事をかけてくれたのだろうか？

『願い事が決まったら、真っ先にケリイに教えるね』

そう約束はしたけども、あれ以来、ユアンはケリイにその話をしてくれない。でもそれは、悲しいけれども当然の事だと、諦めている。あれはきつと、ユアンの優しさだったのだ。ユアンはただ、ケリイが恥をかかないよう気を遣ってくれていただけなのに…ケリイは間抜けにも、あの約束を本気にしてしまった。

——やっぱり駄目だな…僕は。

ユアンと違い、全く成長出来ない自分に気がつけば、虚しさがこみ上げてくる。

…このままユアンに置いていかれてしまうのだろうか？そう考えただけで、ケリイの全身は恐怖に粟立ってしまうのだ。

——僕は走るのが得意だから、どこまでも追いかけて行けるから。だからせめて、僕の辿りつける場所に居て欲しい。そう願うのは我儘なのだろうか。

…夢の覚める気配が近づいていた。

一瞬だけ、遠くの海に落ちて行く飛行船が見えた気がする。小さく零したケリイの悲鳴は、もう何処にも届かなかった。

■第六章■

瞼を焼く朝の光に目を覚ました。夜のうちに立ち昇った深霧に日差しを反射させ、太陽は今、天を目指し始めた様子だ。

——さむい。

真冬の夢を見たせいか、ケリイの身体は凍えるように冷えて感じた。耐え切れず、足元に蹴りやっていた毛布を頭まで被りこむ。そのまましはしウトウトした後、ケリイはようやく我に返った。

「…あれ？」

何故、自分はベッドの上に寝ているのだろうか。その事が不思議で、跳ね起きて辺りを見渡す。

——確か…エルピスが離れて、僕はあのまま床に倒れて…。

そしてその身体を、パラデイが支えてくれたのを覚えている。彼女がケリイをベッドに寝かせてくれたのだろうか。

…では、当の彼女は何処へ？部屋中を見渡したが、そこには影も形も見当たらなかった。

「外に…出たのかな？」

ぼんやりと、視線を部屋の窓に向けた。硝子戸は開け放たれていて、その先には大きく枝を広げたナナカマドの木がある。

この部屋は二階だが、パラデイの身体能力を考えるに、この枝を伝って外に出た可能性は充分あった。

念の為、居間で朝食を準備する義母にも尋ねてみたが、そんな子供は見えていないのだと言う。

「…それよりもケリイ、あなた大丈夫なの？」

昨晩は晩御飯も食べずに部屋に籠ってしまっし、それに今日は顔色だって悪いわ」

そう言つて、ケリイの額に手を当て熱を測る義母。どうやら、ケリイの発言は義母に、余計な心配をさせてしまったらしい。恐らく、ケリイが風邪をこじらせて、呆けてしまっていると考えたに違いな

い。

今日は学校を休んだら？と真剣に言われ、ケリイは苦笑した。

「ユアンが待つてるから」

それだけ言って、ケリイは家を出る。

今やすっかり霧は晴れ、澄んだ青空が視界を覆っていた。ケリイが一步踏み出す度に頭上で揺れる木漏れ日は不確かなまだら模様を作り、どこか遠くで飛び立った小鳥の羽音が聞こえた。ここにあるのは、とてつもなく長閑な朝。昨晚起きた事件の全てを忘れなくなる程に平凡な日常が、辺りには広がっていた。

「あれって…現実だったのかな？」

だから思わず、ケリイは疑ってしまう。

「むしろ…夢であって欲しいんだけど」

ボソリと呟き、ケリイは俯く。エルピスに取り憑かれてしまった事も、キボウツキという妙なものに変身してしまった事も…全て夢だったら、それに越したことはないだろう。

そんな事を考える中で、ふと、ケリイの脳裏に蘇る記憶があった。

「——…エルピス、もし居たら返事…して？」

昨晚の出来事の中で「私はいつもケリイの傍に居る」などと言っていた彼の姿を思い出したのだ。これでもし返事がなければ、昨晚の事は夢だったのだと、納得できる。

…というか、むしろ返事など来ないで欲しい。殆ど祈るようにそう思い呟いた名前だったが、残念ながらその返事はすぐに来た。

「…っ。早速呼んでくれるなんて…そんなに寂しかったのかい？ケリイ」

「う…うわあああ！」

突如現れた黄金色の美青年に抱きしめられ、ケリイは悲鳴を上げた。

…否、驚いたのはエルピスの登場だけではない。自身の服もまた、脈絡なくキボウツキのそれに挿げ替えられていたのだ。

「ぼ…僕はお前が姿を出す度に、この格好をしなくちゃいけないのか!？」

「はは。それが我々の宿命ってやつだよ」

激しく非難するケリイに、エルピスは恍惚と笑って見せる。エルピスが可視状態になる為には、彼の獲物であるケリイのエネルギーが必要不可欠。つまり今、ケリイはエルピスの養分になってるのだ。

「これが、二人の愛の力ってやつだね」

わけのわからない事を口走るエルピスに軽く裏手を決め、ケリイは慌てて周囲を見渡す。こんな騒動、誰にも気づかれなければ良いが。

『——ケリイ…そこに居るの?』

…最悪だ。そうケリイは頭を抱えた。ピアノの鍵盤が弾むように愛らしいこの声の主は、間違はなくユアンだろう。よりもよって、今一番出会いたくない相手である。

坂の向こうから近づいてくる足音に気づいて、ケリイは慌ててエルピスを引っ張った。

「ちょ…っ早く隠れるよ!」

「…ん?」

暢気なエルピスを引き擦り、並木の裏に身体を隠す。間一髪でユアンが姿を現し、不思議そうにきよろきよろとあたりを見渡す。

…勿論、ケリイの姿を探しているのだろう。

「…別に、ケリイまで隠れなくて良かったんじゃないのか?」

木の幹に軽く背を預け、エルピスが笑った。

「こんな格好、見られたら困るだろ。

…大体、なんでこんな恥ずかしい服着せられないといけないんだよ」

苦く顔を歪め、ケリイはエルピスを睨む。今更ではあるが、ケリイはこの衣装に大きな不満を抱いているのである。同じ黒装束とはい

え、彼の身に纏う衣装の無難さが恨めしい。

細いシルエットの黒衣は、このまま人前に出ても何一つ怪しまれる事はないだろう。その事を羨ましがるケリイに、エルピスは瞬きを一つ。妙な事を言い出した。

「別に…キボウツキの衣装を変えることは可能なのだが。ケリイの服の面積を増やすと、必然的に私の服の面積が減る事に」

「…は？」

呆けるケリイ。エルピスはその長い指先で口元を覆い、続ける。

「いや、ケリイが望むのなら私は勿論構わないのだが。服が消える時は足元から順番に…ケリイの服が完成する時には…もう」

きやつ。と、まるで乙女のように頬を染めたエルピスを前に、ケリイの脳裏に浮かんだのは最悪な絵面。

「…っ！…だ、誰が望むか、馬鹿！」

そう赤面したケリイを前に、エルピスは小さく声を上げて笑った。…もしかしたら、からかわれたのかもしれない。だが、それを追求する気力は既に無かった。

「とにかく…早く元の姿に戻してくれ。ユアンが待ってるんだ」
そうケリイは頼み込む。

視界の向こうには、青白い顔のユアンが立っている。きよるきよると辺りを見渡し、彼は何度もケリイの名を呼んだ。相当心配してくれているのだろう。その姿が心苦しくて堪らない。

「…エルピス、早く…」

催促する為に振り返ったケリイは次の瞬間、冷たい相貌に捉えられていた。

「…ユアン。それは、あの少年の事か？」

先程までのふざけた姿が嘘のよう。不意に表情を消したエルピスは、やはり悪魔のように恐ろしい。

「…そ…そうだよ。友達なんだ」

「トモダチ？」

ふん。と、彼は嘲笑う。

「あんな奴が、ケリイの事を友達と思うわけがなかるうが」

チクリと、胸の奥が痛んだ。何を突然言い出すのかと不思議に思うよりも先に、エルピスの言葉に納得してしまう自分がある。

——そんな事…解ってるよ。

自分のような下賤な人間が、ユアンと対等であるなんてありえないのだ。ケリイは黙って唇を噛んだ。咄嗟に「友達」と紹介してしまった自分が恥ずかしくて、惨めでたまらない。

「——気をつける事だな、ケリイ。あいつの持つお前への執着心は、既に異常だ」

…しかし、続けて聞こえてきた言葉は、ケリイにとって意味不明な代物だった。

「…しゅう…ちやく？何？」

思わず、間抜けに問い返してしまう。そんなケリイが面白かったのか、ここでもようやくエルピスの笑みが戻ってきた。

「…まあ、安心して良い。ケリイの事は、私がしっかり守ってあげよう」

ケリイの頭を撫ぜ、そう言って聞かせるエルピス。

…彼が一体何が言いたいのか、それを尋ねたい気持ちはあったが、ここで変に刺激して、またあの冷たい目で睨まれては敵わない。

「い…いいから、元の姿に戻してよ」

だからケリイは、震える声で再度懇願する事にした。そんなケリイに、エルピスは大きく溜息をつく。

「…仕方がない」

そう呟いて、エルピスは宙に消えた。

ケリイは、衣装が元に戻ったことを確認し、慌てて立ち上がる。

「…ユアン！」

名を呼び、そのまま彼の元に駆け寄る。心底安心したような笑顔が

ケリイを迎えた。

「あの…ごめんね。大きな蛇に遭遇したもんだから、腰抜かしちゃって…」

とりあえず、咄嗟に思いついた嘘でごまかすことにした。ふわりと口元を綻ばせ、ユアンは言う。

「…そうだったんだ？怪我とかしてないなら良かったけど。このまま学校、行けそう？」

何一つ疑われないことがこそばゆくて、ケリイは肩を竦めた。

「全然大丈夫だよ。…でも、これじゃユアンまで遅刻しちゃうそうだね」

「良いよ。たまには二人でゆっくり行こう」

につこり笑って、ユアンはケリイの腕を掴む。その行動に多少驚くものの、無邪気なユアンの様子が面白くて、ケリイは笑った。

そのまま二人並んで、林道を歩いて行く。じつと前を見つめる翡翠色の瞳は、出会った当初と同じくらい澄んでいて、そこだけは何も変わらない。

——…もう抱えて走ってあげなくてもいいのかな。

今朝の夢見のせいだろうか。ケリイは思わず、そんな事を考えて、ユアンの横顔を見る。

そこには、頬を真っ赤に染めた親友の姿があった。

■ ■ 第七章 ■ ■

結局、二人が学校に到着したのは授業開始の鐘が鳴り終わってからだった。

こそこそと教室に入り窓際の自席に着けば、すぐに平凡の幕は上がる。

壇上では、教師が算術の公式を説明し、生徒たちは自身の石板を使って計算に取り組んでいる。勿論、ケリイも、即座に問題に取り組むのだが、一向に集中力は湧いて来なかった。

——パラデイの奴。何処に行ったんだろう？

頬杖をつき、ケリイは考える。昨晚の出来事が夢ではなかったと確信できた以上、気にかかるのはパラデイの行方だった。

窓の向こうで風は流れ、膨張した雲がゆっくりと形を変えて行く。彼女は今、どこで何をしているのだろうか。確かに彼女は人間ではないし、口調や仕草だって充分大人びている。しかし見た目だけではどう見てもただの子供なのだ。ケリイだって心配しなくなってしまふ。

——出て行くのなら、一言声をかけてくれたら良かったのに。思わず溜息が出た。

算術の授業が終われば次は歴史の授業があり、その後は昼食を挟んだ放課後が待っている。大陸の学校へ進学を考える生徒の多くは居残り、自主学習に精を出すのだが、ケリイのように進学の意思を持たない人間にとっては完全な自由時間なのである。用事のある者は帰宅し、暇な者は親しい友達と遊び呆けた。

：勿論ユアンも、この時間は親しい女の子たちに混ざり会話に夢中になっている。

穏やかな性格を持ち、なおかつ聞き上手な彼は、昔から婦女子に人氣があつた。氣が付けばいつも、彼の周りに教室中の女子が集まって来るのだ。

ユアンにとって、彼女らは妹みたいな存在なのかもしれない。そう、ケリイは予想している。事実、ユアンは彼女らの面倒を良く見てあげていたし、年小者の中には、彼を「兄様」と呼ぶ輩まで居るのだから、この予想もあながち外れてはいないのだろう。

そんなユアンは今、彼女たちを喜ばせる為に似顔絵を描いてあげているらしい。

ユアンがスケッチブックに鉛筆を走らせる度に、辺りから黄色い歓声が上がっていた。

いつものケリイならば、この時間は読書をしたり居眠りをしたりして潰す事になっている。ユアンが帰る頃合いを見て、一緒に教室を出る事が、今のケリイの習慣なのだ。

…だが、今日に限って、ケリイにそんな余裕は無い。木綿のサツクに荷物を纏め、ケリイは席を立った。

「…ユアン。僕、今日は先に帰るよ」

会話の輪の中心に居るユアンに声をかけるのは心苦しかったが、まさか黙って帰るわけにもいかないだろう。ユアンを囲む女の子たちを見下ろしつつ、ケリイは言う。

啞然と口を開けたユアンは数瞬後、慌てたようにスケッチブックを閉じた。

「あ…ごめん。もしかして僕、待たせ過ぎちゃった？僕ももう帰るから…」

そう言って、わたわたと机の上を片付け始める。途端、女の子たちからは不満の声が飛んできた。

「ええ！私だけまだユアンに描いてもらってないのよ？皆ばかり…ずるい！」

「ケリイなんてどうでも良いじゃない。もうちょっと私たちと一緒に居てよ。」

そんな声ばかりが、次々と出てきてしまふ。どうやらケリイは、

彼女らの機嫌を随分と損ねてしまったらしい。非難の目に凍り固まつてしまったユアンを前に、ケリイは深く溜息をつく。

「別にユアンまで僕に合わせる必要ないよ。ただ、今日は用事があるだけだから」

そう言つて、背を向けた。ユアンが寂しそうに表情を曇らせたのが解つたが、今はそれを気にしている場合ではないのだ。

「パラディ…探さない」と

呟いて、教室を出る。校庭に視線を巡らせれば、そこには数人の少年が居る。彼らは、ゴム玉を蹴つて遊んでいる様子だ。

少年らの明るい笑い声に包まれた校庭を横目に、ケリイは林道へ向かう。探す宛てがあるわけではないが、とりあえず一度、家に帰つてみようと思うのだ。もしかしたら、パラディが既に戻ってきているのかもしれないし、そうでないなら、もう一度エルピスを呼び出せば良い。自室の中なら、キボウツキも別に恥ずかしくはないだろう。そう考え、校庭に背を向けたケリイは次の瞬間、異様なざわめきに振り返る事になる。

校庭の中心に、巨大な鳥が居た。

遊んでいた少年らが恐怖に足を竦ませ、一人、また一人とその場を逃げ去つて行くのが見える。そうして露わになつた鳥の全貌に、ケリイは目を見開いた。鳥の足元に、幼い子供が居るのだ。鋭い鍵爪に抵抗し必死で足を踏ん張るその姿は、昨日以上に傷だらけである。

「——っパラディ！」

ずっと血の気が引くのがわかつた。強く地面を蹴り、ケリイは走り出す。

背負つていたサックを肩から外し、鳥にぶち当てると黒い羽根が飛び散つた。鳥は悲鳴を上げ、高く空に飛び上がる。そのまま、しばし頭上を旋回してはいたが、直に遠くへ去つて消えた。

「大丈夫？パラディ」

慌ててパラディを抱き起こした。柔らかな肌に浮かぶ生々しい傷跡。眉をしかめたケリイの前で、パラディは一滴の涙を零してしま

う。

「あ…あと少しで捕まえられたのに。あの烏めが…烏めが！」

悔しさに唇を噛みしめ、パラディは言う。どうやら、彼女は昨晚散り散りになったサナトスの破片を追いかけて、烏の巣に侵入する羽目になったらしいのだ。

「結局逃がしてしまった…」と頂垂れるパラディに、ケリイは茫然と声をかける。

「…まさか君、昨日の夜からずっとそんな事してたの？」

既に身も心もボロボロに成り果てている事は一目瞭然だった。流れる涙と血を拭ってあげようと手を伸ばし…そしてケリイは慌てて振り返る。誰かがじっと、こちらを見つめてい気づいたのだ。

それは、先程までゴム玉で遊んでいた少年の一人である。

短く刈り込まれた茶髪と珈琲色の瞳、笑うと八重歯の覗くこの少年の名は確か、ハルといったか。今年で十歳になる彼は、島の子供たちの中でもケリイに次ぐ高身長で、少年たちの中でもリーダー格の存在だ。ケリイにとっても、印象に残る存在ではあった。

「…お前、すげえな。あんなでかい烏、怖くねえの？」

瞳を輝かせ、ハルは言う。他の少年らから離れて、一人でケリイに話しかけようとする辺り、彼は相当な変わり者らしい。

「…別に。僕はただ、焦ってたから…」

肩を竦めて、ケリイは返す。勤めて冷静な振りをしていたが、その内心は不安で一杯だった。

…パラディとの関係を問われたら、何と返答すれば良いのだろうか。

ダラリと冷や汗が頬を伝った。

「——ケリイ。行くぞ」

不意に、パラディが口を開く。

「ここはちと、目立ち過ぎるようじゃ」

そう言つて、のそのそとケリイの背に登るパラディ。やはりそこが彼女の定位置であるらしい。

「目立つつて…そりゃここ、学校だもん」

恐る恐る周囲を見渡す。校庭に居た少年らは勿論の事、教室中の生徒の視線も集めていた事に気づき、ケリイは赤面する。特にユアンは、驚愕の余り、顔の色さえ失つてしまっている。ケリイは思わず、一步、後ずさつた。

「ごめん…僕、もう行かないと！」

続くハルの言葉すら聞かず、ケリイは校庭に背を向けた。そのまま全力で走り出し、林道を突っ切る。

「——え…っちょ、ケリイ…？」

背後で、ハルが何やら叫んだのが聞こえたが、気にする余地はない。息を切らせて、ケリイは走つた。

岩壁に飛び上がり、羊歯に覆われた地面を蹴つて行く。滝のように汗が零れた。

耐え切れなくなつて、思わず地面に身を投げ出した時、そこには大きな湖があつて…

「…っはあ…はあ！」

仰向けに転がつて、胸一杯に酸素を吸う。

地面に降りたパラディは湖の縁に這いより、ガブガブと水を飲み始めた。

「——困つたな。パラディの事、皆になんて説明しよう…」

ようやく呼吸が整つた後、ケリイはぼつりと呟く。

ハルや周囲にいた少年らは勿論、ユアンにまで姿を見られてしまったのだ。良い具合にごまかせる術が思い浮かばなくて、頭を抱える。

そして、そんなケリイの様子が気になつたのだろうか。パラディは顔を上げ、口元の滴を拭いつつ、近づいてきた。

「――別に、何も説明する必要はなからうて。」

「そもそも、他の奴らにわしの姿は見ておらぬ」

「…は？」

わけがわからず、ケリイは上半身を起こす。パラディはケリイの目の前にペタリと座り込み、そして首を傾げた。

「…やはりお主は気付いてなかったか。わしは、普通の人間には見えぬ存在じゃ」

天界とは、そもそも人間に見えてはいけない存在なのである。当然そこに存在する物体も、生き物も目に見えるわけがなかった。パラディに指差され、ケリイは彼女の足元に視線を落とす。彼女の言葉を裏付けるように、そこに影はない。

「…じゃあ、僕にはなんで君の姿が見えるの？」
驚きを瞬きに隠し、ケリイは問う。

キボウツキになるまでは、サナトスの姿すら見る事ができなかった筈なのに。何故、パラディの事は最初から見えていたのだろうか。ケリイの掲げた疑問に、パラディは少し困ったような笑みを浮かべた。

「それは…わしにも解らぬ。もしかしたら、ケリイが特別だからかもしれないの？」

そう言つて、その小さな手でケリイの頭を撫でた。意味が解らなくて、思わず肩を竦めてしまったが、不思議と嫌な気分ではない。むしろ、その手の温かさが懐かしくて、心地よい気さえしてしまうのだ。

「…ね、パラディ。君、今日も僕の家に来なよ」
だから、ケリイはそう提案した。

一晩中、サナトスを追いかけていたのだから、パラディは相当疲れている筈なのだ。少しは休んで行つて欲しいと、ケリイは言う。しかしパラディは、ただ頭を横に振るだけだった。

「力を失ったスリープシスは、回復を求めて人間の魂に近づこうと

する。

ある意味、今の状態が一番危険なのじゃ」

破片が魂を喰う危険はないのだが、これに取り憑かれた人間は、多少の生命力を奪われてしまうらしい。

「サナトスは夢喰い…つまり、人間の意識に潜む願望や妄想を喰らうんじゃ。」

その結果、人間は毎晩夢の中で苦しみ…衰弱してしまうじやろう」
“覚めない悪夢”それこそがサナトスの引き起こす災害の形だった。
もしサナトスがその力を全て発揮する事になれば、多くの人間が悪夢に閉じ込められ、孤独な死を迎える事になるのだろう。

…そして、最も危険なのは、サナトスの核なのだと、パラディは言う。

「核…？」

「うむ。そこにサナトスの意識が詰まっておるのじゃ。」

例え破片を処分したとしても、核がある限り安心はできぬ」

他の破片とは違い、核は意思を持って人間に取り憑く。つまり、自分にとって十分な栄養になりうる“夢”の持ち主を選ぶ事ができるのだ。核が人間に取り憑く事は、そのまま本体復活を意味する。それはパラディにとって、今最も避けたい事態だった。

…そんな理由で、彼女は昨晚からずっとサナトスを追っているわけだが、未だに核は見つかっていないそうだ。

「僕にも…手伝えるのかな？」

ボソリと、ケリイは尋ねてみた。

事態の深刻さがわかった以上、黙って見過ごすことは出来ない。

そもそも、サナトスを散り散りにしてしまったのは自分なのである。非常に申し訳ない気持ちが胸を埋めていた。

「いや…気持ちはあるがたいが…」

お主をこれ以上困らせるわけにはいかない。そう言おうとしたパラディは次の瞬間、草藪から飛び出した奇怪な塊に襲われてしまう。
草陰から飛び出したそれは、一見すると蛇頭の怪女メデューサのよ

う。しかしその正体が異なることを、ケリイは察した。

「…っサナトス!？」

揺れる大量の鎌首の上で赤い瞳が光っている。擬態を失ったその姿はただ禍々しく、醜悪だった

「——っ。こいつら、わしの持つ破片を狙って…っ!」

襲いかかる鎌首をひたすらに払い、パラディは唸る。その服のポケットの中から顔を出す黒い蛇が居た。破片同士がお互いを引き寄せているのだ。歪に絡まった鎌首たちは、そのままパラディの身体を巻き込み、そして体内へと引き擦り込む。

「…っ」

——気が付けば、そこに真紅の炎が生まれていた。

ケリイは、炎で鎌首を焼き払い、反対側の手でパラディの身体を抱き寄せる。

悔しさと、取りこまれかけた恐怖に耐えているのだろう。パラディは瞳に涙を滲ませ、震える唇を噛みしめた。

「ふっ…っう…!」

耐え切れず零れ落ちた涙が、その足元に落ちる。その様子が余りにも可哀そうに思えて、ケリイはパラディを抱きかかえた。キボウツキに変身したケリイは、そのマントで彼女を隠し、燃え上がるサナトスの塊を睨む。

怯えた破片が数体、蚯蚓のように地面を這い、草陰に消えて行くのが見えた。とりあえずは一安心と見なして良いようだ。安堵の息を吐き、腕の中で泣きじゃくるパラディをぎゅっと抱きしめてやる。…また彼女に傷が増えてしまった。その事に気づけば、もうどうしようもない程に切なくなる。

『パラディ、手を離すなよ。それが奴の核のようだ』
ふと、声が聞こえた。

宙を切り裂き、現れた黄金色の美青年は端正な笑みを浮かべ、二人の前に立つ。

「…ふえ…うう…」

涙にむせびながら、パラディは握った拳を掲げ上げた。

そこには黒く輝く小さな球体があつて…

「これが…核？」

そう尋ねると、パラディは涙まみれの顔で笑った。

「とつた！」

そう叫んで、ぴよんと地面に飛び降りる。力が入らないのか、そのまま腰を付いてしまったが、拳だけはしっかりと握りこんでいた。

…そう。先程の塊の中に、サナトスの核はあつたのだ。身に迫る危機の中でもそれに気づく事が出来たパラディの、これは初めての勝利だった。

「す…すごいじゃん！」

彼女の感激が移ったのか、ケリイも思わず笑顔になってしまう。クタリと力を失ったパラディの身体を、柔らかな羊歯の上に乗せ、ケリイは何度もその頭を撫でた。

嬉しそくに、誇らしそくに瞼を伏せるパラディを前にすると、なんだか胸の中が温かくなってしまう。

——僕にキョウダイがいたら、こんな感じだったのかな。

なんとなく、そんな思考が頭を過る。その事が余りにも馬鹿馬鹿しくて頬が緩んでしまった。

「…さて、ケリイ。あとは我々で、サナトスの破片を回収してしまおうか」

エルピスの提案に、当然ケリイは頷いて見せる。とにかくケリイは、パラディの負荷を減らしてあげたかったのだ。

そして…やはりパラディは疲れていたのだろう。彼女が地面に身体を預け、静かに寝息を立て始めた事を確認して、ケリイは立ち上がった。エルピスに促されて、二人で森の奥に足を踏み入れる。ふと、

ケリイは、寒気を感じて振り返った。

そこには、背を丸めて横たわるパラデイが居る。しかし、その姿は、先程よりも心なし小さい気がするのだ。「まさか」と思いつつも、パラデイの身体が縮んでいるような感覚が抜けなくて目を擦る。「…どうした。ケリイ？」

「——いや…」

普段通りの笑みを浮かべるエルピスを前にすると、ケリイは自身の杞憂が馬鹿らしくなってしまう。

「なんでもないよ」

だから、そう言っでごまかした。パラデイの身に起きている変化に気づかない振りをして、眠る彼女に背を向けた。

ドクリと、パラデイの心臓が跳ねる。

——…身体が動かぬ。なぜ…？

助けてくれと、そう叫びたいのにパラデイは声が出せないのだ。

——どうして…しまったんじゃろ？

身体が軋む音がする。そしてそのまま、パラデイは不安な眠りに付くのだった。

■ ■ 第八章 ■ ■

“確立の瞳”それが今、ケリイに与えられた能力の名前だ。

黄金色に変わった視界の隅で、数字がチラチラと燃えている。燃え上がるそれが百に達した事を確認して、ケリイは手を伸ばした。深い草藪の中から、迷わずサナトスの破片を掴みだす。体をうねらせケリイの手から逃れようとする破片を、ケリイは黙ってエルピスに差し出した。

「——うん。慣れてきたじゃないか」

そう満足気に頷いて、エルピスが破片を受け取る。そしてそのまま、自らの黒い炎の中で破片を飲みほしてしまった。……いわゆる共食いだ。嫌悪感たつぷりに顔を歪めるエルピスの様子を見れば、当人にとっても気色悪い行為である事は確かなのだろう。

封印の箱を失った今になっては、これがサナトスを封じる最良の方法になるのだというが、流石にエルピスも、核までは飲み込めない。あくまでも破片の暴走を止める処置でしかないのだ。

「……やっぱり、封印の箱がないと不便だね」

改めて考えれば、箱を壊した原因は自分なのだから肩身が狭い。そう溜息を零すケリイの言葉を、エルピスは愉快そうに笑い飛ばした。「そんなに落ち込まなくて良い。あんな箱の代わりなんていくらでもあるんだから」

「——そうなの？」

パラディらポイメーンが気付いていないだけで、封印の箱は天の舟の中に大量に存在しているのだとエルピスは言う。そして、その中の一つをエルピスは地上に持ってきているというのだ。

「……それって、パラディに伝えておくべきじゃないか？」

ポカンと口を開き、ケリイは問う。封印の箱の消失を前にあれほど落ち込んでいた彼女の事だ。箱が存在していると知れば誰よりも喜

ぶのдарう。

「というか…そういう事なら昨日の時点でその箱使ってくれよ」

「…確かに、それが出来たら一番良かったんだがね」

まだ、箱が使える時期に達していないのだと、エルピスは肩を竦める。

「箱は近い将来、必ずサナトスを封印するだろう。」

しかしその事をパラディが知れば、奴は傷ついてしまいかもしれない」

「…なんで？」

首を傾げるケリイに向かって笑みを作り、エルピスはケリイの髪に手を伸ばす。

「知らせてはいけない未来というものもあるのさ、ケリイ。」

キボウツキになった以上、その事は心に留めておいて欲しい」

…ふと、周囲の木々がざわめき出し、ケリイは空を見上げた。雲の流れが早い。どうやら、風が相当強くなっている様子だ。木々の隙間から入り込んだそれはケリイの髪を僅かに持ち上げ、黄金色に変色した左側の眼球を露わにする。

この左目には今、エルピスの持つ予知の力が備わっていた。

予測される未来は数字として視覚化される為、人間であるケリイにも理解しやすい。

“確立の瞳”と名付けられたこの能力は、予知の感覚を掴めていないケリイの為にエルピスが用意した…一種の訓練方法なのだそうだ。「…とりあえずケリイはまだ、予知の初心者だからね…あまり怖い話はしたくない。」

今は、能力の使い方に慣れる事だけ考えて欲しいな」

にこり微笑んで、エルピスと言う。そのまま促されて、ケリイは七体目の破片を探す事にした。

『サナトスを捕獲する』

ただ、そう呟くだけで“確立の瞳”は発動する。左目がじわりと

熱くなって、視界に新たな数字が燃え始めたら、後はその数字が百になる場所を探って視線を移動させれば良い。この数字はつまり、キボウツキの望みが叶う確立そのものなのだ。単純でささやかな能力であるが、“決意の炎”と違って、強い感情を必要としない為、非常に使い勝手は良く感じた。

——見つけた。

視界の数字の桁が跳ねあがる。木の幹に潜んでいた破片を捕え、ケリイは呟く。

「…なんでパラディは、こんな事一人でやろうとしてたんだろう？」
一晩で満身創痍になった彼女の姿を思い、ケリイは溜息をつく。
キボウツキの力でこんなに簡単に作業が進むのならば、パラディの努力は何だったのだろう。

…せめて相談してくれたら良かったのに。そう口にしたケリイに、エルピスは肩を竦めて見せる。

「あいつは何でも一人で抱え込む癖があるからな。

ケリイの力を借りようなんて、考えもしなかったんだろう」

「それって…僕が頼りないからって事？」

なんだか妙に悔しくなって、ケリイは問う。

…確かに、ケリイだってキボウツキである事を好んでいるわけではない。

だが、それでもサナトスを捕まえられるのならば、パラディを助けられるのならば望んで選んだ道なのだ。何故パラディは、そんなケリイを信頼してくれないのだろうか。そんなに役不足に見えるのだろうか。思わず不機嫌になってしまふケリイに対し、エルピスは相変わらずのニヤけ顔で言う。

「違うよケリイ。パラディはただ、君を守りたいだけなんだ」

人間を見守り続けるポイメーンにとって、自身が人間の負担になっってしまう事は許されない行為だった。今回、サナトスの捕獲に人間を巻き込む事にも、パラディは否定的なのと言う。

「特にケリイ、君はパラデイにとって最も大切な人間だったからね。あいつは中々…このキボウツキの計画に賛同してくれなかったよ」だからパラデイは、エルピスと共に地上に降り、ケリイを守りたいと願った。エルピスはそれを許可し…今に至るわけだ。

「…って。ちよつと待ってよ。最も大切な人間って…なんで僕が？」理解できず、ケリイは額を押さえる。パラデイとは昨日が初対面の筈なのだから、大切に思われている意味がわからない。それを問うケリイに、エルピスは意外そうに肩を竦めた。

「ポイメーンというのは、常に一対一で地上の人間を見守っているのだよ。」

「…その説明は、昨日聞いていたと思うけど？」

「——あ…」

「確かに、ケリイは昨晚パラデイからその説明を受けていた。その事を思い出し、そして次の瞬間に気付いた事実に愕然とした。」

「じゃ…じゃあ、パラデイが僕を守る…ポイメーンだったってこと？」

そう問えば、エルピスは当然のように頷いてみせる。つまりパラデイは、最初からケリイの事を知っていたのだ。ケリイが災厄に飲み込まれないように、この十四年間、ずっとケリイの魂を見守り続けていたという事になる。

「——…それならそうと、言ってくれば良かったのに」

その正体を知っていたなら、少なくともお礼くらいは言えただろう。その事が残念というわけでも無いのだが…少々気になるというのが本音だ。

「…仕方が無いよ。」

ポイメーンというのは、自分の守る人間に対して罪悪感を持ち易いからね。

自分の正体を知られたらケリイに嫌われてしまうと、パラデイは考えてるんだろ」

「え…なんで？」

ぱちりと目を見開き、ケリイは問う。…そういえば昨晚、パラデイが拳動不審になった瞬間があつた気がする。確かあの時ケリイはパラデイに「以前会った事がある気がする」と言つたのだ。彼女はそれを否定していたが、それは明らかに嘘臭かつた。

「そりゃ…奴らが、人間の暗い気持ちを糧にして生きているからさ。この手の感情や記憶が奴らの肉体や人格を形成してるようなものだから…」

自分たちは人間にとって嫌われ者だと思い込んでしまつてるんだよ」

…だからパラデイは、いつだってケリイに申し訳なく思っている。故に、何よりもケリイを守る事を優先するのだと、そうエルピスは言う。

「パラデイ…あいつ、そんな事、考えてたんだ…」

聞かされた彼女の本音に、ケリイは思わず、眉をしかめてしまった。…別に、暗い気持ちを糧に生きているポイメーンを悪く思つたわけではない。ただ、人間に対して罪悪感を抱き続けなければならない彼らの存在が哀れだつた。

「何も気にしなれば良いのにね。」

だつて苦しい感情も、悲しい記憶も、無くなつてくれたほうが、僕らは楽に生きられるだろ？」

人間とポイメーンの関係には、互いに利益があるのだ。その考えを口にしたケリイに、エルピスは満足そうに頷いてみせる。

「…その通りだよ、ケリイ。」

それがポイメーンの意味…彼らが人間を見守る事に適していると判断された理由さ」

パラデイがケリイの暗い気持ちを吸収する事で、ケリイの魂は災厄を制御できる。二人の関係は重要と供給が成り立っている、分身みたいなものなのだと、エルピスと言う。

「分身…ね」

だからケリイは、あの時パラデイを“懐かしい”と感じたのだろ

うか。そう問いかければ、エルピスは軽く首を傾げて、困ったような笑みを見せた。

「…うーん。その事なんだけどね、ケリイ」

躊躇うように、エルピスは一瞬視線を動かす。

「実はそれが、今一番危険な問題なんだ」

…本来、地上の人間にとって不可視の存在である筈のパラディが見えたと言う事、そしてその存在を懐かしんでしまったという事は即ち、ケリイの忘れていた気持ちが蘇る兆候なのである。

喰う者と喰われる者、守る者と守られる者。絶妙なバランスで成り立ったこの関係は、二者の距離が遠かったからこそ成功していたのだとエルピスは言う。

「…パラディの身体は、ケリイが今忘れている気持ち…感情や記憶で成り立っている。

つまりケリイがそれらを取り戻してしまえば、奴はその分、生命力を奪われるんだ」

“記憶の逆流”そう呼ばれるこの現象が長引けば、パラディの身体は消滅してしまうだろう。低い声で告げられたその事実、ケリイの肌は粟立った。

——パラディが…消える？

悪い予感はしていたのだ。先程パラディと離れてからずっと、ケリイは妙な胸騒ぎを感じていたのだ。

「…まあ、例えそうなたちやっただとしても、心配は無用だよ。

ケリイには私が居る。君の魂はこの私が、一生守っていつてあげよう」

そう言ってエルピスは、少々悪趣味な笑みを浮かべたのだった。

■ ■ 第九章 ■ ■

低くなった日差しが木陰を濃くし、湖には暗銀色の波が揺れている。

横になってからどれくらいの時間が経ったのだろうか。随分と深く眠り込んでしまっていたようだ。気が付けば、パラディの周りは賑やかな子供の声で溢れていた。

「……!?」

何事かと目を覚ましたパラディの視界を、巨大な草葉が覆っている。

先程まではこんなに巨大な草葉はなかった筈である。これは本来、パラディの足元に生える細かな羊歯の葉であった筈。そう不思議に思って上半身を起こした。

途端パラディは、自身を見つめる巨大な人間たちの姿に気づき、悲鳴を上げる。

「……これって、妖精さん？」

巨大な少年が一人、そう呟くと、その周囲に居た少女らも一気にざわめき出す。少年の翡翠色の瞳には、パラディの姿がはつきりと映り込んでいて……思わず息を飲んだ。

——……何故、こやつにはわしの姿が見えておるんじゃ？

その事実には驚くと同時に、パラディはようやく、自身の身体に起きた変化を知った。身体が縮んでいるのだ。今のパラディはこの少年の手の平程の大きさもない。

戸惑うパラディの目の前で、少年は興奮に頬を染める。

「……すごい。本物だ」

嬉しそうに口元を緩め、パラディが抵抗するより先に、その身体を捕えてしまう。

どうやらこの少年は、見た事のない生き物に対して恐怖するよりも、好奇心が先立つ性格のようだ。

「…怪我、してるんだね。血が出てる…」

手の平に乗せたパラディをマジマジと覗きこみ、少年は言う。

天使のように愛らしい顔と、絹のように輝く蜂蜜色の髪を持ったこの少年は、目を細めパラディをそつと地面に置いた。ポケットからハンカチを取り出し、それを口に咥えて細く千切り始める。手当をしようと考えたのだろう。簡易な包帯でパラディの傷ついた左顔を覆ってくれた。

「——あれ？こうすると、少しかケリイに似てるかも？」

そして次の瞬間呟かれた言葉に、パラディの両肩は跳ねる。

まさかこの人間が、パラディとケリイの関係を察したとは思えないが、それでも、つい深読みしたくなってしまう発言だ。…と、ここでパラディはある事実に気付く。

——…こやつはケリイの事を知っておるのか？

だとしたら、ここで今、この少年に助けてもらった方が良いのかもしれない。そう、パラディは考えた。

手当を施してくれた事を考えると、この少年は善い人間であるようだ。

自分の身体に何が起きたのか、それすら解らない以上は下手に動きまわるのも危険だし、この少年にケリイの元へ連れて行ってもらった事が出来たらそれに越した事はない。

…よし、頼んでみよう。

そう考えて思い切り息を吸い込んだパラディは、次の瞬間絶望した。

「…っ！？」

声が、出ないのだ。喉の中が空っぽで、パラディは何の音も紡ぐ事ができない。

青ざめたパラディの様子に少年は驚き、心配そうにその身体を持

ち上げた。

「大丈夫…？可哀そうに、すごく痛いんでしょ？」

ふるふると首を横に振り、パラディは身振り手振りで何とか、この少年に伝えられないかと考える。

——ケリーの…ケリーの元へ…！

必死で、そう願うパラディ。ふと、少年の視線が自分から外れた事に気づいた。

「…そろそろ離してあげたら？ユアン。」

それは、パラディが今一番聞きたかった声である。

弾かれたように振り返れば、そこには黒いマントで身体を覆った人間が居た。ユアンと呼ばれた少年よりも頭一つは高い長身。命を感じさせない無機質な瞳は、黒く冷たく、見る者に不気味さを感じさせる。

…しかし、パラディは知っていた。その人間が恥ずかしさを堪えていることを。キボウツキの衣装のままで人前に立てるような性格ではないのに、パラディの身を案じる一心で飛び出して来てくれた事を。

「…ケリー！」

本当に突然、声が出た。まるで塞き止められていた川が、再び流れ出したかのように、パラディの言葉は後から後から溢れてきた。驚くユアンの指を解き、パラディはそのままケリーの元に飛んで行く。

——そう、何故かはわからないが、パラディの身体は今、宙に浮かんでいたのだ。

「ケリー…ケリー！会いたかったのじゃあ！」

「ば…馬鹿！パラディ…お前、名前呼ぶなよ！」

どうにかしてごまかそうと思ってたんだから！」

涙目で頭上を漂うパラディを、ケリーは赤面して睨む。

「…もしかして、ケリイって妖精さんとお友達なの？」

不意に、言葉を失ったユアンの背後で、幼い少女が一人、呟いた。鷲色の瞳を持った、誰よりも小柄な少女がそんな事を言い出し、そしてそれが、静かだった少女らを一気に波立てた。

「…すごい。ケリイは妖精さんと話せるんだわ！」

「そういえば変な格好してるし。きっと噂の、怪しい儀式をしてたのね…」

「でも、悪魔じゃなくて妖精さんと友達になれる儀式なら、素敵じゃない！」

わらわらと、少女たちはケリイに群がり、はしゃぎだす。

ここでもうやくユアンから向けられる視線に気づいたケリイ。啞然と開いた口を閉じ、気まずそうにユアンを見た。

「…ケリイ、これはどういう事なの？」

僅かに顔を曇らせ、ユアンは言う。

突然校庭から消えたケリイの事が心配で、後を追ってここまで来た彼は、ケリイよりも先に、パラディと出会ってしまったのだと話す。

ユアンはケリイに、色々と聞きたい事があるのだろう。だがしかし、今のケリイはそれに応える余裕がなかった。

「…あの、ごめん！僕これから用事あるから！」

ただ一言そう放ち、クルリと少女らに背中を向ける。頭上のパラディを片手で掴み取り、そのまま森に向かって駆けだした。

「——…ケリイ！」

ユアンの声が聞こえた。責めるようなその声に、ケリイの顔は歪む。

その肩に掴まり直したパラディは、ここでやっと、ケリイとユアン

の二人が特別な友人関係にある事を察した。

「…すまぬ」

一人振り返ったパラディは、ユアンが寂しそうな表情をしている事を知る。

その姿は、見る見るうちに木々の影に覆われ、消えてしまった。

■ ■ 第十章 ■ ■

夕刻を迎え、窓から吹き込む風は既に冷たい。平たい雲を刷毛で撫で崩したような空は、茜色から濃い藍色に、ゆっくりと移り変わって行く様子だ。

…そろそろランプを灯そうと、ケリイは立ち上がる。

ふわふわと宙に浮かんだパラデイが落ち着きなく部屋を往復し、エルピスの視線がそれを追った。彼だけはこの状況を楽しんでいるらしく、始終ニヤついている。

「——それで、これは一体どういう事なの？」

蠟燭の上で揺れ出した炎の輝きを確認し、ケリイは問う。

パラデイの浮かぶ床に、黒い影が生まれていた。先程、ユアンらに姿を見られていた事もあるし、不可視でなくてはならない彼女が実体を持つてしまった事は確からしい。

…しかも、その身体は縮み、ケリイが傍に居なくては声すら出せなくなる程にか弱い存在に成り果てている。

「…わしも、何が何だかわからぬのじゃ」

宙で衣の裾を翻し、パラデイは困ったように答えた。自然、二人の視線はエルピスに注がれる。彼は軽く肩を竦めてみせた。

「なに。本来ならば消滅してもおかしくなかった身体だ。

その程度の変化で済んで良かったじゃないか」

これはポイメーンの身体から“記憶の逆流”を防ぐ為の緊急処置なのだと、エルピスは言う。パラデイの身体は、消滅しかける寸前で地上の生物としての変態を遂げたのだ。

「——それはつまり…わしはもうポイメーンではなくなったという事か？」

震える声で、パラデイは問う。記憶の逆流を止められたという事は即ち、もう二度とケリイの抱く暗い気持ちを吸収できないという事

でもある。加えて天界での肉体を失ったパラディは、既に天界に住める存在ではなくなっていた。

「可哀そうだけど…これからはケリイと一緒に地上で生きて行くしかないね」

パラディは今、ケリイの傍に居る事で僅かな生命力を得られる体質になってしまっている。…とにかく、死にたくなければ、ケリイから離れない事だ。エルピスはそう言い、可笑しそうに笑った。

「――しかし、このままではケリイの足手まといにしかならぬ。

サナトスの核も取り逃がしてしまっただし…最悪じゃ」

瞳に一杯の涙を浮かべ、パラディは嘆く。

そう、彼女に起きた身体の変化を機に、サナトスの核はどこかへ逃げ出してしまったのだ。その他の破片は全てケリイの手で回収できたのだが、核の行方だけは何故か、確立の瞳で追う事が出来なかった。…エルピス曰く、サナトスの意識がエルピスの力に抵抗している為、予知が成功しないのだそうだった。

「…パラディは、元の姿に戻れないの？」

すっかり落ち込んだパラディを看かねて、ケリイは問う。

「無理だろうな」

エルピスは即答である。

ポイメーンは魂を持たない。だから身体を失えばそれまでの命なのだ。

パラディは残された生命時間を、地上で消化する以外になかった。

「…じゃあわしは、ずっと無力なままなのか…」

ケリイの肩によじ登り、パラディはしょんぼりと項垂れる。その姿が余りにも可哀そうで、ケリイは指先で頭を撫でてやった。

「…このまま一緒に暮らしても、僕は全然構わないよ？」

そう、提案してみる。「ぬう」と小さく唸るパラディ。そんな彼女に、エルピスは相変わらぬ二ヤけ顔で言った。

「そうしろ、パラディ。お前はもう、ケリイと離れては生きれないぞ」

…これはパラディにとって、避けられない事実。それを突き付けられてしまえば、パラディはもう、抵抗する言葉すら思いつかなくて…静かに瞼を伏せた。

「…本当にいいのか、ケリイ。わしの存在はお主の平凡な生活にとって、

邪魔でしかないのだぞ？」

問われ、ケリイは頷いて見せる。

「…そんな事、気にしないよ。それに、死なれた方がずっと困る」
冗談交じりにそう言って、そして笑ってみせた。途端、パラディの顔がくしゃりと歪む。

「…すまぬ、ケリイ。こんなわしでも出来る限りの事はするから…許してくれ」

消え入りそうな程に震える声で、パラディは言う。透明な涙が一筋、頬を伝ったのが見えた。気丈に振る舞おうとしたのだろうが、どうやら失敗したらしい。

そんな彼女の様子にケリイは思わず、眉をしかめてしまう。

「…やめろよ、そういう言い方…似合わない」

パラディは女の子だし、まだ子供なのだから…助けを必要とする事は当然なのだ。人の手を拒絶し、一人で耐え続けた結果がどんなに惨めか、ケリイは身を持って知っている。だからパラディには何の心配もして欲しくないのだと、ケリイは伝えた。

「——僕は天界なんて知らないし…パラディがどんな生き方してきたのかも解らないよ。

でも…君は僕の分身みたいなものなんだろう？

…キョウダイとか、そういう関係になれないかな」

クシャリと頭を掻き、ケリイは言う。…正直、かなり照れていた。顔が熱くて堪らないが、それでもパラディから目を離す事のないよ

う、気を付ける。パラディの頬が、見る見るうちに染まって行くのが見えた。

「…うわああ！ケリイ、お主は良い奴じゃなあ！」

そして…感極まったのだろう、遂に声を上げたパラディは、迷う事無くケリイの首に抱きついて来た。

「…あつ…つちょ…やめ！」

苦しくは無いが、長い髪がくすぐったくて不本意に頬が緩んでしまう。エルピスはしばし、そんな二人の様子を微笑ましそうに見ていたが…

「…ケリイ、今の声…なんかエロい」

とんでもない事を呟いたので、次の瞬間ケリイの投げた枕を顔面に受けていた。

「——それはそうと…ケリイ、どうする？」

わしはこれから、お主の行動全てに付き添う事になるぞ？」

「…あ」

ようやく落ち着きを取り戻したパラディに冷静に尋ねられ、ケリイは我に帰る。

「そ…そうか。僕はパラディを連れて…学校に行かなくちゃいけないんだ」

その事実気づくと同時に、ケリイが思いだしたのはユアンの…彼の傷ついた顔だった。

ケリイは今日、生まれて初めてユアンを無視してしまったのだ。

別れ際、責めるように名を呼ばれた事が忘れられず、胸が痛い。ケリイからの隠し事を極端に嫌うユアンに対して、あの行動はマズかったかもしれない。

…とにかく明日は謝ろう。それで許してもらえたら…良いのだけど。

「——あの…ケリイ。」

わしはユアンとやらがお主を責めるような人間には思えぬのじゃ

が？」

そしてそんなケリイの心痛を察したのだろう。困ったように、パラディは言った。

ユアンに巻いてもらったという包帯に手を添え、上目使いでケリイを見る。

「あやつはお主の友達じゃろ？心配してくれておるだけじゃろつて。説明すれば、解ってくれる」

「…そう…だったら良いんだけどね」

頭を抱え、ケリイは唸った。パラディから何と慰められようと、ケリイが思い浮かべるのは怒りに支配されたユアンの冷たい眼差しだ。

…どう謝ったら、許してもらえるんだろう。説明する手段を考えるよりも先に、謝罪の言葉を模索してしまうのは、ケリイにとって癖のようなものだ。

…そしてそんなケリイの様子に、パラディは眉を潜める。

「もつと堂々としろ、ケリイ」

そう言つて、ペチペチと頬を叩いてきた。

「友を前に弱気になるでない。とても、とっても大切な相手なんじやぞ」

…失ってしまったから後悔しても、遅いんだ。と、そう語るパラディの瞳は、直視できない程に真つすぐだ。

——瞬間、ケリイは思いだす。

彼女はサナトスに、仲間を殺されているのだ。彼女の大切な友は、もう生きていないのだ。

「…ごめん。パラディ」

俯いたケリイの頭を、パラディはふわりと浮かびあがって撫でてくれたのだった。

——そうして迎えた翌朝。

通学途中のユアンを見つけたケリイは、思い切つて話しかけてみ

た。

「あの…ユアン！」

振り返って即向けられるであろう、冷たい視線を覚悟し、ケリイは言う。

「昨日は何の説明もできなくて…ごめん。実は…」

…とにかくまずは、パラディの事を紹介しなくては。焦るケリイに向かい、振り返ったユアンはとびきりの笑顔をくれた。

「ああ、良かった！君に渡したいものがあつたんだよ、ケリイ！」

そう言つて、啞然とするケリイの手に、小さな布切れを握らせる。

薄桃色の布地で作られたそれは、白い花卉のレースで細かく飾られ、大変愛らしい。

「…昨日の夜、一生懸命作つたんだ。女の子だもん、包帯ばつかじや、可愛そうだよね」

「——え？」

マジマジと、手元の布切れを見た。…これはまさか、眼帯…なのか？

「…使つてね。パラディ？」

にこりと微笑んで、ユアンは言う。

名を呼ばれたパラディは、ケリイの肩元にひよっこりと顔を出し

「…ほれ見る。友達とは、こういうものじゃ」

そう言つて、誇らしげに鼻を鳴らしたのだった。

■ ■ 第十一章 ■ ■

その後、ケリイは普段通りに授業中を過ごし、ようやく放課後を迎える。ユアンに促され、ケリイはパラディを教室の子供たち全員に紹介した。曰く、こういうのは公にした方が変な噂にならないのだそうだ。

パラディを前に色めき立つ子供たち。ケリイはただ、頭を掻いて立ち呆ける。

——別に僕。噂なんて、どうでも良いんだけどな。

正直、この現状を面倒くさく感じているのが本音だ。だがしかし、何故か瞳を輝かせているユアンを前に、そんな発言できるわけがない。

…そんなケリイの内心を知ってか知らずか。ユアンはケリイと教室の皆を見比べ、徐に語りだす。

「——いいかい、皆。実はケリイに取り憑いているのは悪魔じゃない。くて、

この妖精だったんだ」

途端、教室中を驚愕が包んだ。

「…は？」

勿論、ケリイも驚愕した事は言うまでもない。今、ユアンは堂々と嘘をついたのだ。

啞然となったケリイの前で、ユアンは真面目ぶって語り始める。

「パラディはともにおちゃめな妖精さんだから、

ケリイの写真にいつも悪戯してみたい。

でも本当は寂しがり屋で、皆と友達になりたがっていたんだよ」

…だから今日から、パラディを皆の仲間にして欲しいと、ユアンは爽やかに言い放つ。

「…ちよ、ちよっと待ってくれ、ユアン」

頭痛がして、ケリイはユアンの背に手を伸ばした。が、しかし、ケリイの言葉は子供たちの歓声によって遮られる。

「す…すげえ！俺たち、妖精と友達になるんだ」

「妖精なんて初めて見たわ。すごく可愛い！」

「おい皆…これ、絶対僕たちだけの秘密だからな！大人に知られたら勿体ない！」

「わぁ…夢みたい」

甲高い声が耳に突き刺さり、ケリイは蹲った。その肩の上で、パラデイがガタガタと震えているのがわかる。

「け…ケリイ。わし、ちと、怖い」

「…僕もだよ」

二人、顔を合わせて溜息をつく。

そしてユアンは、その様子を横目で確認し、柏手を打った。

「皆、静かに！パラデイは恥ずかしがり屋だから、まだケリイにしか慣れてないんだ。」

パラデイと遊びたい人は必ず、ケリイを通すんだよ」

その言葉に、全員が頷き返したのを確認して、ユアンはケリイに視線を向けた。

意味深な笑顔に驚いて、目を見開く。

——…ユアン、まさか…君…？

パラデイを使って、ケリイを教室の仲間に馴染ませようと企んでいるのだろうか。

それに気づいて、ケリイは慌てて立ち上がった。

「あ、あの。ごめん。僕、今日も用事が…」

これ以上の面倒事はまっぴらだ。ユアンには悪いが、ここは逃げさせてもらおう。そう考え、ケリイは教室の出口に向かう。…途端、その背中に褐色の腕が伸びた。

ユアンがケリイを引き止めるよりも早く、一人の少年がケリイの肩を掴んだのだ。

「――つすつげえぜ、ケリイ！お前つてやつぱ、格好良いよな！」
珈琲色の瞳をキラキラ輝かせ、ハルは勝手にケリイの肩に腕を掛けた。

突然の展開に、言葉すら失うケリイとユアン。ハルは教室の子供たちを見渡し、叫んだ。

「よし決めた。今日からケリイは俺の友達な。一緒に遊びたい奴は校庭に来い！」

「…は！？」

状況が理解できないケリイは、抵抗する暇すらなく、そのまま教室の外に引き擦り出される。パラディごと連れ出されてしまったせいもあり、子供たちは一人、また一人と校庭に駆け出して来た。

「…う。ユアン…」

助けてくれ。と、そう願って教室の窓を振り返る。しかしそこには嬉しそうに微笑み、手を振るユアンの姿があつて…

「良かったね、ケリイ！」

どうやら、彼はケリイに友達が出来て満足しているようだ。数名の女子に囲まれ、ケリイを応援するその姿を前に、ケリイはただ、頂垂れるしかない。

「――…実はさ、俺。一度でいいからお前ときちんと話してみたかったんだよね」

ふと、背後から声が聞こえた。見ればそこにはハルが居て、照れたように笑っている。

「ケリイってさ、変な噂ばつがあるし怪しいつちゃ…怪しいんだけど。」

なんとというか、俺は嫌いじゃなかったんだよな」

無口で一匹狼なケリイに、ハルは密かに憧れていたのだと、そう白状した。

「…はあ？」

奇妙な気持ちで、ケリイはハルの顔を見下ろす。

…そういえば、彼は昨日、鳥を追っ払ったケリイに感激して声をかけて来た唯一の人間だったのだ。この言葉は彼の本心なのだろうと、ケリイは思った。

だから、なんだか異様に恥ずかしい。

「…あ、ありがと…？」

とりあえずお礼を言って、照れ隠しのつもりでハルに背を向けた。そうすると、窓際でスケッチブックに鉛筆を走らせるユアンの、楽しそうな姿が目に入ってきてしまう。

——仕方ないか。

だから、ケリイは思った。ユアンと、そして今日勇気を出して誘ってくれたハルの気持ちをも、今日だけは汲んでみる事にしよう。

校庭に集まった子供たちに呼ばれ、ケリイは彼らの元に走って行った。

…そしてこの後、ケリイは少年らとの遊びに夢中になってしまうことになる。

元々、身体を動かす事が好きな性質だったのだ。元氣盛りの子供たちと遊びまわる事が楽しくないわけがない。余りにも夢中になり過ぎて、気が付けば日も暮れる始末である。

結局、この一日のうちにケリイは、沢山の友達を作ってしまったのだった。

■ ■ 第十二章 ■ ■

翌朝の空は薄暗く、灰茶色の雲からパラパラと小粒の雨が屋根を打った。

…この暗さのせいだろうか、いつもより遅い時間に起きてしまったケリイは、通学路でユアンに会う事が出来ず、慌てて入った教室でようやく、その姿を確かめた。

「ユアン…昨日は、ごめん！」

ユアンの座る机の前に立ち、ケリイは真っ先に謝る。

昨日は余りにも遊びに夢中になり過ぎて、ユアンを家まで送り損ねていたのだ。その事が申し訳無さ過ぎて、ケリイは顔を上げる事ができない。

そして…ユアンはそんなケリイの様子が面白かったのだろう。口元を手で押さえ、クスクス笑い始めた。

「…そんな事、気にしなくて良いのに。」

でもまさか、ケリイがあんなに人気者になっちゃうとは思わなかった」

意外だったが、今までにないケリイの表情が見れて嬉しかった。そう言つてユアンは、ケリイの肩に居るパラディに目を向けた。

「君のお陰だね。ありがとう、パラディ」

その言葉に照れて、ケリイの後ろ髪に隠れてしまうパラディ。その左目には、ユアンの作ってくれた可愛らしい眼帯がある。これを付けたせいかは解らないが、パラディは今朝から機嫌がとても良いのだ。

『女の子だから、可愛くしないと』

もしかしたら、ユアンに言われたその言葉が嬉しかったのかもしれない。

チラチラとユアンの様子を覗き見るパラディの顔は、既に耳まで真

っ赤だった。

——パラディの奴…すっかりユアンが気に入ったみたいだな。

彼女はケリイの分身なのだから、その親友であるユアンを好ましく思うのは、当然の事なのかもしれない。ただ、その素直過ぎる反応を前にしてしまうと、妙な恥ずかしさを感じてしまうのは事実だ。

「本当…ごめんね、ユアン。今日は必ず、一緒に帰るから」

照れ隠しのつもりでケリイは言う。途端、始業の鐘が鳴り始めた。

「先生来たぞ、ケリイ！パラディ隠せ」

教室前方で廊下の様子を伺っていたハルが声を飛ばし、ケリイは慌てて席に着く。

机横に置いたサックに入るよう頼むと、パラディは不満気に頬を膨らませた。

「カバンの中は、退屈じゃから嫌いじゃ」

ぶつぶつ言いながらも、それでもきちんとか中に潜り込んでくれる彼女に、ケリイは無言で砂糖玉を数個、差し出した。

「…なんじゃ、これ」

きょとんと、手渡された物を見つめ、パラディは問う。

「お菓子。隣の席のコがくれたんだ。パラディに食べて欲しいんだって」

小声でそう説明してやる。パラディはしばらく訝しそくに砂糖玉を睨んでいたが、やがて勇気を出したようにかぶり付いた。

「…うまっ」

「良かったね…」

どうやら、味の評価は大感激に至ったようだ。ケリイは、夢中で砂糖玉を味わうパラディごとサックの口を閉め、それを床に置き直した。

その直後に教師が現れ、そして本日の授業が始まる。

一限目の歴史の授業が終われば、運動の授業が予定されている。そ

れまでに雨が上がってくれば、と窓の外を眺めていたのだが、それは叶わなかった。

「——今日は雨だからな…次の授業は平気な奴だけ参加しろ。他は自習で良い」

一限目の終了後、教師はそう一言残して壇上を離れる。

雨とはいえ、気温は高いし、ケリイにとっては何の問題もないだろう。

濡れても良いように上着を一枚脱いで、薄いシャツ一枚になった。

そんなケリイに、ハルが嬉々として駆け寄ってくる。

「おっしや。ケリイ、お前も勿論行くよな？先に外出て、昨日の続きやろうぜ！」

「…え？」

見れば彼の手には、褐色のゴム玉。ゴム玉蹴りは学校の男子の中で今一番流行っている遊びらしく、昨日もケリイはこれに参加した。正直とても楽しくて、一度やり始めたら時間が経つのも忘れてしまえるだろう。

…そう。既にケリイは、ハルたちと一緒に遊ぶ事に抵抗を感じていない。

だがしかし、今のケリイの目の前にはユアンが座っている。丁度二人で雑談していたところだったのだ。突然二人の会話に割り込んできたハルに驚き、ユアンの顔は一気に青ざめていた。

「あ…あの。良いよ、ケリイ。僕の事は気にしないで」

たどたどしく、そう言って笑うユアンだが、彼がハルを良しとしていない事は確かだった。元来ユアンは、ハルのように乱暴な男子を毛嫌いする性質があるのだ。その事を知っているから、ケリイは落着かない気持ちになる。

「——だってよ、ケリイ。行こうぜ」

他の面子は既に外で待っているのだと、そう言ってハルはケリイ

の腕を掴む。

思い切り腕を引っ張られた拍子にケリイの身体はユアンの机に触れ、そこにあつたスケッチブックを落としてしまった。

「ちょ……ハル！」

俯いて、スケッチブックを拾い上げるユアンが見えた。ユアンに謝りたいのに、ハルは一方的にケリイを引き擦って行く。校庭に出た途端、慌てて教室の窓を振り返った。

そこにはいつも通りユアンが居て、少し寂しそうにこちらを見ている。

……何か声をかけなくては。そう思うのに、雨の音が、ハルに掴まれた腕が思考を乱す。

「——よし。それじゃあ今日はケリイから始めるぞ」

校庭に集まつた少年らに向かい、ハルは言う。

目の前に差し出されたゴム玉を反射的に受け取り、ケリイはそれをじつと見つめた。

これを地面に落とし、ケリイが蹴り上げたらゲームスタートなのだ。隣り合つた少年がそれを足で受け止めて蹴り上げ、そのまま地面に落とす事なく校庭隅に映えた榛の木まで運んで行く。たったそれだけの簡単なゲームではあるが、成功させることは難しく、思わず意地になって、やり続けてしまう。

「いくよー……」

そう声をかけて、ケリイはゴム玉を蹴る。高く飛び上がったそれをハルが受け、隣へ、隣へとパスが続いて行つた。そしてゴム玉が赤毛のチャスの元まで飛んだ時、校庭の少年らを、絶望の溜息が包む。

ゴム玉が遠くに飛びすぎたのだ。チャスは太めの体格が災いして走るのが遅い。明らかに間に合わない速度でボールを追いかけるチャスを見て、ケリイは走り出した。

——僕なら、間に合うかもしれない。

確かに距離はあるけれど。しかしケリイには自信があった。走る事だけは得意なのだ。

ゴム玉の着地直前、僅かに腰を落として足を投げ出す。上手く弾かれたゴム玉を、今度こそチャスが蹴り上げた。

「よ…よっしゃ！」

遅れて走って来たハルがさらにそれを受け、次の瞬間、ゴム玉は榛の木の下に落ちた。

ゲームは成功したのだ。

少年たちから、次々と歓声があがる。ケリイが面子に加わってからは、これが初めての成功だった。達成感を飲み込み、一人拳を握っていたケリイは、あつと言う間に少年たちの感激の嵐を受ける。

「すっげえぜ、ケリイ！やっぱお前、最高！」

そう言つて、躊躇いすら見せずにケリイに抱きついてくるハル。

他の少年らも思い思いにケリイの肩を叩き、口々にその功績を褒めた。

「は…恥ずかしい奴らだな、お前ら」

思わずそう赤面し、少年らを振りほどくケリイ。だが実のところ、その頬はかなり緩んでいた。

嬉しかったのだ。成功させられた事が、そしてその喜びを共有する相手が居る事が。

——やばい…僕、こいつらの事、好きなのかも。

らしくないくらいに強く、ケリイはそう思った。そしてそのまま振り返り、ケリイは校舎に向かって手を振る。

「ユアン！」

いつも窓際に立って、ケリイを応援してくれるユアンに、この喜びを伝えたかった。

きっと彼もまた喜んで、ケリイに手を振り返してくれる筈。そう信じて疑わなかったのだ。

…なのに。ユアンは俯いていた。

俯いたまま手元のスケッチブックを閉じて、窓に背を向けてしまった。ケリイの聴覚を、雨の音だけが埋めて行く。

「…え？」

雨に濡れた教室の硝子窓は、瞬く間にユアンの姿を隠してしまう。何が起きたのか理解できない。茫然と立ちつくしたケリイの横で、ふとハルが呟いた。

「ユアンって…変わってるよな」

雨音に重なって、始業の鐘が鳴り始める。雨合羽を被った教師が校庭に現れ、直ぐに集まるようにと声を飛ばした。

「——ほら、行くぞ」

促され、ケリイは無理矢理、窓から視線を剥がす。胸が凄く苦しかった。何が原因かはわからない。ただ、ユアンを悲しませてしまった事は確かだった。

——…どうしよう。

地面に落ちたスケッチブックを拾う、ユアンの後ろ姿を思い出す。

…この授業が終わったら、直ぐに謝ろう。そう心に決めて、その後は運動の授業に神経を投じた。可能な限り手足を酷使し、ユアンに対する後悔をごまかす。

短距離走で自己記録を更新した事も、その事を褒めてくれる友達が増えた事も、今のケリイにはどうでも良かった。ただ、ユアンの事が心配で、授業が終わると同時に教室に駆けだした。

「ユアン…先に帰ってしまったぞ」

そしてパラディから告げられた言葉が、ケリイの胸に、鋭く突き刺さる。

「気分が悪いんじゃない？…カバンも持たずに帰ってしもうた。大丈夫かのお？」

不安そうに宙を漂うパラディ。ケリイはそんな彼女すら、まともに見る事が出来なかった。

「…っ！」

耐え切れず、ケリイは再び外に走り出す。驚いたパラディは、それから数秒遅れて後に続いた。

「ケ…ケリイ！？いきなりどうしたんじゃ！？」

空を覆う雲の色はより濃くなり、雨脚は強まる一方だ。遠くで轟くこの音は、雷なのだろうか。

「ユアンを…追いかけてなくちゃ！」

「しかし…ユアンが教室を出たのは大分前じゃぞ？」

今更追いかけても恐らく意味はないだろう。そう声を掛けるパラディに対し、ケリイは頭を振ってみせた。髪の上に溜まった滴が、白く濁って宙に散る。

「——約束してたんだ…今日は絶対一緒に帰るって。

ユアンは僕との約束、絶対守ってくれるから…！」

だからケリイは走るのだ。校庭を駆け抜けて、林道に入る。緩やかな坂を登り切った先にはケリイとユアンが初めて出会った、あの木陰がある。ケリイの家とユアンの家の中間に位置するそこは、今では二人の待ち合わせ場所になっていた。…そしてやはり、今日もユアンは、そこで待っていてくれたのだ。

「——来なくても…良かったのに」

降りしきる雨を頬に滴らせ、ユアンはゆっくりと振り返る。影の落ちた翡翠色の瞳には、普段のような明るさは無く、ただ無機質にケリイを捉えていた。

「来なかったら…僕は君の友達を辞めれたんだよ。ケリイ」

「…何…言ってるの？」

切れる息を整え、ケリイは眉を潜める。あと数歩進めばユアンに届く距離、なのにケリイはもう、それ以上近づく事ができなかった。…ユアンは、怒っているのだ。辺りを包む冷やかな空気が、それを

物語っていた。

「ねえケリイ。僕はね…今日とっても、反省したんだ。

…君となんか仲良くするんじゃないかった」

濡れた髪を掻き上げ、ユアンは言う。眉ひとつ動かさない、人形のように整った彼の美貌に睨まれ、ケリイの肌は粟立った。

「な、なんでそんな事！…僕、ユアンを怒らせる事したのかな？だつたら謝るから」

だから許して欲しい。これからも友達で居て欲しいと、ケリイは懇願する。しかしユアンはそんなケリイに向かい、冷たい笑みを浮かべた。

「嘘つかないで。どうせ僕の事、邪魔な奴だつて思ってるんでしょ？」

「——…は？」

一瞬、全ての時が、止まったのかとすら思えた。煩わしい筈の雨音すら聞こえず、ケリイの世界を無音が埋める。

「…ね。笑ってごらんよ、ケリイ。ハルや…皆の前で見せたみたいにさ」

ユアンは言う。濡れた脚を一步踏み出し、まるでケリイを威嚇するように…

「できないんだ？」

気が付けば、翡翠色の瞳はケリイの間近にあった。

「僕にはあんな笑顔…見せてくれないんだ？」

ユアンに掴まれた肩が痛くて、もう呼吸すらできない。こんなユアン、初めてだ。何が彼をここまで怒らせたのか理解できなくて、ケリイの思考は硬直する。

…不意にユアンの視線が逸れた。

「——なんとか言つて、ケリイ。このままじゃ僕が…間抜けじゃないか」

俯いたまま、ユアンは言う。ケリイを守るのは自分だけだと驕つて、ケリイが他の友達を作る機会を奪ってしまったのなら、自

分なんて居ない方が良かったのではないか。そう言つて、小さな肩を震わせる。

「――…ユアン、僕は…！」

そんな事、一度も思つてない。ケリイにとってユアンは、誰よりも大切な親友なのだ。代わりなんて居るわけがないのだ。しかしケリイが必死に言葉を紡いでも、ユアンはただ頭を振るばかりだった。

「…ごめんね、ケリイ。でも、もう終りしよう。それがきつと、お互いにとって幸せだ」

そう言つて、ユアンはケリイに背を向けてしまう。一度もケリイの顔を見ないまま、走り去ろうとしてしまう。

「…っユアン！」

ケリイは叫んだ。振り返つて欲しくて、せめて聞いて欲しくて…

「僕は嫌だ…絶対嫌だ！」

「――離して」

華奢な腕を振り上げ、ユアンはケリイに抵抗する。振り向いた翡翠色の瞳には、一杯の涙が浮かんでいた。

…空が光る。数瞬遅れて、とてつもない轟音が辺りに響き渡る。

どこかに雷が落ちたのだろうか。…そして、その衝撃に驚いたのだろう。ユアンは小さい悲鳴を上げて、その身体を大きく痙攣させた。

「――…ユアン？」

気が付けば、彼の身体に力はない。グラリと半身を揺らし、そのままケリイに倒れ込む。青ざめた顔、目を見開いたまま痙攣を繰り返すその状態に、ケリイははつとなった。

これは彼の持病の発作だ。しかも重度の…

「…ケリイ、これは…！」

「ユアン…ユアン、しっかりして！」

パレードの乗った頭から、足の先までの血液が、一気に凍りついたのが解る。

強張る足を叱咤して、ケリイはユアンを抱え、走った。

――ユアン死ぬな…死んじゃ…駄目だ！

ただひたすらに祈りながら、雨を切ってケリイは走る。その視界は、木々を包む深い霧に飲まれ、あつと言う間に白く染まる。…正気なんて、保てるわけが無い。身体中が震えていて、それでもケリイは何度も親友の名を叫んだ。しかしその声は、もう届かなくなっていたのだ。

■第十三章■

——ある日、パラディは夢を見た。今は亡き、友の夢だ。

翡翠色の瞳を持った彼は泣き虫で、パラディが傍に居ないとすぐに落ち込んでしまう。

今日も彼は泣いていて、だからパラディは声をかけた。

「……どうしたんじゃ？」

悲しい事があつたのなら話して欲しい。そう言つて頭を撫でてやると、彼はゆっくりと首を横に振った。

「違うよ。悲しいんじゃない。嬉しいんだ。」

ケリイに沢山の友達が出来て、僕は本当に嬉しいんだ」

そう呟いて、顔を上げた彼は既に亡き友ではない。

……そこに立つていたのはユアンだった。

「……ありがとう、パラディ。君がいてくれたお陰で、

ケリイは本当に笑えるようになったんだね。」

僕が出来なかった事、君が全部やってくれたんだね」

……ずっと、ケリイを守るのは自分だけだと思ひ込んでいたけれど、違つたのだ。

そうユアンは言う。

「ケリイは僕なんかよりもずっと強いんだもん。僕の助けなんていらなかったんだ」

そう言つて、ユアンはパラディに背を向けてしまう。

——……ユアン？

待つてくれ。と、そう手を伸ばして、パラディは気付いた。ユアンが死んでいる。

サナトスに喉を食われ、ユアンが息絶えている。それはパラディの友の最期と、全く同じ光景だった。

「……っ……っ……ああー!!」

瞬間、自分の物とは到底思えない狂気が心を埋め尽くす。

本当はパラディは知っていた。大切な友に死の運命が迫っている事も、サナトスというスリープシスが現れ、パラディの仲間たちを殺してしまう事も…全てエルピスから聞いていた。

…だからパラディは逃げたのだ。エルピスの封印された箱を抱え、一人舟の奥に身を潜めていたのだ。地上の平和を守る為ならば、ケリイを守る為ならば仕方が無いと自身に言い聞かせ、仲間の危機に背を向けた。

『…っ…すまぬ！すまぬ！』

助ける事の出来なかった仲間の名を呼ぶ。一緒に死ぬ事の出来なかった友の名を呼ぶ。しかし、どれだけパラディが叫んでも、声は届かなかった。

張りつめた糸が切れるように、プツリと終わったその悪夢は、パラディの意識をぼんやりと濁らせる。目を開けば、涙が、後から後から零れ落ちていた。

白いシーツに滴る滴を、袖口で拭い、パラディは上半身を起こす。

「…いつまでも、過去を引き擦っては…駄目じゃ…」

不本意に漏れてしまう嗚咽を噛み殺し、パラディは自身に言い聞かせた。

「今出来る事を…しなくては。また無力なままで、終わってしまう…それだけは、何としても避けなくてはいけない。そう強く思っ、パラディは顔を上げた。

まだ薄暗い部屋の窓に、温い雨粒が滴って行く。

あの日振り始めた雨は、数日が経過した今も止む事が無い。長いこの雨は今年が酷暑になる証拠なのだと、ケリイは言った。湿気が島の気温を上げ、本格的な夏を呼び込むのだ。

『雨が止んだら、学校の皆と湖で遊ぶんだ』

そう言っ、寂しそうに笑っていたケリイは今、深く毛布を被って、ベッドの上で寝息を立てている。

「…ユアンもないのに、か」

ぼそりと、パラディは呟いた。人前では笑顔でいるよう努めてい

る様子だが、ケリイが報われない孤独の中に漂っている事は確かなのだ。

もう間もなくすればケリイは目覚め、そして一人外に出て行くだろう。

あの日から学校に来る事がなくなったユアンを迎える為、ケリイは雨の降る道を歩いて行くのだ。

ユアンは今、深い昏睡状態に陥っていた。

雨の中で倒れたユアンは一度病院に運ばれたが、既に医者の手に見える状態ではなかったのだ。

『ユアンの病気って…治療がすごく難しくて。

酷い発作が起きたらそれで終わる命なんだって…義父さんから聞いてた』

…でも、最近は発作も殆ど無くなっていたから。だから心配していなかったのに。と、そう言つてケリイは唇を噛みしめる。

——ユアンはもう、長くない。そうエルピスに言われ、崩れ落ちたケリイは、それでも涙を見せなかった。

悲しいとも悔しいとも口に出さず。ただ毎朝、ユアンの部屋の窓の下に立って、心優しい友人が顔を覗かせるのを待ち続けた。

始業時間ぎりぎりまでケリイは待つて、そして学校に向かう。そんな毎日がケリイの心を壊していく事に、パラディは気づいてた。

しかし、ユアンの元に行きたがるケリイを止める事など、出来るわけがないのだ。

ふと、ケリイの目覚める気配がする。

それと同時に、とても切ない感情がパラディを襲った。

…目が覚めたら手を握つてあげよう。ケリイが無理して笑おうと頑張るのなら、自分も決して、涙を見せないようにしよう。そう考えて、パラディは窓際に向かう。

窓硝子に写る顔を見て、涙の跡を隠そうと思ったのだ。

薄い硝子の向こうには、相変わらず暗い空が広がっていた。パラディはそこに写る自分の顔を覗きこみ…次の瞬間驚愕した。

窓の下にユアンが立っている。

雨に煙り、今にも霞みそうな蜂蜜色の髪を濡らし、パラディを見上げて、嬉しそうに手を振っている。

…夢の続きを見ているのだと思って、目を擦った。しかしそれでも、そこに居る人影は消えなくて。…耐え切れず、パラディは窓の外に飛び出した。

視界を遮る雨粒すら忘れ、ユアンの元に飛んだ。結局溢れてしまった涙が、パラディの頬を掠め、雨と一緒に遠く流れて行く。

——ユアン！

口の動きだけでそう叫ぶ。ユアンの、そのゆっくりと差し出された腕の中に飛び込み。その胸に顔を当てる。

パラディは嬉しかった。ユアンの病気が治った事が、これでケリイが、あの悲しみから解放される事が。とても嬉しくて、幸せで。

…だから、ユアンの心臓の音が聞こえない事に、気付く暇すら無かった。

「…っあ…っ！！」

腹を突き破る、何かの感触。赤い血が唇から、そして体中の傷口から溢れ出す。

驚愕に目を見開いて、パラディはユアンを見上げた。

パラディに突き刺さった何かが、今、ゆっくりと引き剥がされる。

数秒の後、ユアンの手から、血のついた果物ナイフが一本、地面に落ちたのが見えた。

視線を動かせば、目の前には、綺麗で優しい笑顔を浮かべたユアン。

彼は愛おしげにパラディを抱き締めて、そして囁いた。

『オイ・・・シイ』

ぞろりと空気が動いて、ユアンの背後から幾つもの鎌首が伸び始める。

小さな瞳は赤く怪しく光り、その長い舌でパラディの血液を拭った。

——…サナトスじゃと？…これは…っ…なんで

何もかも理解できない。パラディの身体は徐々に冷たくなり、そして視界はぼやける。

…消えて行く意識の中で一瞬見えたのは、パラディとユアンが初めて出会ったあの日の光景。サナトスの核が、パラディの手の中からユアンの身体へと向かい、ゆっくりと移動していく姿だった。

■第十四章■

吐き気がした。目が覚めた途端、酷い眩暈だ。これは熱でもあるのだろうか。

のっそりと身体を起こし、ケリイは嗚咽を飲み込む。開け放たれた窓から雨粒が舞い込み、床に水滴を零しているのが見えた。丸い水滴が幾重にもブレて見え、ケリイは耐え切れずに洗面所に走る。嘔吐感、胃が空っぽになるまで続き、顔を上げる頃にはとんでもない脱力感があった。

「……なんだ……これ」

風邪を引いた事くらい勿論あるが、こんなに酷いのは初めてだ。昨晚までは健康体だったことを考えると、やはりこれはおかしい。

助けを求めて居間に向かったが、そこに義母の姿はなく。尋ねた義父の寝室も空っぽだった。

……義母も義父も居ない。それどころか、いつもケリイの傍に居る筈のパラディまでもが姿を消している。何かがおかしい気がするが、その違和感の正体に気づける余裕は、今のケリイに無かった。

「——ユアンに……会わないと」

茫然とした唇で呟き、ケリイはふらつく足で家を出る。今日の空は快晴で、久しぶりに見た太陽の光はケリイの目を焼く程だ。

道に生える木々に手を付きながら、ケリイは歩いた。坂の向こうに見えるブルーイット宅の青い屋根を指せば、そこに立つ麗しい貴婦人に会おう。

蜂蜜色の髪を優雅に結い込んだ彼女は、ユアンの母親だ。

息子が昏睡してからは、ひと時もその傍を離れていないと聞いていたが。そんな彼女が何故、家の外に居るのだろうか。

『ユアンなら……もう学校に行きましたよ。今、見送った所です』

啞然となり立ち尽くしたケリイの前に、ユアンの母は、幸せそうに微笑む。そして、そのままケリイの手を握った。

『ユアンは、ケリイに会いたがっています。あなたも早く学校に行ってください』

優しくそう促されてしまうと、ケリイにはもう、頷く事しかできなかった。

——ユアンが…目を覚ました？

信じられない気持で、その事実を反芻する。

夢でも見ているのかと思って頬を抓ったが、痛みは本物だ。

嬉しいと感じる暇すらない。焦りと戸惑いで心臓が爆発しそうになる。ケリイは速足に学校に向かった。視界が歪み、呼吸が乱れる。倒れ込むように教室の扉を開ければ、そこには夢のような現実が待っていた。教室の中央の席に、ケリイの大切な親友が腰掛けている。彼以外は誰も居ない教室に差しこむ日差しは、とても明るい。蜂蜜色の髪は、日の光によって、柔らかな糖蜜色に縁どられていた。

——…そうだよ。この後ろ姿は間違いなくユアンだ。

本当にユアンが、ここに居るのだ。胸の鼓動が一気に加速して、ケリイは呼吸すら忘れる。

『——ケリイ？』

そして、ユアンは振り返る。ケリイの姿を見て、嬉しそうに微笑む。

白い頬は桜色に染まり、キラキラと輝く大きな瞳は、健康そのものといった様子だ。

…つい昨日まで、病に伏せていた人間とはとても思えない。奇妙な事この上ないが、それでもこれは、ケリイの望んだ姿だった。世界で一番大切な、親友の姿だった。

「ユアン…」

扉に寄りかかり、今にも倒れそうな身体を無理矢理立たせる。眩暈も吐き気も酷くなる一方だったが、それでもケリイは、零れる笑みを抑えきれなかった。

「ああ…すごい。本当にユアンだ…ユアンが居る…」
震える声で呟いた。しかし次の瞬間、ケリイは意識と身体が分解されたような感覚に陥る。気が付けば視界の上下がバラバラで、堪らずケリイは床に崩れ落ちた。

ユアンの驚く声が聞こえ、慌てたように座席を立った気配がする。頬に触れる床は冷たく、身体中の体温が消えてしまったのかと疑う程に、ケリイを侵食した。

…寒い。身体が言う事を聞かない。

——どうしてだよ…折角ユアンに会えたのに！

苦しさをごまかすように、ケリイは瞼を伏せた。そんなケリイの頬を、ユアンの温かな手の平が撫でて行く。

『ケリイ…一体どうしたの。顔、真っ青だよ？』

心配そうなユアンの声。とりあえず保健室に移動しようと促され、ケリイは大人しく従う。ユアンの華奢な肩に体重を預けてケリイは歩く。とても情けない姿の筈なのにケリイは今、とても嬉しかった。

——ユアンは…生きているんだ。

その事実だけがケリイの胸を喜びで埋めて行く。深い孤独の痛みが、みるみるうちに癒されるのが解った。

…ユアンと話したい。そう、ケリイは思った。

もつとユアンに触れたい。なのに、どうあがいても、身体は言う事を聞いてくれないのだ。

保健室の簡素なベッドに身体を横たえれば、ユアンがその上に毛布を掛けてくれた。

優しい彼は、冷たくなったケリイの手を握り、そして囁いた。

『——すごく苦しそう。可哀そうなケリイ…』

「…ユアン」

薄く瞼を開け、ケリイはユアンを見る。きっと自分は今、ユアンを相当心配させているのだ。病み上がりの彼に気を使わせてしまっ

た事が恥ずかしい。

——僕はもう大丈夫だから。

そう伝えようと口を開いて、そしてケリイはそのまま硬直した。

ユアンが、笑っている。

怪しい程に麗しいその笑みは、そのまま唇からも零れ落ち始めた。クスクスと、ユアンは笑う。笑いながら、愛おしそうにケリイの頬に触れる。

『ああ。本当に君は、なんて可哀そうなんだ。ずっと僕が、守ってあげるからね』

そう囁くユアンの顔が余りにも近くて、ケリイは目を見開いた。ギシ…と、ベッドの軋む音がする。ケリイの身体に覆い被さり、その顔を覗きこんだユアンは、そのまま自らの唇を、ケリイのものに這わせた。

「…っ!？」

何が起こったのか理解できない。耐え切れず瞼を伏せたケリイは、口の中に侵入してくるユアンの舌の感触に気づいた。嫌な水音が聴覚を刺激し、思考を乱す。

硬直したケリイを宥めるように、ユアンはゆっくりと手を動かし、ケリイの髪を撫でた。

——おかしい…

そこでようやく、ケリイは違和感に気づいた。

——こんなの、ユアンじゃない。ユアンがこんな事…するわけがないんだ

長いキスが終わる。ユアンは潤んだ瞳を細め、恍惚の息をつき…そしてそのままケリイの身体を抱き締めた。

『…ケリイ』

甘く、ユアンは囁く。妖艶に細められた翡翠色の瞳は怪しく輝き、戸惑うケリイを映し出していた。

…遠くで、始業の鐘が聞こえる。

それを合図にケリイの思考が覚醒し、自らの陥った危機を知った。

「…っ！ユアン…あの…ほら、もう授業始まるから…！」

恥辱に血が上る。

熱くなる顔を無理矢理ユアンから逸らし、両腕でユアンの身体を押し返した。

とにかく悔しくて、殴れるものなら殴りたい気持ちすら湧き上がるが、相手はケリイの大切な親友なのである。傷つける事など、できるわけがない。

「教室の皆…君の事待ってると思うし…それに僕、この事はもう、忘れるから！」

だからユアンは、何も気にせず、教室に戻って良いんだと。そう言い聞かせる事が、今のケリイに出来る精一杯の抵抗だった。

ふと、ユアンの表情が曇るのが見える。

恐る恐る視線を向ければ、そこには、すっかり色を失ったユアンの姿があった。

…何故ユアンはケリイにキスなどしたのだろう？

その事は相変わらず解らないが、それでもケリイの言葉がユアンを傷つけてしまった事は確かだ。続く重苦しい沈黙に胸が痛く、寒気のせいもあって、身体中を震えが襲った。

『——皆なんて、居ないんだよ？ケリイ…』

…ふと、ユアンが呟く。

意味が分からず、思わず目を開けば、そこには狂った笑みがあつた。

『…ケリイには僕以外の友達なんていちゃいけない。』

だから皆殺してやったんだ。ハルも、パラディも…みんな、みんな！』

クスクスと笑い声を零し、ユアンはその手をケリイの首に伸ばす。

この狂気を前に、ケリイは言葉すら忘れた。僅かに首の締まる感触がして、目を見開く。

——…殺した、だって？

ユアンのその言葉を、ケリイが信じられるわけがない。

確かに今日はパラディの姿は見当たらなかったし、学校に来るまでの間、ユアンの母以外の人物に出会わなかった。…でも、だからって、ユアンの言葉を裏付ける証拠にはならないのだ。優しいこの少年が、人の命を奪うなんてありえない。

茫然と、ただ真つすぐにユアンを見つめるケリイに向かい、ユアンはその綺麗な顔を歪めた。

『——愛してるんだ。ケリイ。』

まるで今にも泣き出しそうに、声を震わせてユアンは言う。

『ねえ。僕だけのモノになってよ』

「…っ！」

綺麗な指先が、痕を付ける程に強く、喉に食い込んだ。息が止まり、ケリイの視界は霞んでしまう。

『…君が嫌がるなら、君もろとも死んでやるんだから』

…聞こえるのはユアンの暗い声。そしてばやけた視界に映るのは、ユアンの背後に揺らぐ黒い影。

——…サナトス！？

気付いた途端、自動的に身体は動く。ユアンの腕を掴み、上半身を起こすと同時にその華奢な身体ごとベッドの上に投げやった。啞然と目を見開くユアンの前で、ケリイはエルピスの名を呼ぶ。

静かな保健室が、窓の外の青空が、瞬く間に崩れ落ちて行く。そうして、そこに生まれた暗闇に、黄金色の魔物が現れた。

瞳に怒りの炎を灯したエルピスは、ケリイの身体を抱き起こし、苦々しげに言う。

「何故、もつと早く私を呼ばないんだ。こいつはケリイを…殺しに来たのだぞ!？」

怒鳴られ、ケリイは身を竦める。

気が付けば、そこは早朝の教室。滝のような雨が窓を打ち、部屋中が薄暗い。

キボウツキに変身したせいか、既に吐き気や眩暈は無く、思考は怖いくらい冷たく冴える。そう、ケリイは今まで夢の中にいたのだ。サナトスの生み出した、悪夢の世界に。

——…嘘…だろ。なんでサナトスがユアンの姿に？

視線を上げれば、目の前に黄金色にく輝く少年が居る。今やユアンはこの世の人間とは思えない程の美しさを放ち、サナトスの擬態としての役割を、充分に果たしていた。

「…なんでサナトスが復活してるんだよ。なんで…ユアンが喰われてるんだよ!」

震える声で、ケリイは呟く。エルピスは顔を伏せ、答えた。

「…ユアンは病気のせいで深い眠りに入ってしまった。」

夢喰いのサナトスにとって、最高の餌場になってしまったんだよ」空想力の強い、ロマンチストな性格のユアンの夢の世界は、さぞかし居心地が良かったのだろう。すっかり力を取り戻したサナトスは、そのお気に入りの人間の魂を喰ってしまった。

「——…酷い」

一気に、頭に血が上って行くのを感じる。これは怒り、そして悔しさなのだろう。

——サナトスが、ユアンを殺したのだ。

まだ生きた筈の彼の運命を、そして人間としての彼を、無茶苦茶にしてしまったのだ。

口から悲鳴にも似た叫び声が上がリ、そのままケリイはサナトス

に突進する。

両手に炎を生み出し、ユアンに群がる黒い鎌首に叩きつけた。

『…ッギ』

しかし、獣のような唸り声を上げて、地面に倒れたのはサナトスではなく、ユアンの方だ。

炎に焼かれた痛み顔に顔を歪め、その瞳を黄金色に光らせる。

『ケリイ…なんで？』

大きな瞳に涙を零し、ユアンは言う。…否、これはもう、ユアンではないのかもしれない。

それは解っているのに、その顔で、その声で名を呼ばれてしまうと耐え切れなくなる。

「ユアン…！」

慌てて、ケリイはユアンの身体を抱き起こした。

「なんでだよ…！なんで君がサナトスなんか…！」

悔しくて、ただユアンの肩を抱き締める。その華奢な肩が、小さく震えているのがわかった。

『…ケリイ。どうしたの？君、変だよ。僕…怖い…』

たどたどしい口調で、ユアンは言う。その様子が余りにも幼くて、ケリイは懐かしくなってしまった。幼い頃のユアンは、いつもこんな風に泣いていたのだ。

ケリイが傍に居てやらないと、なかなか泣きやまない子供だったのだ

「ユアン…ごめん。もう僕、君を傷つけるような事、しないから」

だから、ケリイはそう言った。

先程彼から受けた屈辱も、“擬態”という言葉の持つ意味すら忘れて、ケリイは目の前の少年を、守りたいと思った。

『——本当？よかった』

そう言つて、顔を上げるユアン。微笑むその顔に、涙の跡など見当たらない。

騙された事に気づく暇もなかった。気が付けばケリイの右足は、黒

い鎌首に貫かれていたのだ。

「…う、うあああ！！」

赤黒い血が辺りに飛び散り、激痛に身体を折る。

そんなケリイを見て、ユアン…否、サナトスは声を上げて笑った。

『君は何か勘違いしてるんだね、ケリイ。』

僕は自分の意思で、サナトスに魂を喰わせたんだ』

…深い眠りの世界をユアン漂っていた。永遠とすら感じる長い時間を漂ったその果てで、ユアンはサナトスと名乗る金色の仔馬に出会ったのだ。

その仔馬は凄く弱っていて、ユアンに『助けてくれ』と懇願してきた。もし助けてくれたなら、ユアンの一番大切な願い事を叶えてあげるのだと。

『——迷わなかったよ。だって僕には、どうしても叶えたい願い事があったからね』

その言葉に、ケリイは思わず顔を上げた。

とても間近な位置で、サナトスが優しく微笑んでいる。そつと身を屈め、ケリイの頬に触れると、言った。

『僕は君が欲しいんだ…ケリイ。僕から君を奪う者は、全て消し去ってしまいたい。』

だから、皆殺したのだ。そう言っつて、サナトスは笑う。

サナトスの見せる悪夢の世界に引きずり込まれた彼らが、目を覚ます事は二度とない。ユアンと共に、彼らも死ぬ運命なのだ。

「——嘘だよ…そんな事ユアンが願うわけがない」

茫然と、震える足で立ち上がり、ケリイは言う。サナトスは可笑しそうに首を傾げて見せた。

『——何故、そこまで僕を美化するの。』

僕だって人間だもの、嫌な部分だってあるよ？

ケリイを手に入れられるなら、僕は何も惜しくない』

ワザとらしく肩を竦め、サナトスは言う。

…確かに、その通りだ。そうケリイは思う。

誰にだって親切で、天使のように振る舞うユアンだったが、彼にも、弱い部分はあるのだ。その弱さが、もしかしたら本当に…ケリイへの執着心として現れていたのかもしれない。…しかし、例えばそうだとすると、ケリイはサナトスの言葉を否定したかった

「——それが…本当だったとしたら、なんで…？」
真つすぐにユアンを見つめ、ケリイは言う。

「なんで——僕に話してくれなかった？」

脳裏にあるのはいつかの記憶だ。ユアンに捧げた、四つ葉のクロ―バーの、その記憶。『願い事が決まったら真つ先にケリイに教えるから』そう、ユアンは話していた。なのに。

「それが…ユアンの、一番大切な願い事だったんなら。

なんで僕に話してくれなかったんだよ…」

もし、ケリイに話してくれていたら。ユアンはきっと、サナトスなんか必要としなかった。その事が悔しくて、ケリイは顔を伏せる。思い切り拳を握り、殆ど怒鳴りつけるように叫んだ。

「…なあ！ どういう事なんだよ、ユアン！」

僕はあの日からずっと、君の願い事聞くの、待ってたんだぞ！」

それはサナトスではなく、もう居なくなってしまったケリイの親友への叫びだ。遠くに行ってしまう彼に、どうしても伝えたい、悲痛な想いだ。

…そしてその言葉に、サナトスの笑みは凍り付く。

『——…僕ノ…本当ノ願イ？』

驚いたように目を見開き、サナトスは呟く。そしてその両目から、

今度こそ本物の涙を零した。ぽつりぽつりと、ユアンの涙が教室の床を濡らしていく。

『…ああ。僕は、なんて事を』

苦しそうに、その両手で顔を覆う。震えるその声は間違いなくユアンの声で…

『——お願い、ケリイ。もう一度あのクローバーを探して…』
涙で輝く瞳を持ちあげ、ユアンは真つすぐに、寂しそうに、ケリイを見た。

『そしたら…今度は絶対——』

「…ユアン!？」

悪い予感がして、手を伸ばした。しかし届かず、ユアンの姿は闇の中に溶けてしまう。

薄暗い空に僅かに日が差し、止まない雨の音だけが、まだそこにあり続ける。

ケリイが親友に差しだした手は、虚しく宙を掴んでいた。茫然と、ただ茫然とその指先を見つめる。

「——連れて行かれたんだ。」

ボソリと、背後に立つエルピスは呟いた。

「スリープシスは…人間の魂を食らった後、死の世界に向かう。」

…そこで、新たな災厄として生まれ変わるんだ」

淡々と告げられる事実。ケリイはエルピスを振り返った。

「——言っただろう。ユアンはもう、長くなかったのだと」

助ける術など、もう無いのだ。そう言っただけ俯くエルピス。

ケリイの中で、何かが完全に壊れる音がした。

ユアンが倒れてから今までの間、なんとか形を保っていたそれが、

粉々になって、そして消え去ってしまったのだ。

■ ■ 第十五章 ■ ■

雨が降っていた。全ての音を掻き消す為の雨が。

灰色の滴は、天に昇った太陽の光を濡らし、草や土、深い眠りに着いた人々の眠る部屋の、窓硝子を叩く。そんな暗い空の下、今にも飛びそうになる意識を支え、パラディはボロボロの身体を宙に彷徨わせていた。

——なぜ、わしは生きているのじやろう…

雨に洗われてもなお、身体中から溢れ出す血液が足元に滴った。

グラリと傾く身体は、気を抜けば即、落下してしまう。それでも、パラディは前に進み続けた。胸が痛くて苦しくて。堪え切れない涙が、幾度も頬を垂れる。

——なぜ、わしは…、大切な人を、また守れぬのじやろう…

ようやく辿り着いた校舎の窓に手を付け、パラディは何度も、その硝子を叩いた。しばらくの後、エルピスの手によって開けられた窓から、教室に入り、その隅で蹲る黒い人影を抱き締める。

「——お前は、生きていただけでも上出来だ」

そうエルピスは慰めるが、それでパラディの後悔が消えるわけがなかった。

「…っ…すまぬ！」

涙でむせぶ。視界も意識も、既に朦朧としていた。本当に、今生きている事が奇跡なのだ。

「すまぬ…ケリイ！…この身体ではもう、

お主の苦しみを、代わってやる事もできぬ…！」

見上げたケリイの瞳は、薄闇の中で暗く影を落とし、まるでそこに穴でも開いているかのようにだった。それを前に、パラディはまた大粒の涙を零す。

「――…聞こえるだろ？」

ふと、ケリイが口を開いた。

「ああ、君にも聞こえるよね。パラディ。ユアンが…泣いてるんだ」
そう言つて、ケリイは顔を上げる。真黒な瞳で、不思議そうに辺りを見回す。

雨の音しか聞こえないこの教室で、ケリイだけが何かを感じ取っているらしい。耐え切れなくて、パラディは顔を伏せた。

――泣いてるのは、お主の心じゃ。ケリイ…！

何故、こんな時でも涙を流さないのだろう。崩壊した心を抱き締めたまま、絶望の闇を見たというのに、何故ケリイは弱音の一つも吐かないのだろう。

だからケリイは、壊れてしまった。全てを失つて、そして元に戻せなくなつた。

「ユアン…どこ…？ 僕…行かないと」

既に教室の床は、真っ赤に染まっていた。見ればケリイの右足の肉が抉られている。止めどなく流れる血液が、キボウツキのマントを、そして床を濡らしていたのだ。

恐らく、この足には既に感覚がない筈。しかしそれでも、ケリイは立ち上がるうとしていた。ガタガタと震えながら、壁に掴まり、必死に身体を起こす。途端、エルピスが顔をしかめた。

「――やめろ、ケリイ。二度と走れなくなるぞ。」

しばらく身体を休めれば、その程度の傷は簡単に塞がるだろう。しかし、今の状態で無茶をすれば、いくらキボウツキとはいえど、神経に支障が残る可能性がある。

そう言つて、エルピスはケリイの腕を掴んだ。グラリと身体が傾き、ケリイはそのままエルピスの胸の中に顔を埋める。

「…もう。どうだって良い」

ぼそり、呟いた。

「ユアンが…待ってるんだ。僕が見つけてあげないと…親友…だか

ら」

顔を上げたケリイの、その左目に黄金色の炎が宿ったのを見て、エルピスは僅かに目を細めた。ケリイは“確立の瞳”を起動させたのだ。その能力でユアンを見つけ出せると、信じ込んでいるのだ。

…しかし、その瞳に宿る数字は“零”だった。

「ケリイ…」

また一粒、涙を零して、パラディは言う。

「もうやめるんじゃない？ ケリイ」

感情を失ったケリイの、その乾いた頬を撫でる。しかしケリイは、パラディに見向きもしなかった。

「——絶対、見つけてみせる。見つけてやる見つけてやるミツケテヤル…」

狂った唇でそう呟いて、ケリイはふらりとエルピスから離れる。挟めた右足を引きずって、ケリイは歩いた。

「やめる…ケリイ！ 行くな！」

教室の扉に手を掛け、外に出ようとするその身体を、パラディは必死で引き止める。

こんな状態のまま、冷たい雨に打たれては…ケリイは死んでしまう。そう感じたから、必死でその腕を引っ張ったのに…

「——うるさい！」

怒鳴られ、次の瞬間、パラディの身体は弾き飛ばされていた。殴られた衝撃に、意識が霞み始める。

「…ケリイ」

視界の中で、ケリイの背中の輪郭がブレていく。

一度も振り返る事なく、廊下に出たケリイの足音は、ズルリズルリとしばらく続き、そして消えた。

「うう… ひっく…」

胸が痛かった。また一人、大切な人を守れなくなった自分が悔し

かった。

教室の机に叩きつけられたパラディは、散乱した筆記具や、教科書類の中でゆっくりと上半身を立ちあげる。…その瞬間、パラディの視界に飛び込んでくるものがあつた。床に落ちた、一冊のスケッチブックだ。

そしてパラディは、こんな高価なものを学校に持ってくる人間を、一人しか知らない。

「——ユアン…の？」

驚きに息を飲み、パラディは手を伸ばす。

ユアンがそれに鉛筆を走らせる姿を、パラディは何度も見ていた。しかし、その中身を見るのは、初めてかもしれない。妙な胸騒ぎがして、パラディはスケッチブックを開く。

そうすれば、そこにあるのは教室に居る子供たちの笑顔。

見事に特徴を捉えた彼らの似顔絵は、全生徒分あるのではないだろうか。そう考えた時、パラディはある違和感に気づいた。

『…？』

震える手で、ページを捲る。今度は運動の授業のスケッチだ。

校庭を走る生徒たちが、細かく描かれている。また、ページを捲った、今度はゴム玉蹴りに興じる男の子らの姿が描かれていた。

——…な…ぜじゃ？

目を見開いた。またスケッチブックを開き直し、バラバラとページを捲って行く。

——何故…ケリイの絵が無いんじゃ？

信じられない気持ちで、パラディは唇を動かした。

ユアンの視線の先にはいつだってケリイが居た筈なのに、その絵の中にはケリイの姿が欠けていた。本来ケリイが描かれる位置が空白だったり、黒く塗りつぶされていたりで、意味が解らない。

…そして、茫然となるパラディの様子に興味を持ったのだろう。

エルピスが背後から覗きこんで、呟いた。

「――なるほど。これがユアンの願いの、正体か」

そう言つて、パラデイの手からスケッチブックを奪う。バサリと乱暴に振れば、そこから、茶色く変色したクローバーが落ちて来た。葉の数は四枚。それは随分と古びていて、摘まれてから既に、数年の月日経っているように見えた。

…そして、そのクローバーの挟まっていたページを目の前にし、パラデイは息を飲む。

それは校庭で短距離走の測定をしている、生徒たちを描いた絵だった。

本来ならば、その先頭を走るのはケリーの筈だが…この絵では違う。ケリーよりもやや低い背に、明るい色の柔らかな髪。

幼げなこの顔は、間違いなく、ユアンだ。楽しそうに笑いながら、ユアンが先頭を走っている。驚いて、パラデイはエルピスを見た。

「この絵から…サナトスの気配がする。

まだ辛うじて…こちらの世界に踏みとどまっているようだな」

ぽつりと、エルピスは呟き、そして溜息。

「…参ったな。この手だけは使いたくなかったのに」

肩を落とし、エルピスはスケッチブックを地面に広げた。黒い炎が、彼の身体を覆っていく。そしてその炎の中から、小さな黒蛇が姿を現した事に驚き、パラデイは思わず一歩後ずさった。

――…サナトスか？

「そう。以前ケリーが捕まえた破片だよ。

完全に吸収するのは嫌気がしたから、少しだけ残していたんだが

…」

くしゃりと、頭を掻き、エルピスは言う。

「ユアンの魂が今も、サナトスの核を持っているのなら…役に立つかもな」

破片は常に、核に引き寄せられるのだ。その事実を示すように、エルピスから這い出た破片は、ゾロゾロとスケッチブックににじり寄って行った。

それを見て、エルピスはニヤリと微笑む。

次の瞬間には黒い炎を放ち、スケッチブックごと、破片を燃やし始めた。

『……!!』

何をするんだ!… そう言いたくて、パラディは手を伸ばした。

それはユアンの大切な物。ケリイにとっても大切な思い出なのに、何故…?

しかし、エルピスは瞳を輝かせ、言うのだ。

「見る、パラディ。これがユアンの本当の願い。サナトスの見せた、悪夢の正体だ!」

そう叫んで、全ての炎を、教室の窓にぶつける。

空気が裂けるような、轟音が鳴った。辺りは震え、そして窓の向こうの空は、見る見るうちに晴れて行く。

——これは…は…

茫然と、パラディは身体を浮かせ、外を見た。

晴れた空の下、四つ葉のクローバーの咲き乱れる校庭に、教室中の子供たちが集まっている。彼らは今、地面に引かれた線の前に並び、教師の放つ笛の合図を待っているのだ。

そしてその中心に、ユアンは居た。

——これは… どういう?

目を見開き、パラディはエルピスを振り返る。

途端、その視界に入ったのは、ダラダラと汗を流し、苦痛に顔を歪めたエルピスの姿。飄々として、ふざけた発言しかないような… 普段の彼とは程遠い姿。

…そう、彼は今、自身の力を媒体に、サナトスを操っているのだ。
ユアンに取り憑いたサナトスの末路を、ケリイやパラディの目にも見えるよう、力を尽くしているのだ。

「…行つてやれ。パラディ」

ニヤリと口を歪め、エルピスは言う。

「まだ…お前ならまだ、あいつらを救つてやる事もできる」

そしてその言葉に、パラディは、はっとした。

…そうだとも。自分はこれからもずっと、ケリイを守つてやらねば。ケリイの傍に居てやらねばならない。

先知のスリープシスであるエルピスが今、パラディの未来に何を感じ取ったのか。それが不思議と解る気がして、パラディは窓を開いた。

青い空が見える。小鳥のさえずりに紛れて、子供たちの明るい笑い声が聞こえた。

——ケリイと…ユアン、か。

ふと、パラディは亡き友を思い出し、微笑む。

ふわりと外に飛び出し、振り返つて、エルピスに手を振った。

『お前に会えて、わしは少しだけ、楽しかったぞ』

その声は、彼に届いたのだろうか。

教室を出たパラディの目にはもう、エルピスの姿は見えなくなつてしまつた。

■ ■ 第十六章 ■ ■

動かない右足を引き擦り、なんとか校庭に出た時には、既に雨が止んでいた。

奇妙に思い、空を見上げれば青空が広がってる。どこかで見た事のあるような形の雲が空に浮かび、太陽は昼の日差しを地上に注いでいる。

「なに…これ？」

呆けて眩き、ケリイは校庭の中心へ、足を運んだ。

不意に、視界の中に燃える数字が“一”を示す。

驚いて辺りを見渡せば、そこには、一面の四つ葉のクローバーがあった。

間違いなく、ここはケリイの知る校庭ではなかった。そしてケリイは、そんな校庭の片隅に集まる人だかりに気づく。

『——おい、ケリイ！遅いじゃないか、待ってたんだぞ！』

それは、遊びたい盛りの少年に相應しい、乱暴な声である。名を呼ばれた事に驚いて、振り向けば、そこにユアンが居た。

「……！」

息が、止まる。

キラキラと瞳を輝かせたユアンが、こちらに向かって走ってくる。その背後には、楽しげに笑う子供たちの姿。皆ケリイに向かって手を振って、早くこっちに来いと催促していた。

『さあ、ケリイ、行こうぜ！今日こそは、君を追い越してやるんだから！』

ケリイの腕を掴み、ユアンは言う。

気が付けばケリイはキボウツキの変身を解いていて、足の怪我も消えていた。

奇妙な気持ちで右足の感覚を確かめるが、そうこうしているうち

に、身体は勝手にユアンに引き擦られ、地面に引かれた線の前に持って行かれてしまう。

…これは、短距離走の授業の時、教師が引く線だ。それに気づいて、ケリイは、はつとする。

線の前に次々と整列する十二人の子供たちの顔を、ケリイはよく知っていたのだ。

ハルが居る。同じ教室で語り合った仲間が、そこに全員揃っていた。…彼らは確か、サナトスの手により覚めない夢に封じられたのではなかったか。

「…なんで？」

ケリイは今、幻覚でも見ているのだろうか。首を傾げたケリイの肩を、ユアンは面白そうに叩いた。

『ほら、走る準備をしてくれよ。もうすぐ、先生の笛が鳴る』

そう言つて、ユアンはケリイを見上げる。

日に焼けた肌や乱暴な口調は、ちっとも彼らしくなくて。なのに、その瞳の中に、本当のユアンの姿が見えた気がして…。ケリイは息を飲む。

何処からか、笛の音が聞こえた。

それを合図に、走り出す生徒たち。ユアンに手を引かれ、ケリイも走った。

「…はつ…はつ…！」

次々と、ケリイは生徒たちを追い越していく。いつものように先頭に立ったケリイに、ユアンだけが追い付いてくる。

一瞬だけ追い越され、それをまた追い抜き、二人は走る。

『…はあ…っ…はあ！』

そして、ゴールに着いたのは僅かにケリイが先で。ユアンは肩で息を切って唸った。

『やっぱり…っすごいや、ケリイは…!』
そう言つて彼は、ちつとも美少年らしくない、くしゃくしゃの笑顔を見せる。

振り返れば、そこに他の生徒たちの姿はなかった。

ケリイとユアン。たった二人きりになってしまった青空の下で、ユアンは眩しそうに目を細めていた。

『…ああ。やっぱり僕じゃ、君には適わないんだね』
その事がわかつて、嬉しい。そう言つて、ユアンはケリイを見上げる。

ケリイよりも、頭一つ低い背の少年の笑顔は、何故か今にも泣き出しそうだ。

「ユアン…?」

不安で、それ以上にその身体に触れたくて、ケリイはユアンに手を伸ばす。

しかし彼は、ゆっくりと頭を振つて、その手を制した。

『ケリイ、僕はきつと、君に憧れていたんだね』

まるで、自分に言い聞かせるように、ユアンは言う。

『僕は病気があるから、いつ死ぬか判らないって言われ続けてたから…』

いつの間にか、生きる事を諦めていたんだ。でも君は、そんな僕に目標をくれた』

ケリイに追いつくまで、頑張つて生きていたい。

そう思えるようになったのだと、ユアンは言う。その瞳は既に、涙で潤み始めていた。

『…今から少しだけ…僕は遠くに行かなくちゃいけないけど。
でも僕は君をこれから、追いかけるから、』

もし次会う事があつたら、その時は絶対、ケリイよりも速く走ってみせるから』

笛が、鳴る。

「——っ！ユアン！！」

『来ないで！』

ケリイの手を振りほどこき、ユアンは再度、コースに足を踏み出した。

その道の先に、白い光がある。そこに辿り着いたらもう、ユアンは二度と戻って来ないだろう。

それが解つたから、ケリイは何度も名前を呼んだ。しかし、ユアンは振り向いてくれない。

『ケリイ……ありがとう。君に会えて、良かった』

震える声で呟いて、ユアンはゆっくり歩き出す。

追いかけたいのに身体が動かないのは、これがサナトスの夢の世界だからなのだろうか。それともケリイが無力なだけなのだろうか。

悔しくて、噛みしめた唇に血が滲んだ。ユアンの背が、どんどん光に掻き消されて行く。これ以上見たくないのに、目が離せない。そんな時、声が聞こえた。

「——ケリイ！」

ボロボロの姿で宙を飛ぶ、それはパラディだ。

彼女はケリイの肩を掴み、そして言った。

「早く、ユアンを追いかけるんじゃ！」

このままでは、手遅れになると、パラディは叫ぶ。しかしケリイは、ただ頭を振った。

「…もう、無理だよ」

ボソリと、そう呟く。

「これは…ユアンが自分で決めた事なんだ。僕にはもう、何もできないよ」

声が、震えていた。目の前にあるパラディの顔が、見る見るうちに怒りに染まっ て行くのが見える。

「馬鹿もん！お主は一体、何の為にキボウツキになったんじゃ！」

パラディは叫んだ。小さな平手が飛んで、ケリイは啞然と目を見開く。

「わしが…最初に教えたではないか。キボウツキの決意は、運命を切り開く炎を生む。

何故、それを忘れておるのじゃ…！」

「——決意の…炎？」

ぼんやりと、ケリイは口を開く。確かに、あの能力はサナトスを灰にする事ができる。

しかし、今ではサナトスはユアン自身であり、彼を攻撃する事など、出来るわけがなかった。

「…それに。僕はもう、あんな技、使えないよ」

そう呟いて、ケリイは俯いてしまう。

…空っぽなのだ。ケリイはもう、何の感情も持てなくなってしまっているのだ。

心の中には既に、炎を灯せるような熱い感情はなく、だからケリイは全てを諦めていた。

「良いんだ…これで…」

叩かれた頬に手を当てた。顔を上げる勇氣もないのだ。このままユアンが遠くに行けば、それでケリイは終わる。サナトスは、ケリイの大切な人々を死滅させる災害となり、昇華するのだろう。そこに未来など存在してなくて、ケリイは自嘲気味に唇を吊り上げた。

ぼつりと、目の前で零れた滴がある。

「わしは…嫌じゃ」

「…え？」

パラディは泣いていた。そういえば彼女は、先程からずっと涙を堪えていたのだ。

引き攣る声で、パラディは言葉を紡ぐ。

「こ…これで良いわけないじゃろ。」

わしはケリイもユアンも…教室の皆も、大好きなんじゃ。別れて欲しくないんじゃ…」

…だから決意してくれ。と、パラディはケリイの頬に触れる。

傷だらけで、涙の跡が情けないその顔は。それでも真っすぐに、ケリイを捉えていた。

「…何も心配するでない。お主にはわしが付いておる。」

わしはいつだって、お前と共にいる」

そう言つて、パラディは笑う。

「ケリイ…わしは…——お主自身なんじゃ」

その言葉が、ケリイの胸を僅かに熱くする。目を見開いた。そこには真紅の炎が…

——炎に包まれたパラディの姿が、あつた。

「走れ、ケリイ！」

パラディは、叫ぶ。みるみる内に燃えて行く身体を抱え、齒を食いしばつて、ケリイを睨む。

「う…あ…」

茫然と、ケリイは炎に飲まれた彼女を見上げる。

…もう直ぐ、パラディが消えてしまう。

その事に気づいた時、足は勝手に走り出していた。

「う あ あ あ あ ……！！！」

走る。ケリイは走る。今までにない速度で、何よりも大切な決意を抱えて、ケリイは走る。

コース半ばを駆け抜けた時には、目を見開き、こちらを振り返ったユアンの顔が見えた。

彼の目指すゴールはもう間近。それでも、間に会ってくれとケリイは願う。

炎を纏ったパラディは、そのまま白い光へと突進した。途端、世界は爆発したように純白に染まる。眩しくて、目を瞑った。身体中が震えて、呼吸すらまともに出来ない。

——ユアン…パラディ…！

ただ、その姿が見たくて、ケリイは必死で瞼を持ち上げる。しかしその時、ケリイが見たものは広い海原だった。いつの間にかケリイは、蒼い海を渡る白い橋の上に居て、ただひたすらに走っていたのだ。

——流れ込んでくる、この感情はなんだろう。

胸が、熱い。熱くて堪らない。

切れる息の狭間で、澄んだ青空を見上げれば、そこから落ちて来る巨大な飛行船の姿。黒い煙を噴き上げて、白い機体が海に落ちて行く。ケリイは走った。届け、間に合えと願いながら。そうして辿り着いた、飛行船の墜落現場で、ケリイはようやく立ち止まる。

沈みゆく飛行船の窓から、ケリイに向かって手を振る、二人の男女の姿が見えた。

『ケリイ…ケリイ…！』

女性は言う。黒く、長い髪を高く結い、白い頬に大きな瞳は、ケリ

イにそっくりだ。

『ずっと、愛しているわ！…ずっとよ…！』

そう言つて、微笑む女性の隣で、褐色の髪 of 男性が叫んだ。

『幸せになりなさい』

飛行船はゆっくりと、とてもゆっくりと海に沈んでいく。

気が付けば、ケリイもまた、手を振っていた。

瞳の縁に溜まつた涙が、頬を伝つて流れて行く。

あの日以来、一度も流れる事のなかったそれが、止めどなく溢れて、そして海に溶けて行つた。

「父さん、母さん…！」

随分長い事忘れていた顔を、そしてその声を、ようやく思い出せた気がする。

轟音と共に、海の中に消えて行くその姿に向かつて、ケリイは何度も何度も手を振つた。

沈む機体には、樂園を意味する異国語”Paradise”の文字。

ケリイは、その文字が完全に見えなくなるまで、手を振るのを止めなかった。

——…ああ。僕はひとりになつたんだ

真つすぐに背を伸ばし、遠くの海を見つめる。涙を拭えば、少しは視界が開けるかもしれない。そう思つて、顔を擦つた。なのに、涙は後から後から溢れ出ししまう。

「——…！…！」

見上げれば、そこに広がるのは青い空。波の音だけが、穏やかにケ
リイを包んでいた。

■ ■ 最終章 ■ ■

ユアンが大陸に旅立つ日の朝、少しだけ早く起きたケリイは顔を洗い、窓の外の天気を確認する。今日は、久しぶりの快晴だ。

強い日差しが、島の温度を一気に高め、少々焦げくさい土の匂いを運んでくる。

イトウリープ島の夏は短いが、ユアンの居なくなった後なら、それすらも長く感じるのだろくな、と、ケリイは溜息をついた。

「…ねえ、今日くらいは、私の若い頃の服…着てみない？」

貴方はもうちょっと、お洒落して行った方が良いと思うわ」

朝食の後、髪を梳いてくれた義母が、そんな事を言いだしたものだから笑ってしまう。

ケリイは普段通りの吊りズボンのまま。机の上に置いていた白銀色の小箱だけをポケットに詰めて、家を出た。

…この箱の正体は、パラディ。つまり、新しく生まれた封印の箱なのだ。

あの日、深い眠りから目を覚ましたケリイとユアンの前に落ちていたのがこの箱で、エルピス曰く、これがパラディの末路なのだと云う。

『そもそも、ポイメーンと封印の箱は同じなんだ。中に入れる物が違うだけ』

そう言って、エルピスは少し寂しそうに笑った。

全ての記憶を開放したポイメーンは、自我さえ失って、ただの容器になってしまう。

それはポイメーンにとっての死であり、そして見守られていた側の人間にとつては、苦難の始まりであった。事実、あの後ケリイは、過去から続く孤独に襲われ、眠れない夜を過ごしている。

「——ケリイさえ望むのなら、その苦しみを感じないようににもできるのだが……」

ある夜、枕元に姿を現したエルピスから、そんな提案を受けた事がある。しかしケリイは、その申し出を断る事にしたのだ。

……だって、この苦しさは、パラディの決意の重さなのだから。いつだってケリイと共に居てくれると誓ってくれたパラディの末路なのだから。ケリイは耐えて生きて行かなければならないと思う。

——パラディは、サナトスを封印する為に、死を選んだんだ。

新たな封印の箱として蘇ったその姿は、余りにも小さく、傷だらけで……

だからケリイは、箱を見る度にパラディを思い出す事ができた。

ポケットの上から小箱を撫で、ケリイはユアンの家へと向かう。

……そろそろ、港には教室の仲間たちが集まっている頃だろう。

本来はケリイもそこで、皆と一緒にユアンを見送る筈だったのだが、今朝は特別に、二人だけで会いたいのだと、ユアンから頼まれていた。

森の中の坂道を抜け、ケリイは青い屋根を目指す。

まだ右足には違和感があったが、それでも傷は、殆ど塞がっていた。少しだけ速足になってみる。視界を遮る木々はほとんど姿を消して、ブルーイット宅の花壇が露わになってきた。庭先のスコッチローズは連日の雨で大分その花を落としていたが、それでも新たな季節を迎え、瑞々しく咲き誇っている。

「——ケリイ！」

そんな生垣の前で、ユアンは嬉しそうに手を振っていた。

その手には大きなトランク。目深に被った帽子と、マフラーは、これから始まる船旅の対策だろう。

「…どうせなら、サナトスと一緒にユアンの病気まで封印できちゃえばよかったのにね」

ユアンからトランクを受け取り、ケリイはそう、頭を掻く。

「ふふ…。世の中そんなに、都合良くはいかないものなんだよ」

そう言っ、楽しげに首を傾げたユアンは、あの時…サナトスに取り憑かれていた頃の記憶を持っているらしい。

だからケリイは、全て知って欲しいと思った。

パラデイの事も、エルピスの事も。ユアンには全部話すことにした。そして話の終りに白銀色の箱を見せた時、ユアンは泣いたのだ。自室のベッドの上で、ぼろぼろと涙を零し、ユアンは泣いたのだ。

「——ね。パラデイに会わせて？」

促され、ケリイはポケットの小箱を取り出す。ユアンはそれを取り、優しく何度も、箱の傷跡を撫ぜた。

「ありがとう、パラデイ。僕はもう、行くね」

その言葉で、ケリイの胸は少しだけ、痛くなった。

ユアンはこれから、大陸の病院に入院する事が決まっている。

彼の持病を治療する為の技術が、大陸内で開発されたのだと云うのだ。だからユアンは、これから手術を受けに行く。

本当に効果があるのかはまだ不確かで、不安の多い手術であるが、それでもユアンは自ら、それを受けたいと志願した。

「…きっと、治せるよ」

そう言っ、ケリイは、我ながらわざとらしい、引き攣った微笑みを作る。

手術がもし失敗したら、ケリイは二度と、ユアンに会うことはできないだろう。

そうじゃないとしても、これから何年という長い期間、ユアンと離れ離れになる事は確実なのだ。寂しくないわけがない。不安がないわけがない。

それでも、親友の笑顔を前にすると、そんな弱音は吐けなくなってしまう。

「ケリイ。あのね……」

二人の間を、柔らかな風が通り抜けた。ユアンは少しだけ困ったように辺りを見て、

そしてケリイに一枚の紙を差し出した。

二つ折りにされたそれを開けば、そこにあるのは水彩絵の具で描かれた一枚の絵で……

「これが、今の僕の最高傑作なんだ。ケリイにあげる」

「……最高傑作って」

なんだか、妙に顔が熱かった。そこに描かれていたのはケリイの姿で、

何故か真っ白い綺麗なドレスを着て微笑んでいる。

「ケリイって……他の女の子とは違うから、いつも巧く描けなかったんだけど。」

これだけは成功した気がするんだ」

恥ずかしそうに頬を染め、ユアンは言う。

「……僕にとってケリイは、いつだって……一番大切な女の子だから」
ユアンの照れが伝わって、ケリイまで赤面してしまう。

女の子。そんな事を言われたのは、本当に久しぶりだった。

一人で生きて行かなくてはと思っていたから、男よりも強くならねばとばかり考えて、これまで過ごしてきた。だからケリイは泣かな

いいし、弱音も吐かない。

…でもユアンには、そんな強がりは無意味だったのだろうか。ユアンの前でなら、もう一度女の子に戻っても良かったのだろうか？

絵を持つ手が震えて、駄目だと解つても、涙が頬を伝った。

「あのね、ケリイ」

気が付けば、ユアンもまた、泣いていて

「僕、頑張つて病氣治すから。今度は男として、君を守れるようになりたいから…」

驚いて、ケリイは顔を上げた。

「だから…ケリイ。僕がまたこの島に帰って来れたら、その時は…」

——僕のお嫁さんになつてください」

震える声で、それでも決してケリイから目を逸らさない翡翠色の瞳。思わず、手を伸ばした。

温かなユアンの手が、それを優しく包んでくれる。

遠くの方で、小鳥が飛び立つ音がした。日は先程よりも高く昇り、空は明るさを増す。

もう間もなく、ユアンの乗る船が、港に到着してしまうだろう。

「——ユアン」

だからケリイは、それに続く言葉を失う。

ただ、その温かな手をギュッと握り返し、ケリイは俯いてしまった。

イトウリープ島に夏が来る。

少しだけ大人になった少年たちの学生生活は間もなく終り、そして新しい何かが始まるのだらう。

ケリイとユアン。若い二人は手を繋ぎ、ゆっくりと前へ進み出し

て
い
た。

■ ■ ■ あとがき ■ ■ ■

最後まで読んで下さった方、お付き合いありがとうございました。もし気に入って頂けましたら、感想や評価、お気に入り登録などのリアクション頂けると、すごく嬉しいです！

・・・そして、以下でこの小説の裏話を語らせて頂きます。

当作品は、過去に連載していた「KERI」を投稿小説用に書き換えた物です。この手の物語をこのボリュームで完成させたのは初の試み……。展開が駆け足になっていたり、反省点の多い作品ではあるのですが、半年ほどかけてみっちり練り込んだ作品ではありますので、読んで下さった方に何かしら伝わる物があれば幸いです。

また、蛇足ではありますが、「KERI」を書き始めたきっかけはニコニコ動画で「ブラック ロックシューター」を久しぶりに聞いて、改めて感動してしまった事に由来します。

かなり有名な曲ではありますが、あの曲の感動を自身の手で再現するとうなるのかなー。と考えながら構想したのがこの物語です。

キャラクターの外見もかなりパロっておりまして、衣装もマンマですし、炎を出すあたりもマンマですね。あと片目キャラってのも
ww

・・・まあ、それ以上のパロディが、物語の中のアちこちに散らばっておりますので、気付くと笑えるかもしれませんww

『勇気が火を灯してもう逃げないよ』

『独りじゃない！声を上げて泣いたってかまわない』
『今から始まるの。私の物語』

いやあ。本当ムネアツな曲ですよねえ！

ただ、今作だとテーマの未消化部分が気になるので、また同じテーマでリベンジさせてもらう事になりそうです。

その時はまた宜しく願いします！

・・・

そして、次回作もモソモソ執筆中ではあります。

予想以上に難産しておりますが、恐らく来年頭までには公開できるかと。

今度は15禁くらいのアダルトシーンがあるホラーになる予定です。そういうの苦手じゃない方は、またお付き合いくださいね♪

ではでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1415v/>

パラディソス・ストーリー

2011年10月9日16時51分発行